

長崎県文化財調査報告書 第207集

# 長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ

詳 説 編

2 0 1 1

長崎県教育委員会

## はじめに

本書は、長崎県教育委員会が国（文化庁）の補助を受けて平成17年度から平成22年度までの6ヶ年にわたり実施した中近世城館跡分布調査の成果をまとめたものです。今年度は第2集として、県内の主要な城館跡の縄張図や概略図を掲載しております。

長崎県では、鎌倉時代から安土桃山時代にかけて多くの城郭や館が築かれてきましたが、江戸時代に発せられた一国一城令により廃城となり、石垣などの遺構が残存するもの以外はその所在や形状をあらわす十分な記録が残っていませんでした。

そうした中、近年、携帯電話のアンテナの建設工事をはじめとする山間部における開発行為が頻繁に起こり、中近世城館跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として把握することが急務となってきました。

本来、城館跡は地域の中心的な場所に立地し、地域を象徴するものです。それらを保存・整備し、地域の歴史的教材や文化的遺産として活用していくことにより、地域の人々が誇れるものとなっていくと考えます。

本書が中近世城館跡の保護と今後の保存・整備に生かすことのできる基礎資料として十分に活用されることを願うものです。

最後となりましたが、この事業を進めるにあたり、ご指導いただきました調査指導委員会委員の先生方をはじめ、文化庁、ご協力いただきました関係各市町教育委員会などに対し、心より感謝申し上げます。

平成23年3月31日

長崎県教育委員会教育長  
寺田 隆士

## 例 言

1. 本書は、長崎県教育委員会が文化庁国庫補助金を受けて実施した長崎県中近世城館跡分布調査事業の報告書第2集である。
2. 調査は平成17年度から平成22年度までの6か年実施しており、本報告書は分布調査の成果に基づき遺構の残存状況が良好な城館跡の縄張り図や概略図を掲載したものである。
3. 本書に掲載した縄張り図や概略図は、基本的に長崎県教育委員会が作成し製図したものであるが、既存の縄張り図がある場合はその図を引用し製図をおこなった。引用資料があった場合は、その旨を各縄張り図のキャプションに記述している。また、概略図については現長崎県立長崎北高等学校教諭本田秀樹氏が一部を除き作成した。
4. 縄張り図・概略図の番号は、「報告書Ⅰ」の地図番号である。
5. 本書に記載された各城館跡の時期・歴史については、文献や資料などを参考にしたものであるが、築城者や年代などは伝承による情報も含まれている。
6. 本調査で収集した基礎資料は、長崎県埋蔵文化財センターに保管している。
7. 本書は分担執筆し、第6章第3節 石田城跡・森岳城跡・日野江城跡・原城跡・原城陣屋跡と第4節を林・宮武が、その他を寺田が担当した。また、第6章第1節は、長崎県参与本馬貞夫氏の指導助言を受けながら寺田が執筆した。
8. 本書の編集は、長崎県埋蔵文化財センター 林・宮武、学芸文化課 寺田がおこなった。
9. 縄張り図・概略図の方位は磁北(M・N)を示している。

## 本文目次

はじめに

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 第5章 平成22年度の調査成果および調査組織について | 1   |
| 第6章 長崎県中近世城館跡詳説            |     |
| 第1節 歴史的背景と城館の概要            | 2   |
| 第2節 縄張り図と概略図の記述・表現について     | 6   |
| 第3節 縄張り図                   | 9   |
| 第4節 概略図                    | 126 |
| 第7章 まとめ                    | 161 |

### 「長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ 地名表・分布地図編」目次

|                     |  |
|---------------------|--|
| 第1章 中近世城館跡分布調査事業の概要 |  |
| 第1節 調査の経過           |  |
| 第2節 調査の方法           |  |
| 第3節 調査の組織           |  |
| 第4節 調査の結果           |  |
| 第2章 中近世城館跡一覧        |  |
| 第3章 中近世城館跡分布地図      |  |
| 第4章 文献一覧            |  |

## 第5章 平成22年度の調査成果および調査組織について

### I 調査の経過

○詳細調査…南島原市原城・原城陣屋跡・日野江城跡、長崎市俵石城跡、大村市政島城跡、島原市森岳城跡、平戸市亀岡城跡、佐世保市武辺城跡・井手平城跡

○調査指導委員会

【第1回】・日時……平成22年11月18日(木)

- ・内容……・平成22年度事業報告
- ・調査報告書について
- ・県内重要城館について〔文化庁報告案の検討〕

【第2回】・日時……平成23年1月25日(火)

- ・内容……・調査報告書について
- ・県内重要城館について〔文化庁報告案の検討〕
- ・彦根市内城館跡現地指導

### II 調査の組織

#### 1. 調査指導委員会

|        |       |                         |
|--------|-------|-------------------------|
| 委員長    | 服部 英雄 | 九州大学大学院教授・中世史           |
| 副委員長   | 本馬 貞夫 | 長崎県参事・文献史学              |
| 委員     | 千田 嘉博 | 奈良大学教授・城郭研究             |
| オブザーバー | 三宅 克広 | 文化庁文化財部記念物課 史跡部門 文化財調査官 |

2. 調査主体者 長崎県教育委員会 教育長 寺田 隆士

3. 調査担当 長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター

[長崎県埋蔵文化財センター]

|         |       |
|---------|-------|
| 所長      | 川久保芳洋 |
| 調査課長    | 川道 寛  |
| 係長      | 町田 利幸 |
| 文化財保護主事 | 林 隆広  |
| 文化財調査員  | 川淵 雅行 |
|         | 河合 恭典 |
|         | 宮武 直人 |
|         | 中村雄一郎 |

[佐世保文化財調査事務所]

|    |       |
|----|-------|
| 所長 | 副島 和明 |
| 係長 | 村川 逸朗 |

[学芸文化課]

|           |       |
|-----------|-------|
| 文化財班      |       |
| 課長補佐      | 古門 雅高 |
| 主任文化財保護主事 | 寺田 正剛 |



## 第6章 長崎県中近世城館跡詳説

### 第1節 歴史的背景と城館の概要

長崎県の地形は、県内各地に半島や離島が多く、間に海を介しているため、中世から近世にかけて強大な勢力を有する大名が成立することが困難な要因がある。また、平野が少なく山がちな地形が多いため、遺構の規模は小規模であり、不明確な部分も多い。言い換えれば、これが長崎県の城館跡の特色であり、一つ一つの城館跡は小規模ではあるものの、複数の城館により地域支配を行っていく構造が成立していると言える。特に長崎県の北部に見られる松浦党関係の城館跡は、標高200mから300mに立地する城館跡が散在し、城域から見下ろすと眼下には交易に適した港や航路を展望することができる。また、館跡と山城が一体となって残存する場合も多い。

第1図は長崎県内における鎌倉時代以前から江戸時代初頭にかけての各地域の主な在地領主層・大名の勢力図である。この表から各地域の歴史的な背景と主な城館の概要についてまとめてみたい。

対馬は、平安時代以来、在庁官人として阿比留氏が勢力を有していた。13世紀半ば、武蔵氏の守護代（地頭代）として宗氏が台頭し、阿比留氏に変わり勢力をもつこととなる。その後、宗氏は朝鮮貿易を基盤として長きにわたり対馬を統治し、その拠点となった館は宗氏一族の対立もあって、志多賀館、佐賀館、仁位館と移った。戦国時代になると現在の厳原に拠点を移し、14代宗将盛の時、金石城を築いている。秀吉の朝鮮出兵の際、対馬は大军渡海の前線基地にあてられ、毛利高政や小西行長らにより清水山城、撃方山城などが築かれている。

対馬島内の城館跡の状況については、館跡の推定地が随所にあるものの現在大部分が宅地化されており明確な遺構は判断できないところが多い。ただ、秀吉の朝鮮出兵に際して築かれた城跡は山頂に位置するものが多く、比較的良好的な状態で残存している。

宍岐は、南北朝のころから松浦地方の有力領主である志佐氏、佐志氏、塩津留氏、呼子氏、鴨打氏の5氏が割拠し、代官を置いて支配していた。15世紀後半ごろ、上松浦地方で勢力を強めた唐津岸岳城主の波多氏が宍岐に勢力を伸ばし、郷ノ浦の亀丘城を拠点として島内の権限を掌握する。16世紀の半ばになると波多氏の家臣であった日高氏が島内で勢力を強め、その後日高氏は松浦鎮信に従属、結果として宍岐は平戸松浦氏の所領となった。

宍岐島内の城館跡の状況としては、「宍岐名勝図誌」にみられるように、最も大規模な生池城跡を中心として、5氏の代官の拠点と思われる比較的規模が小さい城館跡が多数残存する。ただ、その大部分が畑地として開発されており、遺構が不明確なところが多い。秀吉が朝鮮出兵の際に構築させた勝本城については、虎口部分の石垣の残存は良好ではあるが、主郭部分は公園化しており、後世の人為的な掘削が行われている可能性がある。

五島は、諸説あるがおそらく15世紀後半に宇久氏が宇久島から福江島に移住している。それまでは宇久氏のほか、上五島を中心に青方氏、白魚氏、有河氏など青方一族とよばれる小領主が各地を支配していたが、15世紀前半、一同が一揆契諾を結び、その中から宇久氏が台頭していった。その後も、宇久氏は朝鮮との交易により財力を蓄え、平戸松浦氏の援助を受けながら勢力を強めて16世紀前半には江川城を築城した。16世紀末には秀吉から所領を安堵され、朝鮮出兵にも参加、その時、五島氏に改名している。

五島別島の城館跡についてはあまり記録が無く全体的に不明な部分が多い。青方氏の居城である巖山城跡は麓に居館跡があり、城と館の在り方を見る上で貴重な遺跡である。ただ、遺構については五島の全島的に山間部まで栗畑等による土地の改変が行われており、不明瞭である。

県北部では、平安時代の終わりに松浦氏の祖として源久が摂津国から下向し、梶谷城跡に居を構えたといわれている。その一族は、宇野御野（松浦地方）各地に割拠し、海の武士団「松浦党」を形成した。源平壇ノ浦の合戦に平家方として軍船300艘で参戦している。その後、鎌倉時代においては松浦氏一族は地頭御家人となり、下松浦地方では志佐氏、峯氏、植賀氏、津吉氏など、上松浦の松浦党諸家とともに文永・弘安の両役で活躍した。南北朝時代には、松浦党の系譜ではない諸領主も「松浦」を冠するようになり、地縁集団化した松浦一族が国人一揆を結んだ。15世紀の半ばになると宗家を誇称する松浦丹後守家は、今福から拠点を相神浦（佐世保市相浦）に移し、武辺城跡を中心に宗家松浦氏としての基盤を固めていった。

松浦党諸家の一人である峯技の子、持は小値賀島から平戸に本拠を移し平戸姓を名乗った。これが平戸松浦氏の基礎となり、生月・経差・津吉・佐々・田平と勢力を広げていった。1491（延徳3）年、平戸松浦氏の家督相続に端を発し、平戸島の箕坪城を舞台として大村氏・有馬氏を巻き込む大きな争いがあった。その争いに加担した相神浦松浦氏と平戸松浦氏との間に緊張関係が深まり、15世紀末から16世紀にかけて平戸松浦氏による相神浦攻めがおこなわれた。大智庵城・飯盛城と次々と攻め落とし、その結果、相神浦松浦氏は平戸松浦氏に降った。

松浦党に関連する城館跡は、港を見下ろす位置に多く、比較的遺構の残存状況が良い。また、館跡の形態としては、平戸松浦氏の居館跡である館山にみられるように、非常に特徴的な円形プランの主郭を空堀と土塁で断ち切る形状が多く見られる。

県央部は、大村氏とその周辺の領主との勢力争いが頻繁におこった地域である。

大村氏は出自について不明であるが、藤津郡から移り土着したといわれている。ただ、それ以降、戦国時代まで記録はほとんどない。戦国時代になると、有馬氏・西郷氏・平戸松浦氏・武雄の後藤氏などと争いを繰り返している。特に、大村純忠のころは「三城七騎龍」をはじめ、西郷氏・深堀氏との攻防、平戸松浦氏との井手平城・広田城の戦い、龍造寺氏の下での有馬氏への攻撃などをおこなっている。秀吉の九州征伐に際しては本領を安堵され、大村喜前は玖島城を築き、近世大名大村氏が成立した。

西郷氏は肥後菊池氏の一族といわれているが詳細は不明であり、史料上明らかになるのは戦国時代に入って西郷尚善からである。高城を拠点として勢力を強めていったが、16世紀の半ばから、深堀氏と共に大村氏・長崎氏と抗争を繰り返し、秀吉の九州征伐の際に島津出兵を拒んだため改易を余儀なくされた。

大村氏と西郷氏の拮抗した関係は城郭の位置からも推測され、両氏の領域が接した大村領の伊賀峰城跡と諫早領の真崎城は両氏の対立関係をあらわすがごとく、互いの動向が目視できる対峙した位置に築かれている。

西郷氏にかわり諫早地方を治めたのが龍造寺氏である。1584（天正12）年に島原の沖田眼で龍造寺隆信は敗死したが、その一族である龍造寺家晴が柳川から移り当地を所領とし、後に諫早氏に改名した。

県南部は、長崎市域を中心として福田氏や深堀氏、長崎氏などによる貿易利権をめぐる攻防が行わ

れた地域である。西彼半島では、「郡村記」の記述から各地に小領主が在地し城を築いたことがわかる。

福田氏ははじめ平氏を称していたが、地名から福田氏を名乗った。その後、元寇や南北朝の争乱に参加し、戦国時代には大村氏と血縁関係を結びその支配下に入った。ポルトガル船が一時期福田浦に入港したことがあったが、その際、平戸松浦氏の攻撃を受けたこともある。

上総の御家人深堀氏は、鎌倉時代中期に戸町浦の地頭職を得、元寇を契機に在地するようになった。元寇においては、松浦党などとともに宍岐、鷹島で戦功をあげ、南北朝時代には、はじめ北朝方、次に南朝（懐良親王）に転じ、さらに北朝今川了俊に従って各地を転戦した。県域の領主層はほぼ同じ傾向である。戦国時代は西郷氏と関係を深め、長崎氏を幾度となく攻撃している。1588（天正16）年秀吉の海賊禁止令によって改易されたが、朝鮮出兵の際鍋島氏に従軍し、鍋島姓に改めて家を保った。

長崎氏は、鎌倉時代初期に長崎浦の開発領主として住み着いたといわれている。その後、鶴城（桜馬場城）を拠点として勢力を強め、16世紀の半ば長崎純景のころには大村氏に属し、キリシタンの洗礼を受けている。1571（元亀2）年、長崎の町割りが始まり、六ヶ町が成立した。その後、深堀軍と交戦を繰り返して、「勝山」、「合戦場」の地名が生まれたという。1580（天正8）年大村純忠が長崎をイエズス会に寄進し、その後江戸初期には長崎村全部が幕府領となったことから、長崎純景は所領を失い、大村氏から与えられた時津村を受けずにこの地から去ることとなる。

福田氏・長崎氏に関する城跡はその後の宅地化が進んでいることから明確な遺構が残っていない。ただ、深堀氏についてはその居城である依石城やその壘城である高浜城などで畝状空堀群が築かれるなど、戦国時代を物語る遺構が明確に残存している。

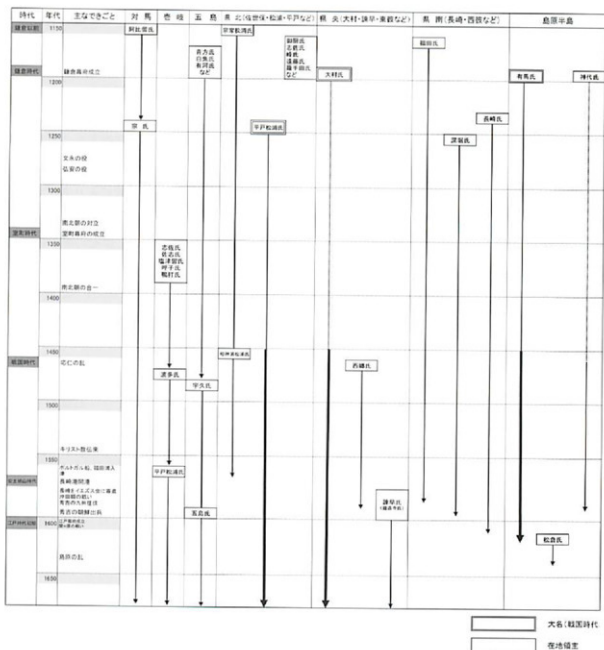
島原半島は、北部と南部でその様相が異なる。北部は雲仙普賢岳から有明海にかけて伸びる低丘陵の先端部のほとんどに城館が位置し、西郷氏の出自はこの地の西郷ともいう。一方、南部は有馬氏を中心として低丘陵状に拠点的な城館が配置されており、小領主として安富氏などの名を見ることができ。

有馬氏は、鎌倉時代に肥前国有馬荘の地頭職に任じられ、その後日野江城を居城として戦国大名に成長した。さらに藤津・杵島、彼杵、松浦まで勢力を拡大したが、龍造寺氏の勢力に屈し撤退、龍造寺氏が神代に進出した際に従者ようになる。その後、龍造寺氏から離反し、1584（天正12）年島原で交戦、島津氏の加勢を受け龍造寺隆信を沖田暲で討った。晴信の頃はキリシタンに入信し、大友・大村と共に少年遣欧使節をローマ法皇のもとに派遣している。秀吉・家康からは本領を安堵されたものの、関本大八事件によって、晴信は甲斐へ流罪され切腹、子直純は日向へ移封された。

有馬氏に代わって大和から入封した松倉氏は、キリシタンを弾圧する一方、有馬の日野江城・原城に代えて島原に森岳城を築城したが、島原の乱勃発の責任をとがめられて改易された。

島原半島北部の在地領主である神代氏は、鶴亀城を居城とし、史料で明らかになるのは16世紀後半に龍造寺隆信が島原半島に勢力を伸ばした際に傘下に入った神代貴茂からである。沖田暲の戦いで、龍造寺氏は破れ、その後神代地域は佐賀領となった。

島原半島北部の城館は、低い丘陵を複数の空堀や土塁で断ち切り曲輪を有する形態が主流であり、丘陵の側面には明確な枳形をもつ虎口を有する。南部は有馬氏の居城日野江城・原城を中心として、その周辺に家臣の城郭が散在している。ただし、後世の農地開発により田畑に改変されているところが多いため、明確な遺構が残存するところは限られている。



第1図 長崎県内における中近世の主な大名・領主の勢力図


【参考文献】

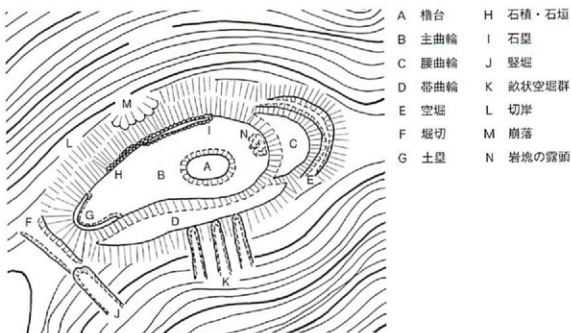
- 長崎県史編集委員会 1980『長崎県史 古代・中世編』吉川弘文館  
 龍野精一郎ほか 1998『長崎県の歴史』山川出版社  
 新長崎風土記刊行会 1981『新長崎風土記 長崎県の歴史と風土』創土社  
 など

## 第2節 縄張図と概略図の記述・表現について

### I 縄張図について

縄張図は、悉皆調査の結果、遺構の残存状況が良好な城館跡について遺構の配置や規模などを明記するために作成した測量図である。縄張図の作成は次のような方法で実施し、表現した。

1. 1/1,000の地形図上に、透明なトレース紙を張り付け記録作業をおこなう。
2. 測量は、簡易測定機（又は巻尺）と方位磁石（クリノメーター）を用い、起点からの距離や方位を測り鉛筆で記録する。
3. 記録は上場を実線、下場を破線で明記し、切岸の傾斜角の角度はケバの密度により表現する。
4. 通路については上から下にかけて矢印（→）で記す。
5. 石積や石垣は、連続するウロコ状の記述（)で表現し、高さについてはその列の厚さで、石の大きさはウロコの大きさで表現している。
6. 製図はロットリングのペン先のサイズを、上場が0.3、下場が0.1、ケバ線が0.1で記述し、基本的に1/2,000で作成する（編集の都合上、縮尺が変わる場合はキャプションに明記する）。
7. 表現については次のとおりである。



縄張図模式図

### 【縄張図掲載城館跡】

- 長崎市…鳥山城跡(89-7)、福田城跡(93-3)、依石城跡(93-8)、高浜城跡(98-1)
- 佐世保市…直谷城跡(56-11)、武辺城跡(61-11)、大刀洗城跡(66-6)、指方城跡(66-7)、広田城跡(66-11)、井手平城跡(66-12)、塩浸城跡(66-13)、上小林城跡(66-15)、針尾城跡(70-20)
- 島原市…森岳城跡(92-5)
- 諫早市…権現岳城跡(79-2)、平松城跡(84-8)、真崎城跡(84-9)、古田城跡(85-1)、かのう城跡(89-27)、岡城跡(90-4)、岡城跡(90-5)
- 大村市…城の尾城跡(77-12)、三城城跡(83-2)、玖島城跡(83-4)、伊賀峠城跡(84-6)
- 五島市…朧月園跡(39-3)、石田城跡(39-5)
- 平戸市…箕坪城跡(50-7)、小富士城跡(51-2)、館山(51-3) 亀岡城跡(51-8)、籠手田城跡(51-11)
- 松浦市…医王城跡(49-2)、松園屋敷跡(52-6)、八幡山城跡(53-2)、梶谷城跡(53-3)
- 西海市…太田和氏館跡(70-11)、下り山城跡(70-12)、天狗山城跡(71-2)、八幡山城跡(76-3)、城の山古城跡(76-5)
- 雲仙市…岡城跡(85-13)、鶴亀城跡(86-4)、飯岳城跡(91-12)
- 南島原市…日野江城跡(101-1)、原城跡(101-2)、原城陣屋跡(101-3)、大浦城跡(101-5)
- 宍岐市…勝本城跡(15-5)、高津城跡(15-9)、生池城跡(16-6)、郡城跡(16-21)、帯田城跡(18-2)
- 対馬市…撃方山城跡(1-4)、清水山城跡(13-3)、金石城跡(13-5)
- 西彼杵郡長与町…西高田城跡(88-12)、東高田城跡(88-13)
- 東彼杵郡東彼杵町…松岳城跡(72-3)、武留路山城跡(77-2)
- 東彼杵郡川棚町…小峰城跡(66-19)、河原城跡(71-5)、風南城跡(71-7)
- 東彼杵郡波佐見町…松山城跡(67-7)
- 北松浦郡小値賀町…膳所城跡(22-3)
- 北松浦郡佐々町…野寄城跡(61-3)、東光寺山城跡(61-4)
- 南松浦郡新上五島町…殿山城跡(29-2)

## II 概略図について

概略図は、悉皆調査の際に簡易的に測量し、スケッチ図として記録したものであり、縄張図に比べ遺構の記録や規模などについては不正確な部分が多い。遺構については不確定ではあるが、城の一部と推測される平場や遺構などについて現地で確認された範囲で明記している。表現の方法については

基本的に縄張図に準じて作成したが、原図は1/2,500もしくは1/3,000の地形図を利用しているため、遺構の規模については正確とはいえない。基本的に1/5,000で作成しているが、それ以外の縮尺についてはキャプションに明記している。

【概略図掲載城館跡】

- 長崎市…舞岳城跡(76-8)、神浦城跡(81-1)、田中城跡(87-2)、  
宮尾城跡(88-5)、狹田城跡(89-8)焼山城跡(89-9)、  
平間城山城跡(89-13)、日見城跡(89-20)、戸石城跡(89-21)、  
満城跡(89-23)、ツク尾城跡(93-5)、深堀陣屋跡(93-7)、  
武功山尾根突端砦跡(94-1)、鳥屋城跡(94-2)
- 佐世保市…城ヶ岳城跡(21-1)、三丸館跡(61-9)、佐世保城跡(61-18)、  
金ヶ崎城跡(66-9)、鷹ノ巣城跡(66-14)、宮村館跡(66-17)、  
小峰城跡(71-4)
- 鳥原市…東空閑城跡(86-18)、寺中城跡(92-2)
- 諫早市…田原城跡(79-1)、高城跡(84-13)、小江城跡(84-21)、  
東城跡(89-24)、金尾城跡(89-26)、久山城跡(90-1)、  
平木場城跡(90-3)、長野城跡(90-11)、小野城跡(90-13)、宗方城跡(90-14)
- 大村市…岸高城跡(84-2)
- 五島市…王之浦城跡(41-1)
- 平戸市…大島城跡(47-2)、陣笠城跡(51-9)、里城跡(51-12)、  
紐差城跡(54-2)
- 松浦市…向山館跡(52-4)、日本山城跡(53-1)、陣ノ内城跡(56-2)
- 西海市…田舎城跡(30-3)、黒瀬城跡(70-1)、天崎城跡(70-4)、  
本郷城跡(74-1)、鳥越城跡(75-6)、鳥加城跡(75-7)、  
古城(喰場塚)(76-2)
- 雲仙市…杉峰城跡(85-18)、浅井城跡(86-11)、山田城跡(91-8)
- 南島原市…大垣遺跡(96-9)
- 壱岐市…風早城跡(15-8)、樋詰城跡(16-3)、鶴薙城跡(16-19)、  
浅井古城跡(16-24)、亀丘城跡(18-1)
- 対馬市…結石山城跡(1-1)、内方山城跡(1-2)、浅原城跡(13-1)、  
宗重尚の屋敷跡(14-1)
- 西彼杵郡長与町…睡飲城跡(88-11)、飯盛城跡(89-3)
- 西彼杵郡時津町…松尾城跡(82-5)、松尾古城跡(82-6)、はるの城跡(88-10)
- 東彼杵郡東彼杵町…小峰城跡(72-7)、城ノ尾(77-1)
- 東彼杵郡川棚町…片平城跡(71-6)
- 東彼杵郡波佐見町…内海城跡(67-4)
- 北松浦郡佐々町…鳥屋城跡(61-2)
- 南松浦郡新上五島町…城山城跡(29-4)

### 第3節 縄張図

#### 1-4 撃方山城跡（うつかたやまじょうあと）

(1) 所在地…対馬市上対馬町

(2) 小字名…「洋濱」

(3) 時期…安土桃山時代

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約172m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…『津島記事』『楽郊紀聞-対馬夜話-』

(6) 歴 史…豊臣秀吉が朝鮮出兵（文禄・慶長の役）を行った際、築かせた城の一つである。築城者は、毛利高政と言われ、秀吉から朝鮮出兵の全権を委任されていた小西行長からの書状で、1591（天正19）年「豊崎の城（撃方山城）」の所領を与えたとの記述がある。また、1592（文禄元）年4月12日、小西行長・宗義智らが豊崎郡大浦（河内湾）を発ち、兵18,700人を率いて釜山浦に進軍したという記録が残っている。

(7) 遺 構…出曲輪・石垣

城の形状は至って簡素で、山の尾根上に数箇所の曲輪を配置する形態である。最頂部には径10mの円形の主曲輪があり、それを取り巻くように帯曲輪がつくられている。また主曲輪の北側と東西側の3ヶ所に方形の出曲輪があり、西側出曲輪の北面には天正期の特徴を有する石垣が残存する。また、さらに南東側には楕円形状の二の曲輪があり、主曲輪や出曲輪との間に幅広の通路状の平場がある。

(8) 残存状況

遺構の規模は小さいものの、残存状況は非常によい。石垣については隅の破壊はあるが、織豊期の特徴を有するものとして非常に貴重である。豊臣秀吉がおこなった文禄・慶長の役という歴史的史実を裏付ける城郭としては、結石山城跡を含めて重要であり、また、周辺には朝鮮出兵に関与した未周知の城館跡が散在する可能性があり、文献や地名等さらに継続的な調査が望まれる。

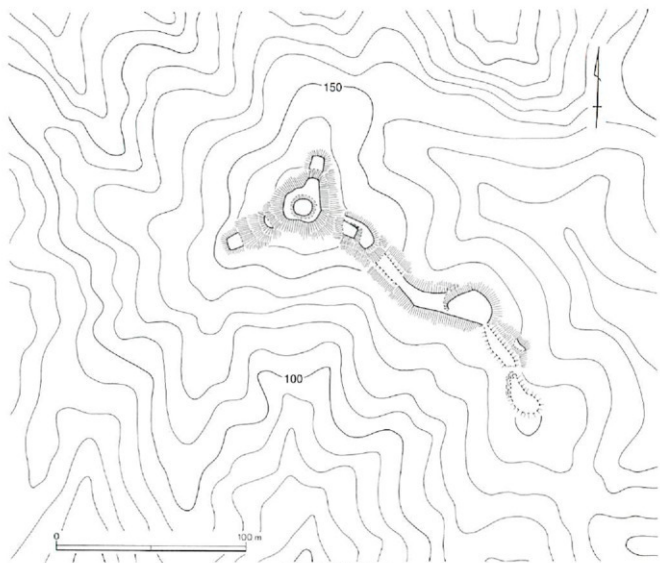


撃方山城跡 遠景



撃方山城跡 東側出曲輪石垣





翠方山城跡縄張り図

### 13-3 清水山城跡（しみずやまじょうあと）【国史跡（昭和59年12月6日指定）】

- (1) 所在地…対馬市厳原町西里
- (2) 小字名…「清水山下」
- (3) 時期…1591（天正19）年に毛利高政が築城
- (4) 立地等  
①立地…丘陵 ②標高…約206m ③現況…山林・公園 ④所有…市有地・民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『津島紀略』  
②郷土誌等…『日本城郭大系 長崎・佐賀』（以下「大系」と略す）
- (6) 歴 史

豊臣秀吉が朝鮮出兵に際して、1591（天正19）年に毛利高政に命じて築かせた。肥前名護屋の本営から、宍岐の勝本、対馬の府中・大浦、および朝鮮の釜山を結ぶ輸送・連絡の拠点となった。

#### (7) 遺 構…石垣・石塁

東西は約500mで、3つの曲輪とその曲輪を結ぶ平場により形成されている。最頂部の西側曲輪（一の丸）は楕円形の形状で、周囲は石垣や石塁で囲まれており、曲輪の内側には自然石の露頭が多い。東側に外側と内側の平入り形の入口を持って有している。中央曲輪（二の丸）はほぼ長方形を呈し、東側には内枘の虎口、西側にはわずかに内枘を呈する虎口を有している。西側曲輪との間は東側に傾斜しており、両側縁部は併走する2条の石塁により区画されている。東側曲輪（三の丸）は楕円形の自然地形を利用した曲輪であり、南西側には入口部分が見られる。眼下には、厳原の港や町並みを見下ろすことができ、警備の要所であったことが推測できる。

#### (8) 残存状況

標高約200mの丘陵山頂部にある城郭で、良好に残存している。平成10年から石垣の修復や緑路の設置などを行っており、今後、金石城跡や宗家墓所などを含めた総合的な活用が望まれる。



清水山城跡 近景



清水山城跡 西側曲輪虎口



清水山城跡縄張り図 (村田修三氏作図に加筆)

### 13-5 金石城跡（かねいしじょうあと）【国史跡（平成7年3月28日指定）】

- (1) 所在地…対馬市厳原町今屋敷
- (2) 小字名…「今屋敷町」
- (3) 時期…1528（享祿元）年に宗将盛により築城
- (4) 立地等

①立地…平地 ②標高…約12m ③現況…公園・体育館など ④所有…市有地

- (5) 文 献 ①古文書…『宗氏家譜』『津島紀事』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史

1528（享祿元）年10月、宗氏一族間に内紛がおこり、宗盛治なるものが島主宗将盛の居館（池館）を襲い兵火に焼いた。乱の後、将盛はこの地に移り新たな館を構築した。はじめは金石屋形と呼ばれていたが、義智の頃に城郭を整備し、櫓門や多間櫓を設けて城と称するようになった。1678（延宝6）年、棧原に屋形が完成し新たな府城となるまでの150年間、宗家の居城であった。

- (7) 遺 構…石垣・庭園・櫓門・搦手門

東西約300m、南北最大幅で約100mの城域の中に、庭園、櫓門、搦手門が残存している。城門の石垣は打ち込み剥ぎによる工法であり、城館の周囲は水堀がめぐっている。1981（昭和56）・1982（昭和57）年の体育館建設に伴う発掘調査では、朝鮮通信使を迎える建物跡が確認された。ただ、宗家の館跡については未だ確認は行われておらず、包蔵されている可能性が高い。

- (8) 残存状況

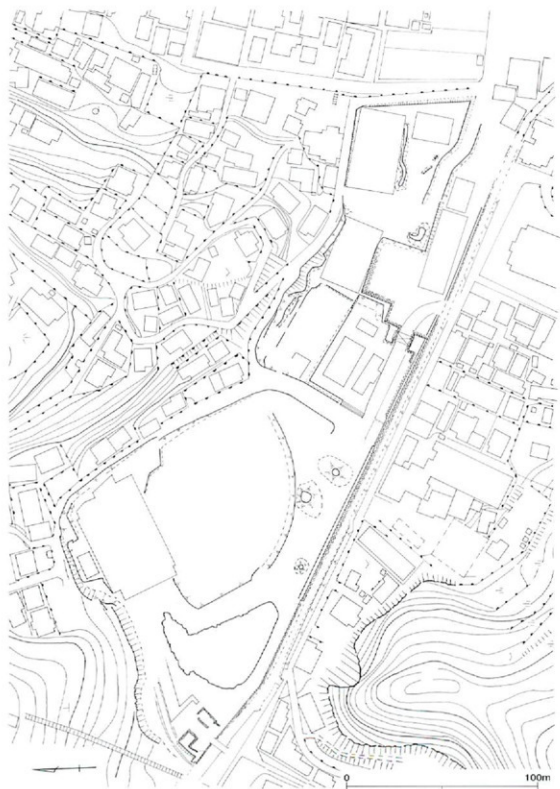
敷地内には中学校や体育館などの建物が散在するため、城郭という雰囲気は見られないものの、平成2年に櫓門が復元され、平成20年には庭園と搦手門の整備が実施されていることから、少しずつではあるが城郭の姿が見られるようになった。宗家の菩提寺である万松院や、宗家墓所、清水山城跡などが集まった歴史的な町並みが残る地域であり、それらの総合的な保存や活用について検討する必要がある。



金石城跡 遠景



金石城跡 搦手門



金石城跡縄張図

#### 15-5 勝本城跡（かつもとじょうあと）【国史跡（平成14年3月19日指定）】

(1) 所在地…志岐市勝本町

(2) 小字名…「城山」

(3) 時期…安土桃山時代

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約80m ③現況…山林・公園 ④所有…市有地

(5) 文 献 ①古文書…『志岐名勝図誌』 ②郷土誌等…『志岐郷土史』

(6) 歴 史

風本城・武末城・雨瀬包城などともいう。16世紀後半、豊臣秀吉が朝鮮出兵に際し城として造らせたもので、松浦鎮信が、有馬・大村・五島三氏の協力を受け築城した。その後、秀吉の弟秀長の家臣本多因幡守正武が1598（慶長3）年までの7年間居城し、江戸時代になり破却を受けている。

(7) 遺 構…土塁・石垣・空堀・土橋

現況は城山公園となり、展望所・稲荷神社・記念碑などが建っている。また中腹を一周するように車道が廻っており、中腹以下の遺構については明確ではない。主曲輪は東西約90m、南北約40mほぼ楕円形で、北側に虎口（入口）と石垣が残る。虎口は内折形でその両側にはほぼ直線的な石垣が築かれている。南側は切岸（平場の造成の跡）のみで石垣などの遺構はない。曲輪南側には張り出し部があり、一部石垣が残っていることから摺手口である可能性が高い。

(8) 残存状況

今回の調査で南側の張り出し部分が確認された。城郭の一部として捉えられるか発掘調査などで遺構の性格や時期などを確認する必要がある、その上で追加指定などの検討が必要である。



勝本城跡 虎口



勝本城跡 南側張り出し部石垣



15-9 高津城跡（こうづじょうあと）【市史跡（昭和51年7月1日指定）】

- (1) 所在地…老岐市勝本町  
 (2) 小字名…「川津」  
 (3) 時期…室町時代  
 (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約80m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…「老岐名勝図誌」 ②郷土誌等…「老岐郷土史」  
 (6) 歴 史

15世紀に上松浦の佐志氏がここを拠点として一帯を支配し、代官として田口氏を置いたという。

- (7) 遺 構…土塁・石積・空堀・土橋

主曲輪はほぼ円形で、東西約30m、南北約22mを測る。主曲輪の周囲には低い土塁と深い空堀がめぐる。堀の深さは深いところで約4m近くあり、東側には土橋が設置されている。

- (8) 残存状況

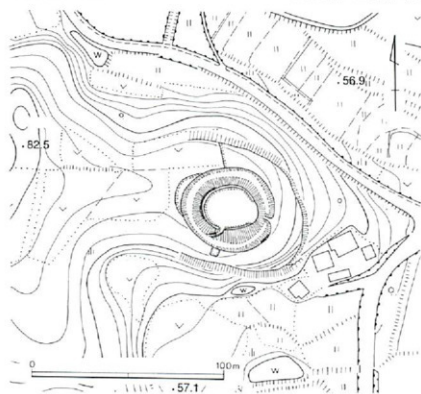
遺構の残存状況は非常に良く、円形プランの曲輪は松浦党に關係する館跡としての典型的な形態と言える。ただ、個人の所有地であり、現時点での公開・活用の点では困難である。



高津城跡 近景



高津城跡 主曲輪(土塁)



高津城跡縄張図



16-6 生池城跡（なまいけじょうあと）【市史跡（昭和51年7月1日指定）】

(1) 所在地…彦岐市勝本町

(2) 小字名…「城山」

(3) 時 期…戦国時代

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約118m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…『彦岐名勝図誌』

(6) 歴 史

松浦党の一族本城源忠が築いた城館で別名「牛ヶ城」ともいう。本城氏は当初倭寇として活動し、のちに朝鮮王朝から図書（貿易許可書）を受け正式な貿易者となる。現況は山林で、複数の地権者が所有している。以前は椎茸の栽培が行われていたと聞く。

(7) 遺 構…土塁・石積・空堀・障子堀

主曲輪は不定形の楕円形を呈し、周囲には三重の土塁と二重の空堀が残る。また、北側に1ヶ所、西側に1ヶ所、東側に2ヶ所の土橋があり、曲輪の突出部が西側に1ヶ所、東側に2ヶ所みられる。空堀の深さは土塁高を含め5～6mあり、非常に大きな遺構の残存状況である。主曲輪の中心部には、わずかに高い平場があるが、性格は不明である。曲輪東側の一番外側の土塁はトラックの運搬路として利用されており、北側の土橋は曲輪内部への搬入路として広げられたと考えられる。北側の外堀内は、堀底に凹凸があることから障子堀の可能性がある。

(8) 残存状況

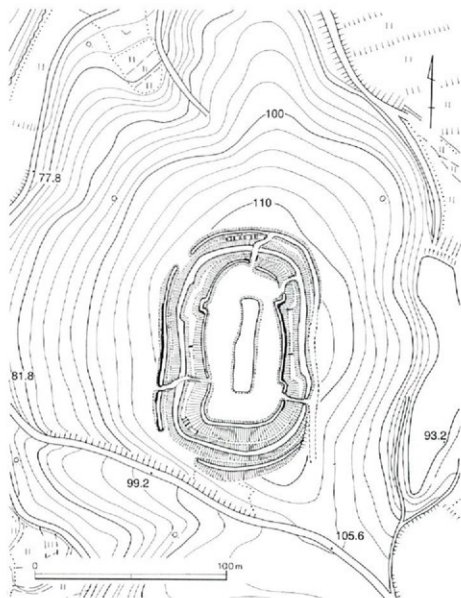
遺構の残存状況は非常に良く、規模も大きく重要な城館と言える。時期については、文献から室町時代後期ごろと考えられるが、空堀や土塁の規模から考えると戦国時代の要素が非常に強く、文献ではうかがうことができない城主の存在が考えられる。



生池城跡 近景



生池城跡 主曲輪北西張り出し部（空堀）



生池城跡縄張図

16-21 郡城跡（こおりじょうあと）

(1) 所在地…沓崎市芦辺町

(2) 小字名…「大谷」

(3) 時期…室町時代

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約115m ③現況…山林・宅地 ④所有…市有地

(5) 文 献 ①古文書…「沓岐名勝図誌」「海東諸国記」

(6) 歴 史

15世紀初頭頃、塩津留氏によって築城されたという。塩津留氏は松浦党の一派であり、朝鮮との貿易者として船（蔵造船）の所有を認められていた。

#### (7) 遺構…土塁・石垣・空堀・土橋

現況は山林と畑であり、近隣に個人住宅地が迫っている。城の曲輪部は観音寺の所有であり、以前は「城跡」として、植家により草刈り等の保全管理を行っていたという。現在は住職が不在となり、管理が行き届かず、草木が生い茂っている。曲輪の形態は方形で、南側に土塁、周囲三方に幅広い空堀が配置されている。北側は個人住宅で一部掘削され、西側は町道で現況を留めていない。堀の深さは約2mであり、南東隅の土塁は幅が広がっていることから隅櫓が考えられる。

#### (8) 残存状況

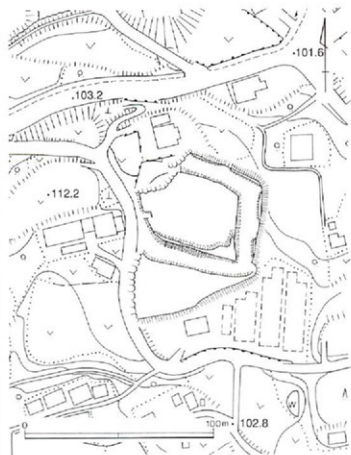
曲輪の形態として方形であり、他の館城とは異なるため特色のある城館といえる。ただ遺構の残存状況はあまり良好ではない。時期として比較的古い時期の城館といわれているところであり、時期や遺跡範囲を確認する調査が必要である。



郡城跡 南西側切岸



郡城跡 南側空堀



郡城跡縄張り図

### 18-2 帯田城跡 (おびたじょうあと)

- (1) 所在地…沓崎市郷ノ浦町
- (2) 小字名…「帯田」「殿川」
- (3) 時期…戦国時代
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約98m ③現況…山林・公園 ④所有…市有地

(5) 文献 ①古文書…『老岐名勝図誌』

(6) 歴史…16世紀後半、日高甲斐守信助が居城したといわれる。

(7) 遺構…土塁・石積・空堀・土橋

現況は山林であり、一部植林などで当時の遺構が見えにくいところがある。主曲輪はほぼ円形で、東西約23m、南北約27mを測る。主曲輪の北側には小規模な土塁が一部に残り、その周囲には石積が廻る。曲輪周囲には浅い空堀があり、北側の空堀外側には幅広の土塁状の高まりが見られる。

(8) 残存状況

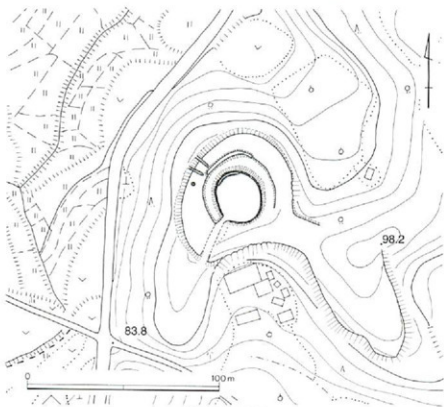
曲輪の形態は、高津城と同様円形で、松浦党に関連する館跡として典型的な特徴であり、『老岐名勝図誌』にも当時の絵図が掲載されている。ただ遺構の残存状況はあまり良好ではない。また城館の範囲については確定できず、発掘調査等に期するところが大きい。



帯田城跡 遠景



帯田城跡 石積(切岸)



帯田城跡縄張り図

### 22-3 膳所城跡（ぜぜじょうあと）

(1) 所在地…北松浦郡小値賀町

(2) 小字名…「城ノ越」

(3) 時期…12世紀中頃～16世紀

(4) 立地等

①立地…低丘陵 ②標高…約8m ③現況…山林・神社・畑地 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①郷土誌等…『大系』

(6) 歴 史

12世紀中ごろ宇野御厨荘官に任じられた清原氏による創築の可能性が高い。その後、13世紀には清原氏に代わり地頭職として源直が補任されており、膳所城在城の可能性も考えられている。ただし、広大な土塁と空堀の規模からすると、戦国期に平戸松浦氏の勢力下のもとで改築されたことが予想される。1566（永祿9）年のルイス・デ・アルメイダ修道士の記録に五島での領域拡大を画策した松浦隆信（道可）が実力行使をおこなった記録があり、その中に五島氏の報復として「多くの食物を産する平戸領主の一島」に兵を派遣したとあり、小値賀島を指している可能性は高い。

(7) 遺 構…土塁・空堀

中央に土塁で囲まれた南北約45m、東西35～60mの不定形の主曲輪があり、周囲には広大な帯曲輪が配されている。主曲輪には入口部が西と南にあり、北西側には空堀がある。また、帯曲輪の周囲には明瞭な土塁が残存するが、南東部分については畑の改変のためか見られない。

(8) 残存状況

城郭の主曲輪の残存状況は良好であるが、一部が農地となり旧状は変化している。城郭の形状は非常に異質であり、長崎県の辺境に位置する城館として、重要な城館の一つといえる。



膳所城跡 外側土塁



膳所城跡 空堀



晋阳古城遗址区

## 29-2 殿山城跡 (とのやまじょうあと)

- (1) 所在地…南松浦郡新上五島町
- (2) 小字名…「殿」
- (3) 時期…鎌倉時代中期、青方氏の築城
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約61m ③現況…竹林・山林・畑地 ④所有…民有地・神社

- (5) 文 献 ①郷土誌等…『上五島町郷土誌』

- (6) 歴 史

藤原家高が小値賀から浦部島、奈摩、さらにその後の1249(建長元)年に青方に移住して青方を姓として浦部島を支配地とした。現在、殿の地名が残されている場所に館を構え、後背地に城を築いたとされる。

- (7) 遺 構…空堀・土塁・石積

双楯状の山頂部に、楕円形の北側曲輪とはほぼ円形の南側曲輪、鞍部に長方形のおもに3つの平場から構成されている。北側曲輪は頂部に楕円形の一段高い高まりがあり、それを取り巻くように帯曲輪が形成されている。曲輪の切岸はあまり明瞭ではなく、傾斜が緩やかな斜面には土塁と空堀が築かれている。南側曲輪は頂部に円形の平場があり、周囲にはそれを取り巻く帯曲輪がみられる。帯曲輪の周囲には人頭大の円礫がほぼ一周に配されている。また、傾斜の緩やかな東側斜面には2条の土塁が帯曲輪から裾野にかけて築かれている。鞍部の平場は、兩岸に拳大の角礫を利用した石積が形成され、東側に面した位置に1条の堅堀が見られる。

- (8) 残存状況

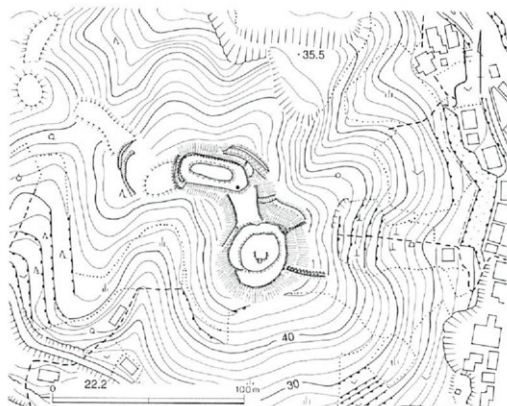
曲輪の縁辺に随所に見られる石積は後世の栗畑の造成により形成された可能性が高い。また、近隣においても階段状の平場が多数見られるため、かなり地形に改変が見られるようである。ただ、城郭を構える位置としては青方湾を一望できる適所であり、当地に城郭があったことは間違いないと考えられ、歴史性や地域性の重要性は高い。



殿山城跡 近景



殿山城跡 北側曲輪西側空堀



殿山城跡縮張図

39-3 嘯月園跡（しょうげつえんあと）【市史跡（昭和58年10月1日指定）】

(1) 所在地…五島市吉九木町

(2) 小字名…「吉九木道端」

(3) 時期…1841（天保12）年

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約40m ③現況…山林・送電線 ④所有…民有地

(5) 文 献 ②郷土誌等…『福江市史』

(6) 歴 史

第30代藩主五島盛成が茶亭として造られたが、かねてより幕府に請願していた石田城築城までの間、防衛を兼ねた詰め城として造られたともいわれる。

(7) 遺 構…石垣・土塁・築山

御茶園山の南東側丘陵上に立地する石垣に囲まれた平場と、その外側にある築山などの遺構が確認される。石垣で囲まれた平場は、長さ約45m、幅約30mで、南側に低い階段を有する入口がつくられている。石垣は切石による乱積みであり、部分的に崩落があるものの極めて均整のとれた形状である。また、入口部分には門柱の固定孔が確認され、門の形状が推測される。南東側に広がる平場は、低い土塁状の高まりに囲まれており、平場の中には高さや形状が異なる2つの築山が確認される。また、南西側には幅約7mの土塁に囲まれた長方形の区画があり、遺構の性格は不明である。

(8) 残存状況

石垣や入口部の残存状況は良好であり、遺構の復元など保存活用は比較的容易に行いやすい。また、



その他の遺構については性格が不明な部分が多く、発掘調査等詳細な調査が必要である。北西側にある御茶園山の山頂には神社が鎮座し、半月状の平場とその中には井戸跡が残る。福江市街地が一望できる好適地である。



壙月園跡 平場南壁入口



壙月園跡 平場北壁石垣



壙月園跡縄張図

### 39-5 石田城跡（いしだじょうあと）【一部県史跡（昭和41年9月30日指定）】

- (1) 所在地…五島市池田町
- (2) 小字名…不明
- (3) 時期…石田陣屋：1638（寛永15）年 石田城（福江城）：1863（文久3）年に築城
- (4) 立地等  
①立地…平地 ②標高…約4～9m ③現況…学校・宅地・公園など ④所有…県有地・民有地
- (5) 文献 ①古文書…『長崎縣南松浦郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史

石田陣屋は藩主五島盛利が1638（寛永15）年に構築したといわれているが、年代としては1617（元和3）年や1637（寛永14）年など諸説あり、明確ではない。1806（文化3）年2月9日に異国船防衛を理由に、藩主五島盛運は幕府に築城を願い出たが許可されなかった。1849（嘉永2）年7月10日、藩主五島盛成の時に幕府は築城を許可するに至り、着工14年後の1863（文久3）年6月18日に築城を終えた。廃藩置県後の1872（明治5）年、当城は陸軍省の所管となり、やがて一部楼門のみを残し、完成よりわずか9年にして解体され、材料の多くは長崎へ持ち込まれた。その後、本丸跡には県立五島中学校（五島高等学校）が建てられ、築山跡には五島氏の祖家盛・鏡・純玄の3名を祀る城山神社が置かれている。

- (7) 遺構…石垣・庭園・内堀・外堀

東西は約350m、南北は約300mの城域に、本丸や内堀、水門、庭園などが確認されている。本丸は一边が約100mのほぼ方形で、南側に大手を有する。また、当時は海城であった城の東側には水門（船着き場）が見られる。本丸の西側には庭園を有する五島家御屋敷跡があり、その外側には外堀が一部残っている。

- (8) 残存状況

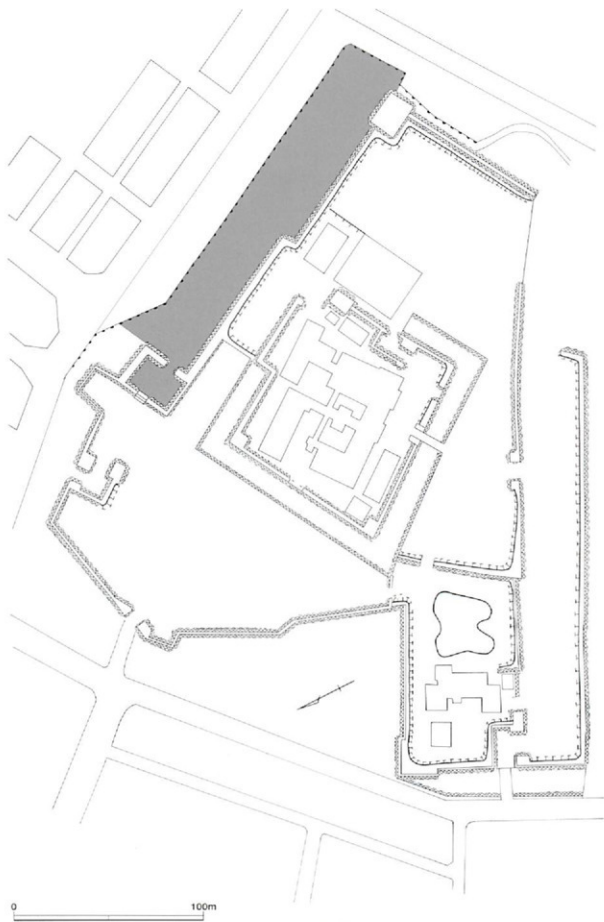
城内には県立高校が存在し、堀の一部や城の周辺部は埋め立てられているため、城の旧状は見る事ができない。ただ、石田城に関係する文献史料は明確であり、石田城が江戸幕府下で最後に築城された城郭であるという歴史性は十分評価に値する。



石田城跡 水門城内より



石田城跡 本丸石垣



石田城跡縄張り図

#### 49-2 医王城跡 (いおうじょうあと)

(1) 所在地…松浦市鷹島町里免宇山口谷

(2) 小字名…「山口谷」「羽佐磨」

(3) 時期…16世紀後葉ごろ

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約70m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…『鷹島町郷土誌』

(6) 歴史

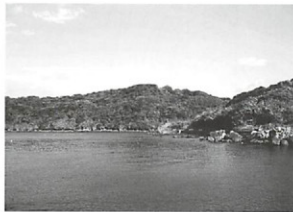
1543(天文12)年、松浦隆信が相神浦の松浦親を攻め一年余りに及ぶ激戦の末、親が鷹島を平戸松浦氏に譲り、鷹島が再び平戸松浦氏の支配下になった。医王城は、松浦党一族である大曲氏の居城跡といわれている。

(7) 遺構…堅堀・空堀・土塁・腰曲輪・帯曲輪

南北約50m、東西約60mのほぼ円形の主曲輪と南東側に伸びる二の曲輪から形成されている。曲輪の北東側は幅広の空堀と比高差が約6mの土塁により堅固な守りを固めており、一方の海に面した南西側は急峻な自然の地形を利用し防御を行っている。

(8) 残存状況

主曲輪部分に社殿があり、一部取付道路などで形状の改変があるものの、空堀や土塁等の主な遺構については良好に残っている。



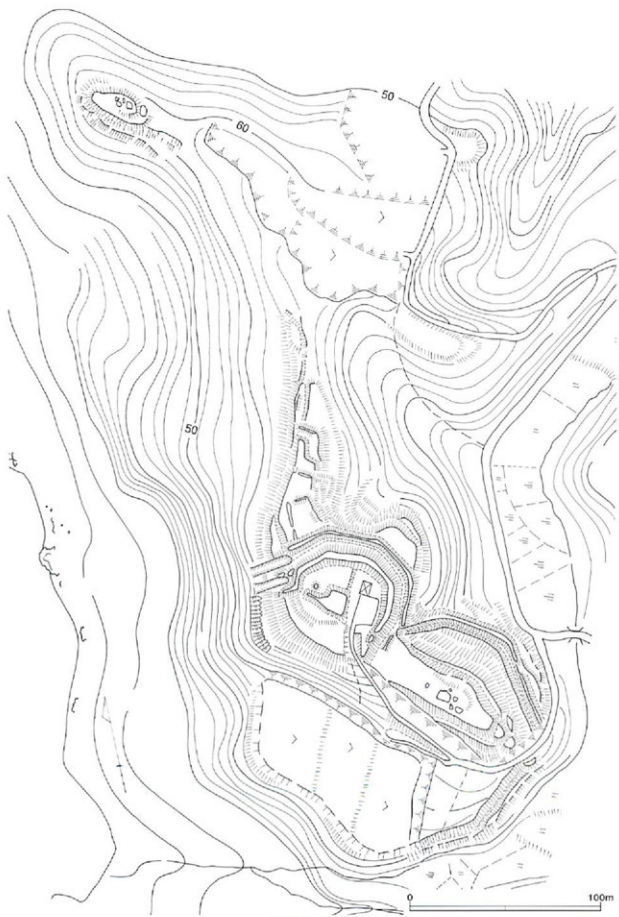
医王城跡 医王城跡遠景



医王城跡 主曲輪後方土塁



医王城跡 北空堀



医王城跡縄張り図

## 50-7 箕坪城跡（みのつぼじょうあと）

(1) 所在地…平戸市主御町

(2) 小字名…「箕坪」

(3) 時期…15世紀後半か

(4) 立地等

①立地…城山山頂 ②標高…約280m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…「松浦家世伝」「大曲記」「密陽録」「大村家譜」 ②郷土誌等…「大系」

(6) 歴史

平戸松浦正は峰弘を田平に攻めてその城を奪い、それに対して有馬氏は弘を援けて平戸を襲った。そのため正は勝尾嶽城を脱出して箕坪城跡に拠った。しかしこも守り難くなり、1491（延徳3）年頃に箕坪城を捨てて筑前に入り大内政弘に援けを請うた。その後、正は平戸に戻り、弘定と改名した。

(7) 遺構…水手曲輪・堀切・石積・石塁・虎口・井戸・槽台

遺構は尾根沿いに、主曲輪、大手曲輪、水手曲輪、東出曲輪、西出曲輪があり、南西側の裾部に堀切がつくれ南西からの丘陵を断ち切っている。主曲輪は周囲に石垣をめぐらし、東よりに槽台がある。主曲輪の北東側には虎口があり、その下には東出曲輪がある。その先端には見張り台が築かれる。大手曲輪は城の南側に位置し、石積・石塁で囲まれる。水手曲輪は二つの尾根に挟まれた谷部につくられた平場であり、井戸や高さ2.5mほどの石塁がある。西出曲輪は大走り状の細長い2段の平場があり、周囲は石積が巡らされている。

(8) 残存状況

標高200mを超す城山の山頂にあるため、遺構の改変はほとんどなく残存状況は非常に良い。



箕坪城跡 虎口



箕坪城跡 石塁



箕坪城跡 遠景



箕坪城跡縄張り図

#### 51-2 小富士城跡（こふじじょうあと）

- (1) 所在地…平戸市古江町
- (2) 小字名…大瀬・江袋
- (3) 時期…戦国時代か
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約210m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史…平戸松浦氏の支城、その他の明確な記録なし。
- (7) 遺構…石積、石塁、井戸、櫓台

標高約200m以上の小富士山山頂に立地する山城で、自然石を残す不定形の平場が造られている。平場の周囲は石積があり、南北両側に1箇所ずつ入口部がある。また、曲輪の西側には自然地形を利用した1段高い高まりがあり、櫓台として機能したと考えられる。南側の入口部分には石積の井戸が残り、生活の痕跡が感じられる。



(8) 残存状況

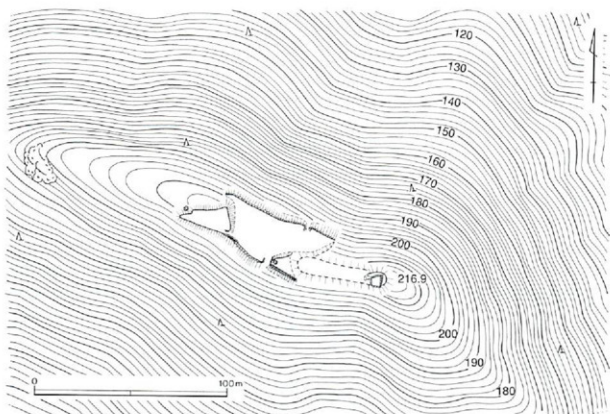
標高200mを超す山頂にあるため、遺構の残存状況は良い。随所に自然隙の露頭がある。



小富士城跡 遠景



小富士城跡 石積



小富士城跡縄張図



### 51-3 館山（たちやま）

- (1) 所在地…平戸市鏡川町
- (2) 小字名…「御館」
- (3) 時期…鎌倉時代～江戸時代初期か
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約55m ③現況…竹林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『松浦家世伝』
- (6) 歴 史

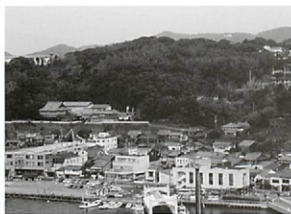
11代松浦持が鎌倉時代初期、小値賀から平戸に移住して館山に住居したという記録がある。その後16代勝の頃までの約150年の間利用されたと考えられる。ただし、室町時代から戦国時代にかけての記録がないことから、勝尾嶽城と共用した館としての機能があったことが推測される。

- (7) 遺 構…空堀・土塁・石垣

松浦党に関係する館跡として特有の、円形の形状を有する代表的な城館跡である。丘陵の背面を上場の幅約10m、内側の土塁を含めた比高差約5mと非常に大規模な空堀で断ち切って曲輪が形成されている。堀と土塁に囲まれた曲輪は平地が少なく、南に向かって傾斜している。曲輪の東側には土塁の一部を改変した石垣に囲まれた数枚の平場があり、石垣の形状から慶長期と考えられる。

- (8) 残存状況

「御館」（松浦史料博物館）の裏手の山間部で、畑地等に利用された痕跡はなく旧状を残している。ただ、空堀の外側は学校や道路等で地形の形状は改変している。文献史料に乏しく、館山が存続した時期は不明であるが、遺構の形状や地理的環境から平戸松浦氏の居館として機能していたことは間違いない。今後詳細な調査を実施することに解明されると思われる。



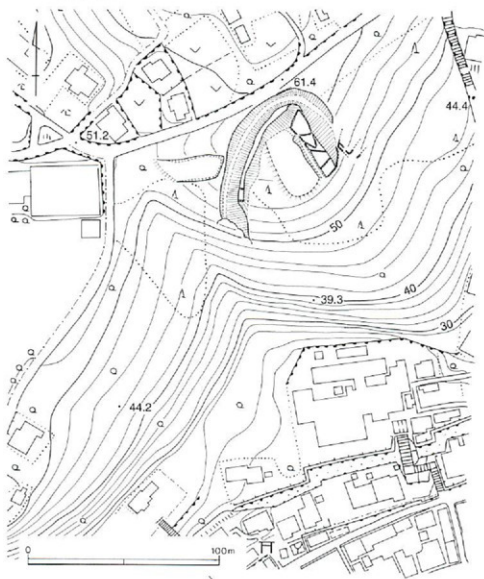
館山 遠景



館山 空堀



館山 石垣



館山縄張図

## 51-8 亀岡城跡 (かめおかじょうあと)

(1) 所在地…平戸市岩の上町

(2) 小字名…「亀岡」

(3) 時期…日之嶽城としては慶長年間、亀岡城(平戸城)としては1707(宝永4)年に築城。

(4) 立地等

①立地…半島・岬 ②標高…約35m ③現況…神社・学校・公園など ④所有…市有地・民有地

(5) 文献 ①古文書…『長崎縣北松浦郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』

(6) 歴史

日之嶽城の築城は、1599(慶長4)年説と1603(慶長8)年説とあり断定しがたい。築城者についても前者であれば松浦鎮信(法印)であり、後者であれば隆信(宗陽)ということになる。日之嶽城はその後出火、焼失している。理由としては放火説が有力であり、外様大名として幕府の改易をおそれた松浦氏が幕府の警戒心をやわらげるために火をかけたと推察されている。その後、およそ1世紀の間居城を構えず屋敷づくりのままで過ごしてきた。松浦棟の代になり、5代將軍徳川綱吉の寺社奉行として一翼を担うようになり、1703(元禄16)年2月23日付けをもって幕府に築城を願い出て、1707(宝永4)年に完成した。

(7) 遺構…本丸・大手・虎口・空堀・石垣・櫓台

城域としては南北約480m、東西約410mを測るが、学校や公共施設、宅地などで主曲輪部分を除いては城の旧状を残していない。残存する遺構としては南側の城の大手にある空堀と虎口、北西と南東の城門、曲輪西側にある櫓台などである。ただ、日之嶽城跡から残る遺構の見極めは非常に難しい。

(8) 残存状況

城域には県立高校や小学校、公共施設などが集中し、また主曲輪部分においても神社が鎮座し変化が著しい。ただし、日之嶽城跡については、平戸松浦氏(松浦鎮信)が文禄・慶長の役の経験をもとに修得した築城技術をもって造り上げたことが考えられ、有馬氏の原城跡、大村氏の玖島城跡などとともに海城としての価値づけが必要である。



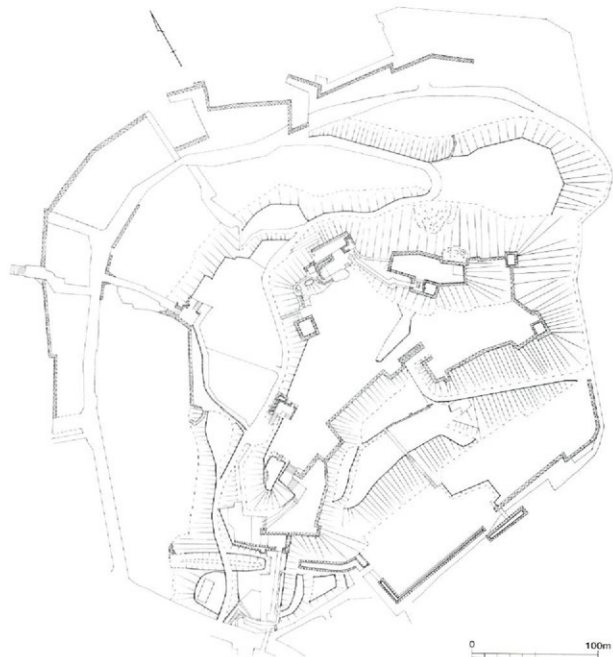
亀岡城跡(岩の上の天守閣)



亀岡城跡 虎口門東石垣



亀岡城跡 大手門石垣(崩落部分)



亀岡城跡縄張り図 (1/3000)

51-11 籠手田城跡 (こてだじょうあと)

- (1) 所在地…平戸市田平町山内免
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…1469～87 (文明年間)
- (4) 立地等 ①立地…低丘陵 ②標高…約30m ③現況…山林・宅地 ④所有…民有地・公有地
- (5) 文 献 ①古文書…『壺陽録』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史

籠手田氏の居館跡と考えられる。15世紀中葉、平戸松浦豊久は三男栄を田平氏の養子とし、「籠手

田氏」を名のらせた。龍手田氏は、1491（延徳3）年の田平平戸合戦で、平戸松浦弘定の家臣として奮戦する。1498（明応7）年、相神浦の大智庵城攻撃に際して平戸方の先鋒となるほか、彼杵・針尾の戦い（大村純忠）や宍岐合戦、朝鮮の役等で平戸松浦氏の重臣として活躍する。

（7）遺 構…土塁・空堀

丘陵の先端部につくられた館跡で、東西約28m、南北約23mの円形の曲輪を有する。曲輪の背面には二重の空堀と三重の土塁があり、空堀と土塁の間には三日月状の曲輪が残っている。

（8）残存状況

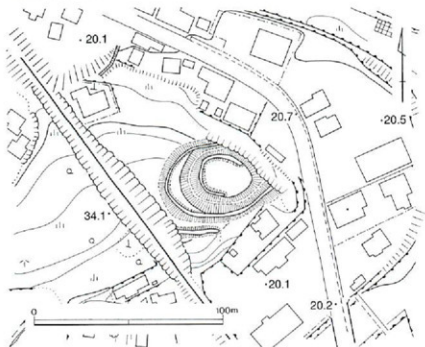
周辺は宅地や鉄道により一部改変があるものの、城館の本体部分についてはほぼ完全に残存している。小規模ではあるが松浦党系譜の館城の形状を残しており、重要な城館の一つである。前面が国道に面しており、周辺地区に開発の恐れがある。



龍手田城跡 空堀



龍手田城跡 土塁



龍手田城跡縄張り図

## 52-6 松園屋敷跡（まつぞのやしきあと）

- (1) 所在地…松浦市調川町上免
- (2) 小字名…「里」
- (3) 時期…室町時代か
- (4) 立地等
  - ①立地…独立丘陵 ②標高…約171m
  - ③現況…山林・荒蕪地 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『青方文書』  
②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史

室町時代初期の1384（永徳4）年、調川周防守統なるものが当地に居住していたことの記録がある。また1542（天文11）年に松園氏と名乗る地頭が平戸・志佐連合軍に攻められ松山田の牟田周辺で一族討死したという言い伝えもある。調川氏と松園氏との関係については不明である。

- (7) 遺 構…空堀・土塁

北東に延びる低丘陵の先端に形成された楕円形状の曲輪で、北側に空堀と土塁を配置する。

- (8) 残存状況

県道側の民家の裏山が城跡となっている。地区が共同で管理しているため残存状況はよい。ただ東側と南側は空堀が水田によって埋設されている可能性がある。



松園屋敷跡 遠景（西から）



松園屋敷跡縄張り図

## 53-2 八幡山城跡（はちまんやまじょうあと）

(1) 所在地…松浦市今福町東免

(2) 小字名…「八幡山」「城の下」

(3) 時期…中世

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約49m ③現況…山林・荒蕪地・神社境内 ④所有…民有地

(5) 文 献— (6) 歴 史—

(7) 遺 構…空堀・平地・土塁・土橋・切岸

東西170m、南北350mほどの南北に長い頂上部に南北の曲輪が形成されている。南北はL字型に屈曲する堀切により分断されている。南側曲輪は長方形を示し、南北は約35m、東西は約10mを測る。また南側曲輪の東側には帯曲輪、空堀、土塁がほぼ直線的に形成されている。

(8) 残存状況

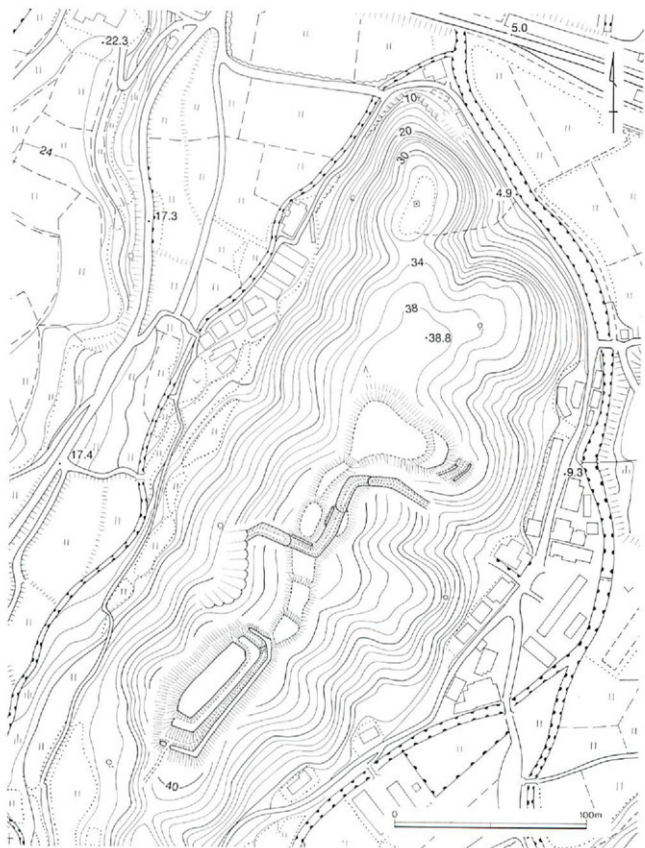
西九州自動車道のルート上にあるため、長崎県教委により緊急発掘調査が実施され、北側曲輪が一部破壊を受けている。発掘調査では人為的に造成された切岸の状況が確認された。



八幡山城跡 土塁



八幡山城跡 堀切



八幡山城跡縄張り図



### 53-3 梶谷城跡（かじやじょうあと）【県史跡（昭和46年9月14日指定）】

- (1) 所在地…松浦市今福町
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…平安時代末期～江戸時代初期
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約197m ③現況…山林・公園 ④所有…民有地・公有地

- (5) 文 献 ①古文書…『松浦家世伝』『壺陽録』『大曲記』『家世紙屑譜』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史

源久（松浦氏の祖）が1069（延久元）年に摂津國渡辺莊から今福に下向して土着し、宇野御厨検校および検非違使となった頃に梶谷城を築いたといわれている。南北朝時代以降、松浦氏（宗家）は近隣の領主との争いや一族間の内紛などに明け暮れ、梶谷城もこの闘争奪の的となった。1567（永禄10）年に平戸の松浦隆信は相神浦の松浦親を飯盛城に滅ぼし、梶谷城を支城とした。

- (7) 遺 構…石垣・石塁・櫓台・大手

南北約105m、東西約33mの主曲輪と南側に二の曲輪、三の曲輪と配置されている連郭式の城郭である。主曲輪の南側には櫓台があり、西側の眼下の海城を一望することができる。また主曲輪の東側には内柵型の虎口が形成されている。また各曲輪の周辺部には石塁や石垣が築かれているが、虎口の石垣に比べるとやや粗雑であり、時期差が考えられる。

- (8) 残存状況

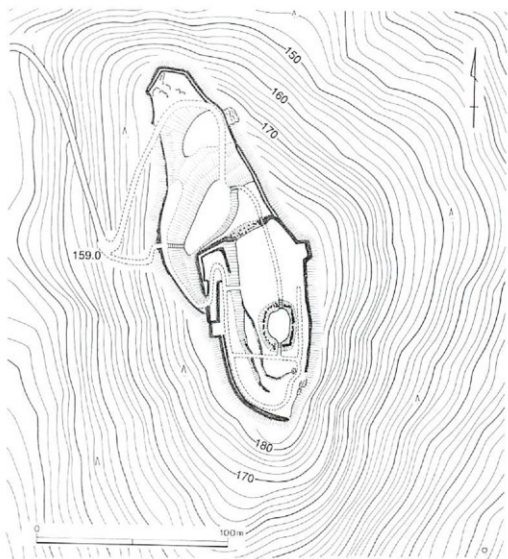
主曲輪部分は松浦市が公有化し虎口部分を中心として一部整備を行っている。二の曲輪についてはテレビアンテナが設置されており、三の曲輪丸にかけては車道がつくられている。主曲輪および周辺を取り巻く石塁は初期のものと推定されるが、大手門や櫓台などは戦国時代のもと思われる。長年にわたり利用された城郭であり、数回の改修が加えられていることが判断される。



梶谷城跡 遠景



梶谷城跡 虎口



直谷城跡縄張り図

56-11 直谷城跡（なおやじょうあと）【歴史跡（平成13年2月26日指定）】

- (1) 所在地…佐世保市吉井町
- (2) 小字名…「内裏」
- (3) 時期…寛元年間（1243～47）～江戸時代前期
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂 ②標高…約167m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…「壺陽録」「志佐物語」 ②郷土誌等…「大系」
- (6) 歴 史

松浦党の一族、志佐氏の居城である。初代志佐貞は源久（松浦氏の祖）から4代のちにあたり、当城を拠点として志佐一帯（松浦市）に勢力をのぼしていた。その後、志佐氏は元寇、南北朝争乱などで活躍し、8代義の頃は志岐の湯岳（観城）を領有し朝鮮貿易を積極的に進めている。戦国時代の明応年間（1492～1501）志佐純勝は大村・龍造寺氏連合軍の攻撃を受け五島に逃れたため、無主の城となる。その後、田平の峰昌が平戸松浦氏との合戦に際し入城、志佐氏を相続し志佐純本を名乗る。1625（寛永2）年志佐純昌の時、志佐から御厨へ移封され廢城となった。

(7) 遺構…曲輪、土塁、櫓台、大手口

自然の地形を利用した城郭であり、不定形の主曲輪には中央部に比高差が約8mある北櫓台と、東側に東櫓台、また、主曲輪南側の谷間部には大手口があり、4重の土塁と3重の空堀が築かれている。城の西側には裏木戸口（搦手口）と思われる通路が残る。

(8) 残存状況

遺構の残存状況は良好である。岩の露出が各所にあり、自然の要塞の感がある。物見台には神社の祠があり、一部公園として整備しているが遺構の形状は明確である。



直谷城跡 竪堀



直谷城跡 北櫓台



直谷城跡縄張り図

### 61-3 野寄城跡 (のよりじょうあと)

- (1) 所在地…北松浦郡佐々町野寄免
- (2) 小字名…「榎ノ元」
- (3) 時期…文明年間 (1469~1486)
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約40m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『松浦家世伝』『寛政田舎廻神社仏閣並古城址古墳等相札帳』
- (6) 歴 史

文明年間 (1469~86) に城あり。1479 (文明11) 年8月29日、佐々に隠居した松浦豊久は野寄で死亡、50年の治世を終わるといふ記録あり。また、この城は野中有右衛門の城なりと子孫は語るともあり、豊久の死後、当地の主であった武士が居を構えていたと考えられる。

- (7) 遺 構…空堀・土塁・虎口

頂上部に40m×17mのL字形の主曲輪があり、その西側下方に二の曲輪がある。東から延びる丘陵の先端部を空堀で寸断し、外敵からの侵入を防御している。

- (8) 残存状況

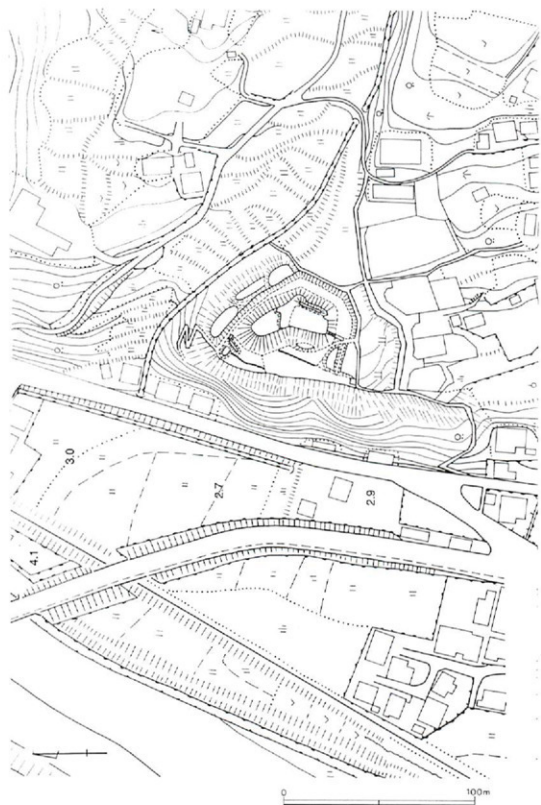
城の西側は国道に面し、周辺は佐々町の商業施設が並ぶ市街地の北端である。佐々川周辺部は現在水田であり、もともとは海が湾入していたが、1682 (天和2) 年に大新田干拓で陸地になったという。



野寄城跡 遠景 (佐々川より)



野寄城跡 北側空堀



野寄城跡縄張り図

#### 61-4 東光寺山城跡（とうこうじやまじろあと）

(1) 所在地…北松浦郡佐々町羽須和免

(2) 小字名…「堅山」

(3) 時期…文明年間（1469年～1487）

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約73m ③現況…山林・寺社境内 ④所有…公有地・民有地

(5) 文献 ①古文書…『壺陽録』『印山記』『北肥戦誌』

(6) 歴史

1563（永祿6）年8月、松浦隆信が一族2000余騎を率いて相浦飯盛城の松浦親を攻略するが、その際、平戸白弧山城から出陣し、東光寺山城に本陣を置いた。この合戦の間に曲輪や空堀が整えられ拡充されたといわれている。

(7) 遺構…堅堀・土塁

楕円形状の不規則な曲輪から構成される北曲輪と、径50m程の円形に近い平場を中心として周辺に数箇所の曲輪を配置する南曲輪がある。北曲輪の周辺には数条の堅堀があるが性格は不明。北東側に入口部分と思われる遺構が見うけられる。

(8) 残存状況

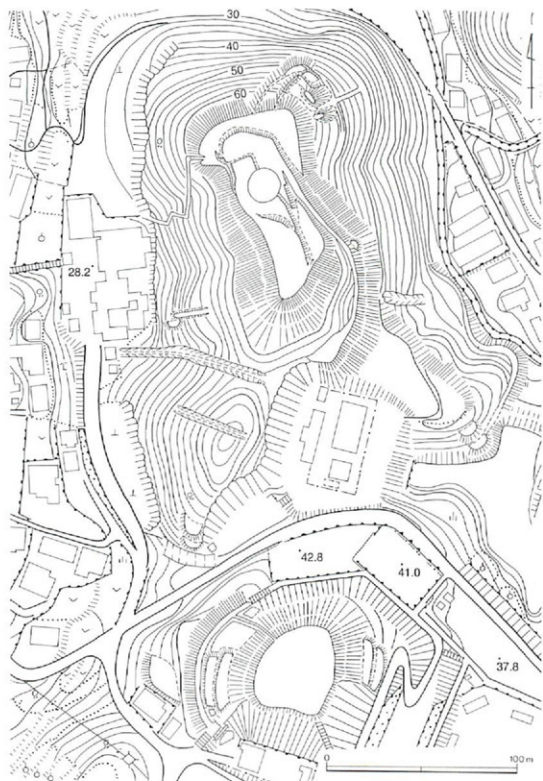
北曲輪の主曲輪部分に水道タンクがあることと、両曲輪の間に町営プール施設があり、城跡の現況はかなり変容しているが、平場の残存状況は比較的良好に保たれている。



東光寺山城跡 帯曲輪



東光寺山城跡 不明遺構（入口？）



東光寺山城跡縄張り図



## 61-11 武辺城跡（たけべじょうあと）

- (1) 所在地…佐世保市竹辺町
- (2) 小字名…「上久保」「下久保」「山口」
- (3) 時期…15世紀中～後半
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約77m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ①古文書…「松浦家世伝」

### (6) 歴史

宗家松浦氏が本拠を今福から相浦に移したのは盛の時といわれている。1443（嘉吉3）年、宗家松浦13代盛が相浦下本山の新豊寺に巨鐘を寄進したという記録があり、勢力の中心が相浦にあった根拠となっている。「家世伝」には、東漸寺（盛の墓碑が所在）の西南700～800mの山中に石壁がわずかに残る古城址について盛が築いた居城ではないかという記録があり、現在の武辺城の位置とも符合している。その後武辺城は15代政のころまで宗家松浦氏の本城として存続し、1498（明応7）年、平戸松浦氏による夜討ちに遇い、大智庵城と同時に落城したと考えられている。

- (7) 遺構…石積・土塁・櫓台・堅堀・堀切・柱穴

主曲輪を中心として尾根上に西曲輪、東曲輪、南曲輪が配されている梯郭式の城郭である。主曲輪には東側に櫓台があり、その西側に平場が形成されている。また、主曲輪から北側にのびる丘陵の端部には堅堀や堀切が縦横に施されている。南曲輪は主曲輪から続く尾根を二重の空堀で断ち切り二段の曲輪を形成している。その他の曲輪については明確な平場は確認されていない。

### (8) 残存状況

主曲輪の中央部に送電線の鉄塔があり、設置の際多少削平を受けていると推測される。また西曲輪部分は現在西九州自動車道の建設工事により発掘調査が実施され、城の形状を留めていない。主曲輪部は平成8年佐世保市教育委員会により発掘調査が実施され、7棟の掘立柱建物跡が確認され、14世紀から16世紀前半にかけての貿易陶磁器、国産陶磁器等が多数出土している。



武辺城跡 主曲輪

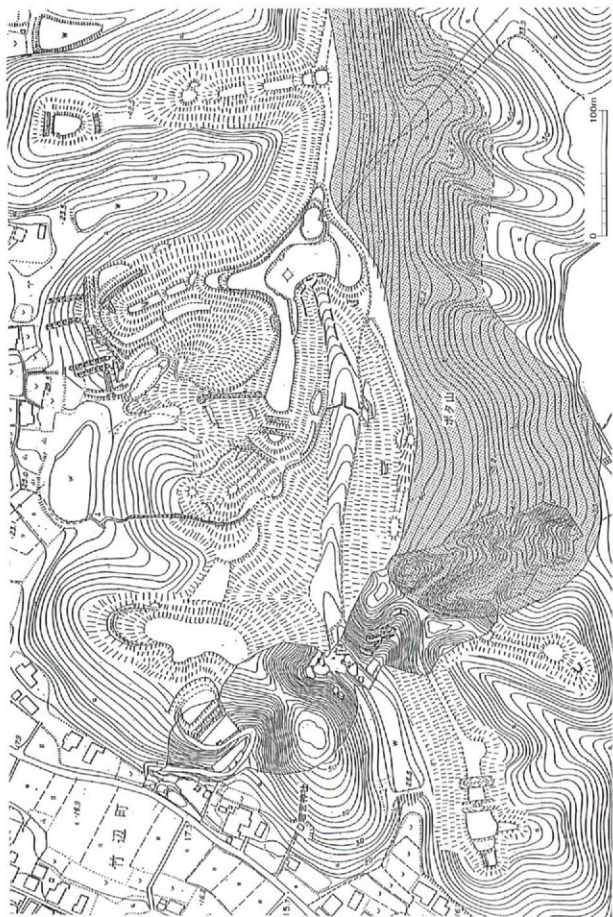


武辺城跡 堀切



武辺城跡 主曲輪西側石積





武辺城跡縄張図 (1/3000)

## 66-6 大刀洗城跡（たちあらいじょうあと）

(1) 所在地…佐世保市指方町

(2) 小字名…「小飯盛」

(3) 時期…戦国時代末期か

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約26m ③現況…山林・宅地

④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…『中世山城分布調査報告書』

(6) 歴史

針尾氏の支城として指方氏の動きや早岐瀬戸の監視が目的で築城されたと想定される。1572（元亀3）年に針尾三郎左衛門（伊賀守の子）は平戸松浦氏に討ち取られている。

(7) 遺構…土塁・空堀

主曲輪が想定される北側の最頂部は、削平を受けており平場の痕跡を確認できない。その南西側には東西15m、南北30mの楕円形の曲輪があり、北側には土塁と空堀が残存する。主曲輪と南西側の曲輪を結ぶ尾根上にはほぼ直線の土塁状の高まりがあるが性格は不明である。

(8) 残存状況

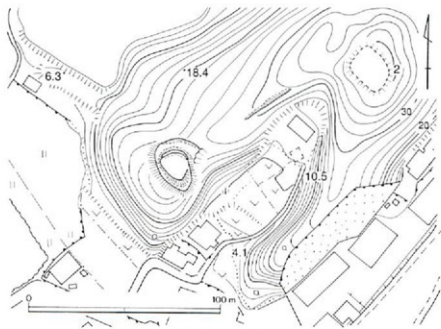
曲輪の面積は小規模であるが、残存状況は良好。昨年、佐世保市教育委員会が南側谷間の発掘調査を行い、柱穴などの遺構とともに15～16世紀ごろの貿易陶磁器などの遺物が出土している。



大刀洗城跡 遠景



大刀洗城跡 空堀



大刀洗城跡縄張図

#### 66-7 指方城跡（さしかたじょうあと）

(1) 所在地…佐世保市指方町

(2) 小字名…「館城」「山ノ根」

(3) 時期…16世紀後半

(4) 立地等

①立地…丘陵頂部 ②標高…約80m③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…『印山記』『大村家覚書』

(6) 歴史

指方城は平戸領の南の関門を守る重要な支城であった。佐志方氏は平安時代末期以来の在地領主であり、戦国時代中頃は太田氏に属していたが、後に後藤氏に属するようになった。その後、後藤氏が松浦氏配下に入り、早岐・針尾の地を割譲したため、佐志方氏も松浦氏に属するようになった。標高40m程の中腹に館を置いたとされ、近くの徳正寺周辺には佐志方善芳の墓といわれるものがある。

(7) 遺構…土塁・石積・空堀・竪堀

主曲輪にあたる最頂部は双楯状の高まりに分かれ、中央部は2m程度低くなっている。主曲輪の東側に3ヶ所の曲輪と、北側に石積で囲まれた方形に近い曲輪が配置されている。また南側には尾根に沿うように土塁があり通路状の平地が見られる。さらに南側には明瞭な空堀が築かれており、緩やかな尾根を断ち切っている。

(8) 残存状況

丘陵の山頂に立地するため遺構の残存状況は良好である。また、石積による曲輪の形成は早岐地区においては非常に特異であり、この城郭の特徴といえよう。



指方城跡 遠景



指方城跡 石垣

平戸松浦氏の領国南端最大の城として機能する。戦国時代に早岐地方を所領とした松浦鎮信が火村氏・有馬氏などの諸氏の侵襲に備え築城した。1574（天正2）年、大村純忠は平戸松浦氏に奪われた

(6) 歴史

(5) 文献 ①古文書…『三光譜録』『印山記』 ②郷土誌等…『大森』

①立地…丘陵 ②標高…約55m ③現況…山林・宅地・畑 ④所有…民有地

(4) 立地等

(3) 時期…天正年間～江戸時代初期（一國一城令）

(2) 小字名…『井手』

(1) 所在地…佐世保市広田町

66-11 広田城跡（ひろたじょうあと）



この地を奪還しようとして、有馬・波多・有田氏を誘い侵攻をかけ、井手平城を陥落させる。また、その勝利に乗じて広田城を攻撃。広田城には城主佐々清右衛門をはじめ、佐志方善芳などを頭として350人が立て籠もり防戦した。松浦隆信・鎮信の広田城救援の話聞いた大村純忠は総攻撃を開始したが、結果として城を落とすことができず退去した。

(7) 遺 構…曲輪、空堀、堀切、畝状堅塁、石塁、土塁、櫓台

東西約100m、南北約25mと比較的広い主曲輪とその周辺を取り巻くように帯曲輪が配置されている城郭である。主曲輪の東側には一段高い櫓台が配置され、北側を中心に石塁や土塁を廻らせている。城の北東側は小森川が流れ、その浸食崖を利用しており、一方、南側の緩斜面は11条の畝状堅塁により防御機能を構築している。城の大手は西側と考えられるが明確な遺構は確認されず、東側に細い搦手口と思われる通路が確認されている。



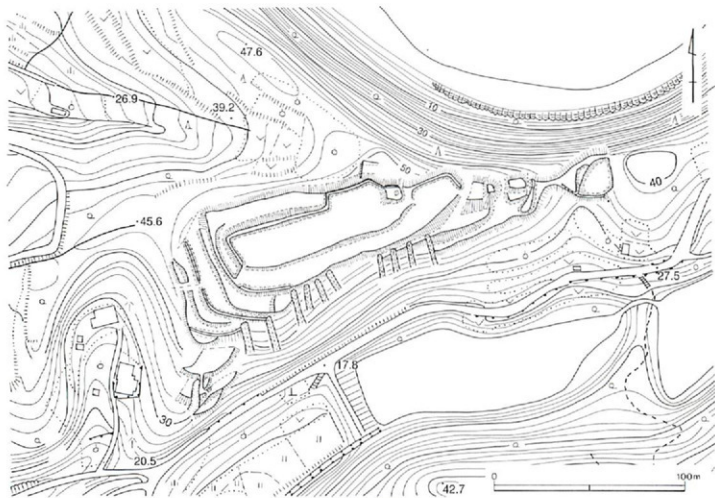
広田城跡 遠景(南から)



広田城跡 堀切



広田城跡 主曲輪北西側土塁



広田城跡縄張図

(8) 残存状況

平戸松浦氏の出城として位置づけられ、堅堀など遺構の残りが良く、文献にも記載があることから県内における重要城館の1つといえる。ただし現在宅地造成が近隣までおよび、今後開発行為にかかる危険性が高い。周辺に小中高等学校があり、地域の文化財を活用する教育の場としては有効である。

66-12 井手平城跡 (いでひらじょうあと)

(1) 所在地…佐世保市新替町

(2) 小字名…「井手ノ平」

(3) 時期…15世紀後半～天正年間

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約62m ③現況…山林・宅地 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…『三光譜録』『印山記』『松浦家世伝』『大村家覚書』『大村記』

(6) 歴史

井手平城の築城年代は定かではないが、佐賀領有田方面から早岐地区に入る要路を見張る位置であり、平戸松浦氏が佐賀方面からの敵の侵入に備えて築いた領国東端の城である。1586(天正14)年、大村純忠は有馬・波多・有田氏を誘い、平戸松浦氏に奪われた早岐地方を奪還すべく、井手平城を攻撃した。城内には、岡甚右衛門・堀江大学などおよそ300の兵が守っていたが、連合軍500人は二手に分かれて波多・有田勢は内野口から、大村・有馬勢は神徳寺口から押し寄せたとされる。

(7) 遺構…空堀、堀切、堅堀、土塁

曲輪は南側の丘陵先端部に径30mほどの円形の曲輪があり、丘陵上に東曲輪と西曲輪が形成されている。北側の丘陵の付け根部分を二条の堀切と土塁で断ち切って防御を行っている。

(8) 残存状況

平戸松浦氏の出城として遺構の残りが良く、文献にも登場する重要城館の一つである。平成11年佐世保市教育委員会により発掘調査が実施されており、貿易陶磁器や国産陶磁器と共に鉄鏃や鉛弾などの戦闘を物語る金属器が出土している。



井手平城跡 遠景(北東から)



井手平城跡 東側石塔群





井手平城跡縄張り図

### 66-13 塩浸城跡（しおひたしじょうあと）

- (1) 所在地…佐世保市塩浸・下の原町
- (2) 小字名…「中田」
- (3) 時期…16世紀末ごろ
- (4) 立地等  
①立地…丘陵 ②標高…約50m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ②郷土誌等…「大系」
- (6) 歴史

小森川南岸の浸食崖に構築された平山城で、平戸松浦氏の支城である井手平城の攻略のため1586(天正14)年に大村純忠が築城したといわれている。

- (7) 遺構…土塁・空堀

小森川により削り出された細長い丘陵上に立地しており、北側は自然の崖面を利用している。最頂部に東西約29m、南北約11mの主曲輪をもち、主曲輪の西側には細かく区画された数段の曲輪が配されている。城の南東側は幅が広い二重の空堀と土塁で寸断され、外側の空堀は曲輪の南側全城まで続いており、堀底から通路として利用されたことが考えられる。

- (8) 残存状況

曲輪の形状は不明瞭であるが、後世に土地の改変などはほとんど受けていないため、残存状況は良好といえる。曲輪の形状から判断すると、構築にあまり時間をかけずに築かれた粗雑な感があるものの、東側から南にかけての空堀は深く、背面からの防御は十分に考慮されている。井手平城跡との位置関係や歴史的な背景から考えると、井手平攻めのために短期的に築かれた城の様相が強く感じられ、戦国時代の大村氏と平戸松浦氏の攻防をあらわす特徴的な城館と言える。



塩浸城跡 主曲輪



塩浸城跡 北東空堀



塩浸城跡 遠景（井手平城より）





塩漫城跡縄張図

66-15 上小名城跡（かみこばやしじょうあと）

- (1) 所在地…佐世保市城間町
- (2) 小字名…「上小林」
- (3) 時期…14世紀後半～16世紀後半

(4) 立地等

①立地…丘陵傾斜地 ②標高…約126m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ②郷土誌等…『大系』『佐世保市宮地区歴史散歩』

(6) 歴 史

宮村地頭時代の城郭と推定されている。大村氏側の動静を察知するために平戸松浦氏により設置された館城と考えられる。

(7) 遺 構…土塁・空堀

主曲輪は標高110mに位置し、東西約20m、南北26mを測る。主曲輪の前面には二の曲輪があり、更にその前には犬走り状の帯曲輪が配置されている。また主曲輪の背面は幅が広い土塁状の高まりと更にその外側には2条の空堀と土塁により寸断されている。

(8) 残存状況

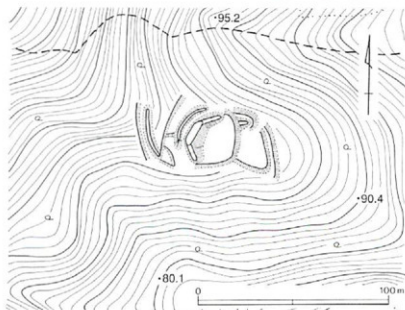
山間部に立地するため遺構の残存状況は良好である。文献史料に乏しく、城主や年代等不明点が多いため、今後も発掘調査を含めた詳細な調査が必要である。



上小林城跡 遠景



上小林城跡 主曲輪背面の空堀



上小林城跡縄張図

66-19 小峰城跡（こみねじょうあと）【町史跡（昭和54年10月5日指定）】

(1) 所在地…東彼杵郡川棚町五反田郷

(2) 小字名…「番ノ山」

(3) 時期…戦国期、後藤貴明により築城。

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約164m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『大系』『川棚町歴史散歩』

(6) 歴 史

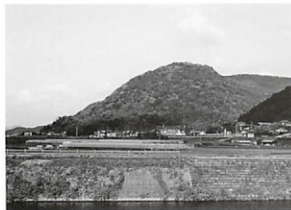
1566（永禄9）年、後藤貴明は波佐見を経て五反田の小峰山に陣城を急造し、本格的な大村領侵入の拠点とした。同年、貴明は小峰城から兵を出し歌舞多城を攻めたが失敗した。また『郷村記』には、川棚在住の後藤氏に使っていた武士が大村方に寝返りし、城域に火をかけたという記録がある。

(7) 遺 構…石積・土塁

主曲輪の形状は長方形に近く、南北10～15m、東西約65mを測る。主曲輪の東側縁辺部には板状の玄武岩による石積が見られ、隅を作り出している。また、主曲輪の西側には二の曲輪があり、その西側縁辺部も同様に石積が見られる。

(8) 残存状況

山頂に立地している城郭であるため、現在までのところ遺構の残存状況は良い。特に曲輪の形状が方形で、他の県内城館の形状とは様相が異なる。



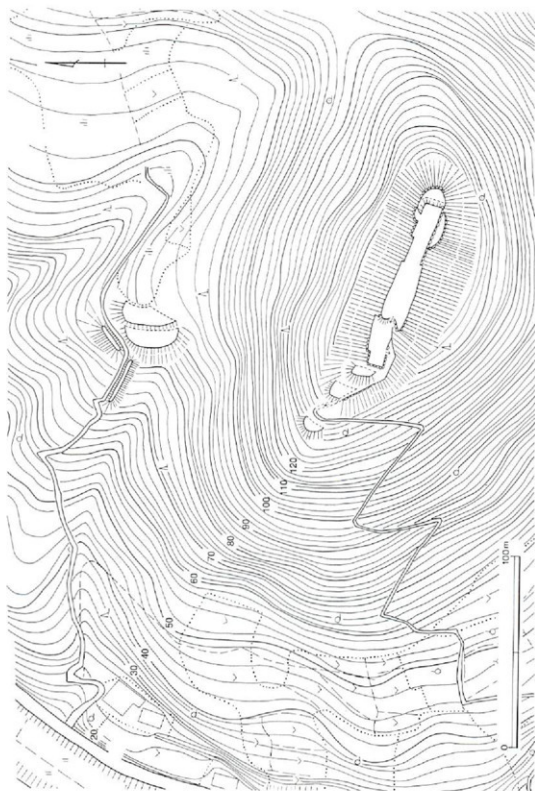
小峰城跡 遠景（南から）



小峰城跡 主曲輪



小峰城跡 二の曲輪石積



小峰城跡縄張り図

#### 67-7 松山城跡（まつやまじょうあと）

- (1) 所在地…東彼杵郡波佐見町
- (2) 小字名…「松山」
- (3) 時期…戦国中期（15世紀後半）から江戸初期
- (4) 立地等

①立地…山頂・山腹 ②標高…約130m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ①古文書…『郷村記』『新選士系録』

- (6) 歴史

1480（文明12）年から約80年間、城主福田氏と武雄の後藤勢との攻防があったとされる。

- (7) 遺構…主曲輪・帯曲輪・堅堀・平場・土塁・武者溜まり

これまでの知見では山頂部の主曲輪の遺構について、範囲は東西100m、南北120mといわれていたが、遺構が存在する山全体を踏査してみると、平場や武者溜まり、堅堀等があり、ほぼ山全体が城として機能していたものと考えられる。また、南にある比較的平たい台地状の所にも、土塁や不明遺構（門跡）等があり、また、現況図では畑地となっているところについても、土塁状の高まりがあるなど、畑地による造成とは異なる地形が残るところもある。

- (8) 残存状況

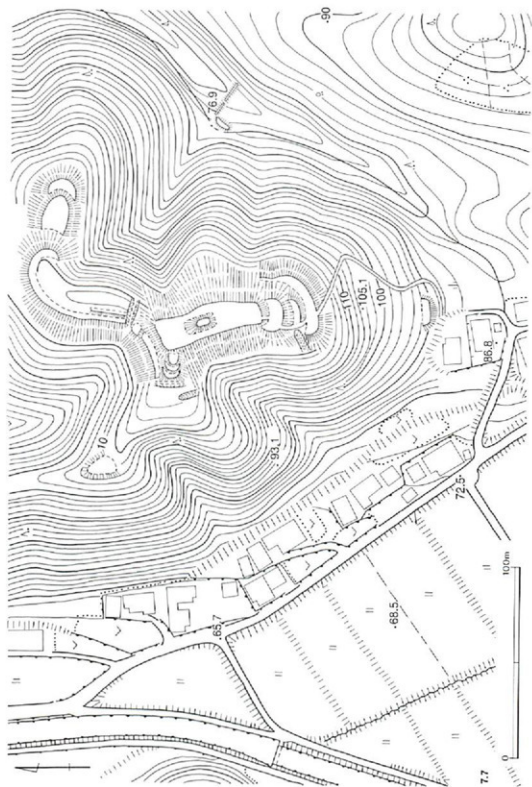
現在のところ特に開発等によって壊されたところはなく残存状況はよい。しかし町の中心地へも近く開発が起りやすい立地・地形でもあり、早急な周知策が必要と思われる。



松山城跡 主曲輪



松山城跡 堀切



松山城跡縄張図

70-11 太田和氏館跡（おたわしたちあと）【市史跡（平成19年3月30日指定）】

(1) 所在地…西海市西海町太田和

(2) 小字名…「館」

(3) 時期…室町時代か

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約22m ③現況…宅地・畑 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…『郷村記』

(6) 歴 史

『郷村記』に「四方に少しの土居あり、屋敷内広さ六畝程、卯の方に横三間、縦九間程の掘り切り、屋敷の高さ貳間半、子の方に貳拾間ほどのところに出水あり。今は百姓屋敷となる」とある。

(7) 遺 構…空堀・土塁

主曲輪は円形を呈し、南東の後背地には土塁と空堀が確認される。主曲輪内の平地は北西側に緩やかに傾斜しており、切岸の形状はあまり明瞭ではないものの、北西側には人頭大の円礫を積み上げた野面積みの石垣がみられる。また北西前庭部に半月状の平地があり、かつては物見櫓があったという。

(8) 残存状況

遺構の残存状況は比較的良好である。ただ個人の宅地であり、城館の活用などは難しいと思われる。空堀から後背地にかけては畑地による改変があり、旧状を残していない。



太田和氏館跡 近景

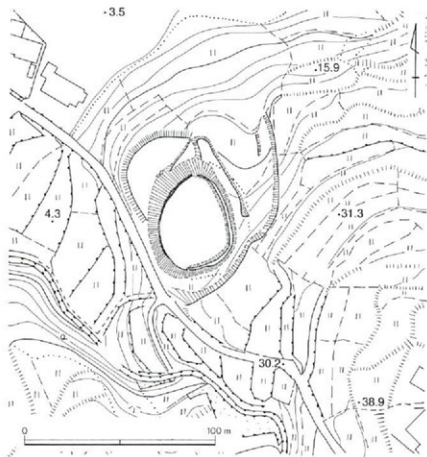


太田和氏館跡 空堀



太田和氏館跡 主曲輪





太田和氏館跡縄張り図

70-12 下り山城跡（さがりやまじょうあと）

- (1) 所在地…西海市西海町太田和
- (2) 小字名…「城の越」
- (3) 時期…室町時代か
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約35m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ②郷土誌等…『西海町郷土誌』

- (6) 歴史

『西海町郷土誌』に「東西10間、南北7間、西の方海手に長さ4間、横2間、深さ8尺ほどの堀切あり」とある。

- (7) 遺構…空堀・土塁

最頂部に不定形の主曲輪があり、北西側に北曲輪、南東側に南曲輪が配置されている。主曲輪と北曲輪との間には深い堀切があり、堀底は東側に至り帯曲輪とつながっている。南曲輪の周辺部には砂岩質の板状の石積が見られるが、城館に伴うものとは考えにくい。

- (8) 残存状況

主曲輪および北曲輪の遺構の状況は比較的良好であるが、南曲輪・帯曲輪以下は畑などによる地形の変化が著しく、田状を残していない。文献などの記録や小字名としては明確であり、歴史性・地域性は十分評価できる。太田和氏館跡を含めた一体的な保存活用が望まれる。





下り山城跡 遠景



下り山城跡 石積



下り山城跡 堀切



下り山城跡縄張り図

#### 70-20 針尾城跡 (はりおじょうあと)

- (1) 所在地…佐世保市針尾中町
- (2) 小字名…「小鯛」
- (3) 時期…14世紀後半～16世紀後半
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵 ②標高…約25m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『フロイス日本史 (第一部四十八章)』『郷村記』『新撰土系録』
- (6) 歴史

14世紀前半に針尾兵衛太郎入道覚實の名が初見する。針尾伊賀守のころには、フロイスは「日本史」の中で「大村の家臣で針尾という殿」と伝えていることから、大村純忠と主従関係にあり、横瀬浦に近い針尾瀬戸の要衝後の地に城を構え、南蛮貿易の警備にあっていたことがうかがえる。しかし、

1563（永祿6）年、針尾伊賀守は武雄の後藤貴明の大村領攻撃に呼応して横瀬浦にて宣教師襲撃事件を起こし、純忠から反撃を受け、領地を焼かれ追放された。

（7）遺構…空堀・土塁・柱穴

東西約38m、南北約40mのはほぼ円形に近い主曲輪であり、北側は3重の土塁と2重の空堀で分断され形成されている。空堀と土塁との比高差は約3mであり、非常に明瞭である。

（8）残存状況

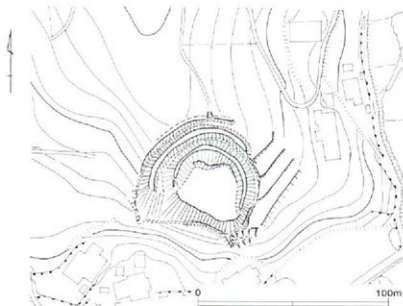
残存状況は非常に良く、この周辺での館としての形状を明瞭に残している。平成16年に佐世保市教育委員会により発掘調査が実施され、6棟の掘立柱建物跡と石列が確認され、13世紀から16世紀後半にかけての貿易陶磁器や国産陶磁器等が多数出土している。



針尾城跡 空堀



針尾城跡 土塁



針尾城跡縄張り図

## 71-2 天狗山城跡（てんぐやまじょうあと）

(1) 所在地…西海市西彼町小迎郷

(2) 小字名…「瀬ノ脇」

(3) 時期…戦国時代か

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約21m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…「西彼町郷土誌」

(6) 歴史

文献資料が全くない古城跡。針尾氏との連携の上で、大村地方から伊ノ浦瀬戸へ向かう船の監視を行う海城で八木原氏の最北端の城砦と推測される。城郭の南側に旧大村藩の家老稲田氏の旧家があり、屋敷の正面には船着き場もつくられている。また、この城館がある小迎地区は、西海橋が開通する前までは針尾の小廻との定期船が発着していた場所であり、交通の要所であった。

(7) 遺構…空堀・土塁・方形土塼

山頂部に径約15mの円形の主曲輪があり、周囲に低い土塁と空堀が一周している。また、大村湾に面した主曲輪の南側部分の帯曲輪の端部には11か所の方形の土塼が配されている。土塼は一辺が約2mで切岸の縁辺には方形土塼と同じ場所に径1mほどの円形の土塼が確認されている。

(8) 残存状況

遺構の保存状況は比較的良好である。ただ、土塼などの遺構の性格についてはさらに詳細な調査が必要である。大村湾に面している位置に限り土塼があることから砲台跡の可能性が強く、台場としての機能が有力である。また、周辺は宅地や崩落等で形状が変わりつつあり、遺跡の性格を明確にすると同時に、保存に向けての方策を検討する必要がある。



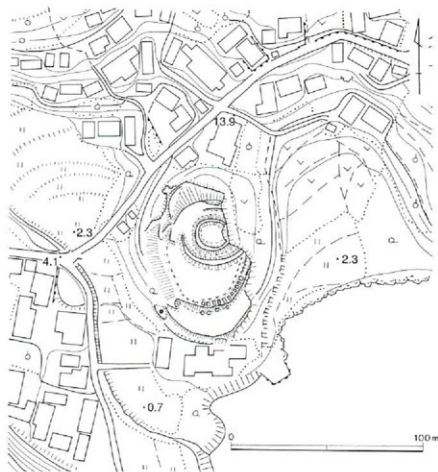
天狗山城跡 近景



天狗山城跡 方形土塼



天狗山城跡 方形土塼周辺の切岸



天狗山城跡縄張り図

71-5 河原城跡（こうらじょうあと）【町史跡（昭和50年10月20日指定）】

- (1) 所在地…東彼杵郡川棚町上組郷
- (2) 小字名…「川良」
- (3) 時期…戦国期
- (4) 立地等
  - ①立地…山腹 ②標高…約30m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『大系』『川棚町郷土誌』
- (6) 歴 史

戦国期に大村氏の出城として建てられ、大内氏の勢力が大村に侵攻した際、矢次某という者を大将として川棚中の武士や農民が立て籠もり、大内方の一手の大将である阿曾某なるものを討ち取ったという記録がある。

- (7) 遺 構…主曲輪・二の曲輪・空堀・障子堀・土塁・井戸

東側に延びる幅広の低丘陵の先端を空堀で断ち切って城域を作り出している。主曲輪にはコの字形の土塁があり、南東部にかけて階段状に曲輪が形成されている。空堀の中には障子堀の区画が見られることから戦国期の様相を持つ。

(8) 残存状況

主曲輪、二の曲輪の現況は畑であり、その周りは竹林や荒地地となっている。入口や道路で削られているところがあるが残存状況は比較的よい。



河原城跡 遠景 (南東から)



河原城跡 北側空堀



河原城跡縄張図

71-7 風南城跡 (ふうなんじょうあと)

(1) 所在地…東彼杵郡川棚町百津郷

(2) 小字名…「岩立」

(3) 時期…戦国期

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約120m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…「郷村記」 ②郷土誌等…「大系」「川棚の今昔」

(6) 歴史

小峰城を占領した後藤勢に対して大村方が拠点を置いた山城の1つである。いざというときは山道・岩立・上組・下組などに住む13人の武士が頭になり、百姓たちもかけつけてこの城を守った。

(7) 遺構…主曲輪・堅堀・空堀・土塁

北西に延びる丘陵の先端を2重の空堀及び土塁で断り切り楕円形の曲輪を作り出している。主曲輪

の周辺には小規模な帯曲輪があり、一部は帯曲輪と空堀の堀底がつながっている。曲輪の北側には石積みの通路状の遺構があり、入口の可能性が強い。

(8) 残存状況

小規模な茶畑等があるくらいで残存状況はよい。



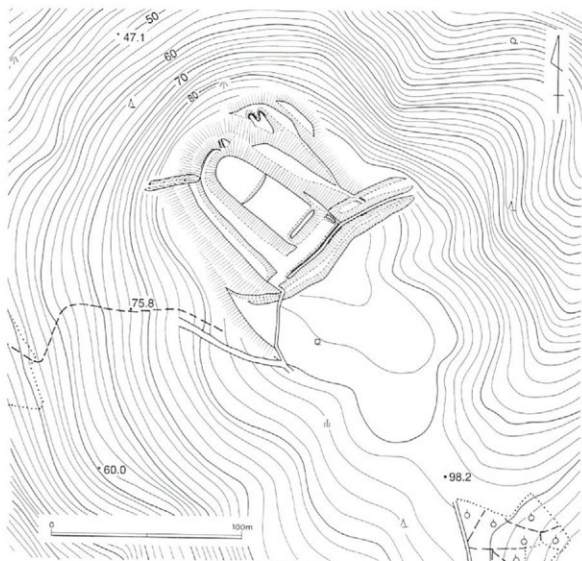
風南城跡 遠景 北西から



風南城跡 空堀



風南城跡 不明遺構 (入口?)



風南城跡縄張図

### 72-3 松岳城跡(まつたけじょうあと)

- (1) 所在地…東彼杵郡東彼杵町三根郷  
(2) 小字名…「大平」  
(3) 時期…戦国時代か  
(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約224m ③現況…山林・神社 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『大系』  
(6) 歴 史

大村氏が築城した出城の一つである。1480(文明12)年、大村純伊の頃、大村の旧領地は有馬氏の制圧下にあったが、有馬方の菅吉左馬介が守る松岳城に対し必死に攻撃をおこない奪回することに成功した。その後、純忠のころは武雄領主後藤貴明が当城一帯を一時期支配していたといわれている。1562(永禄5)年の有馬氏と龍造寺氏との戦い(丹坂合戦)の際は貴明の家臣彼杵喜之助がいたといわれている。

- (7) 遺 構…石垣・石塁・堀切

主曲輪に天正期の特徴を有する石垣があり、また西曲輪に約50mの長さの八頭大の円礫を積み上げた石塁が見られる。その他の遺構については自然地形を利用して形成されたと考えられ、明瞭な曲輪は見られない。主曲輪の石垣は北東側のみに見られ、その他の方面には石垣はなく、崩落の状況も確認されない。

- (8) 残存状況

西曲輪には神社が立地するものの、その他の部分は山間部であり、遺構の残存状況は良好である。特に石垣の残存は良好であるが、その形状に不自然な部分が多く、性格や機能について検討の余地がある。城跡からは東に長崎街道、南東には大村湾を一望でき、大村領下を監視するには極めて良好な立地といえる。



松岳城跡 主曲輪の石垣



松岳城跡 南曲輪





松岳城跡縄張り図

### 76-3 八幡山城跡（はちまんやまじょうあと）

(1) 所在地…西海市西彼町歌場郷

(2) 小字名…「下歌場」

(3) 時期…戦国時代か

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約60m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…「郷村記」 ②郷土誌等…「西彼町郷土誌」

(6) 歴 史

『西彼町郷土誌』には「約50,000㎡の城郭面積を持つ戦国末期の築城であることが判明。本丸・空堀・武者溜まり・土橋・堀切・従堀（堅堀）・水源・屋敷地が確認された。戦国末期、八木原氏と縁戚関係にあった大串氏の城ではないか」とある。

(7) 遺 構…空堀・石垣・堅堀・入口

山頂に南北約75m、東西約15mの石垣で囲まれた広大な主曲輪が形成されており、北側には一段高い槽台が築かれている。主曲輪の北側と南西側には空堀があり、傾斜が緩やかな地形を断ち切り主曲輪の防御を固めている。主曲輪の東西両側にはそれぞれ1条の堅堀があり、主曲輪の南側には結晶片岩の石積みにより入口部が形成されている。曲輪から南に約50m離れた谷部には、堤防状の遺構が確認されている。時期については不明である。

(8) 残存状況

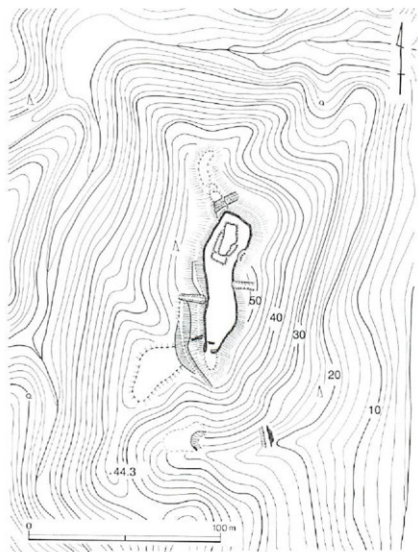
遺構の保存状況は非常に良好である。山間部に位置し、八幡神社の裏手にあたるため、開発行為はほとんど及んでいない。結晶片岩の岩塊が山頂にまで露頭する地形を切り開き、これほど広大な曲輪を形成した西彼半島独特の戦国時代の山城であり、地域性が見られる非常に重要な城館である。



八幡山城跡 結晶片岩製の石積



八幡山城跡 堀切



八幡山城跡縄張り図

76-5 城の山古城跡（しろのやまこじょうあと）

(1) 所在地…西海市西海町中山郷

(2) 小字名…「城の尾」

(3) 時期…室町時代か

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約72m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…「郷村記」 ②郷土誌等…「長崎県郷土誌」

(6) 歴 史

「郷村記」に「東西三十五間、南北十一間、小松山にて四方深谷あり、所々石垣又乾堀の形あり」「頂にあつた墓から鐘の片らしきものが掘り出された」とある。

(7) 遺 構…堀切・土塁・石垣

山頂部のひょうたん状の主曲輪を中心として、東西両側に階段状の曲輪が形成される形状である。主曲輪の中央部には自然石の露頭があり、西側は若干高くなっている。西側に続く曲輪は自然石の間につくられた幅が狭い平場であり、最下部にある平場の周辺部には石積が見られる。また、主曲輪の

北東側に展開する曲輪は、途中2箇所の空堀で寸断されており、空堀の外側には低い土塁が残存する。全体的に結晶片岩の露頭が山頂にまで及んでいるため、曲輪の平場は不明瞭であり、面積も狭い。

(8) 残存状況

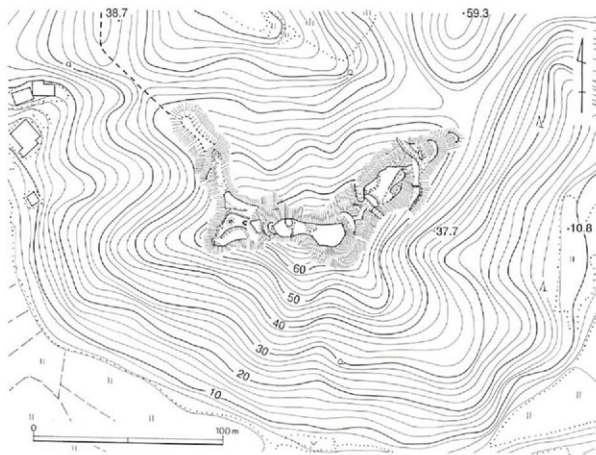
遺構はあまり明瞭ではなく、自然の地形を利用し形成された城館であり、大がかりな造成技術を有していない古手の城館の様相を示しているといえる。空堀の外側に土塁を配置するという形状は、戦国期の城館には見ることができず、時期的な特色と考えられる。



城の山古城跡 主曲輪



城の山古城跡 堀切(手前に土塁)



城の山古城跡縄張図

## 77-2 武留路山城跡（むろろやまじょうあと）

(1) 所在地…東彼杵郡東彼杵町

(2) 小字名…不明

(3) 時期…中世末期

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約341m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…『郷村記』

(6) 歴 史

『郷村記』に「四方に石垣があり、北の方に門跡がある。由緒や謂われ等については不明、矢や刀などが掘り出された。」とある。

(7) 遺 構…石塁

標高約341mの山頂部の等高線に沿うように、楕円形状の石塁が約200m以上取り巻く。石塁は、最大高約2m、基底幅約1.5mを測り、勾配はほぼ垂直に近い。石塁の内部には、井戸と伝えられる遺構や東西方向への1条の石列が残存する。石材は安山岩質の自然石で、石積の工法については布積み崩しや乱積みが見られる。

(8) 残存状況

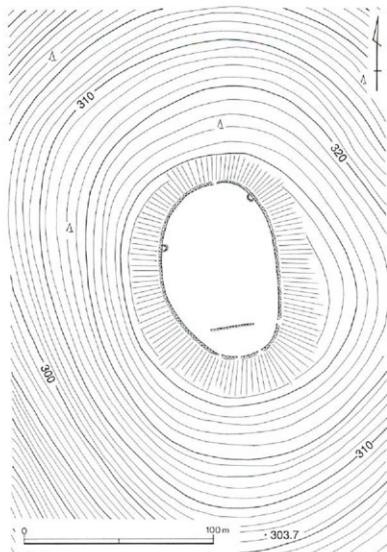
石塁は部分的に崩落があるものの、高さや形状などが判断でき良好な状態である。遺構の性格として、猪や鹿からの防衛垣とも考えられたが、山頂部だけを取り囲む形状で、出入口があることにより理解できにくく、また、牧としては範囲が狭い。円形プランの曲輪としては、長崎県における城郭的な特徴を有する遺構と考えられている。



武留路山城跡 遠景（西、大村湾から）



武留路山城跡 石積



武留路山城跡縄張図

#### 77-12 城の尾城跡（じょうのおじょうあと）

- (1) 所在地…大村市東大村町  
 (2) 小字名…「鶏首」  
 (3) 時期…南北朝～室町時代（14世紀後半～15世紀前半）  
 (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約180m ③現況…山林 ④所有…市有地

(5) 文献 ①古文書…「郷村記」

(6) 歴史

城の西方、約3kmに大村氏の居城である三城城跡がある。「郷村記」に記録はあるものの位置については確認されていなかったが、2002（平成14）年に大村市教委により新規に発見された。14世紀後半～15世紀前半までの貿易陶磁器や国産陶器などが多数表採されている。

(7) 遺構…土塁・堀切・空堀・堅堀・土橋

非常に細長い尾根を利用してつくられた城跡である。東側最頂部（主曲輪）に低い土塁に囲まれた方形の区画があり、その西側には階段状に狭い平地が形成されている。空堀は主曲輪の東側と斜面の下方の二重につくられており、空堀の外側には低い土塁が見られる。また南側斜面には4本の放射状に伸びる堅堀があり谷部まで続いている。西側の丘陵の先端には方形を意識してつくられたと思われる数ヶ所の曲輪があり、途中鉤形に屈曲する堀切で断ち切られており、南側が土橋でつながっている。

主曲輪と西側曲輪との接した部分には南に下る通路があり、南側を流れる河川の水場までつながっている。西側の曲輪周辺には多数の遺物が散乱しており、その時期から14世紀後半から15世紀前半に造られた城跡と考えられる。

#### (8) 残存状況

遺構の残存状況は非常に良く、表探遺物からも南北朝期から室町時代にかけての城跡の形態として重要な城館と言える。数条の堅堀があることから戦国期にも利用されたことが推測されるが当時の表探資料はなく戦国期の様相は不明である。山間部からは遠目に三城城跡を見下ろすことができ、三城城跡との関係についても今後も継続的な調査の必要がある。



城の尾城跡 空堀



城の尾城跡 堅堀



城の尾城跡 石積



城の尾城跡縄張り図



## 79-2 権現岳城跡（ごんげんだけじょうあと）

- (1) 所在地…諫早市小長井町遠竹
- (2) 小字名…「権現平」
- (3) 時期…戦国時代か、鶴田遠江守の居城。

### (4) 立地等

- ①立地…山頂 ②標高…約96m ③現況…山林 ④所有…民有地

### (5) 文献 ②郷土誌等…『小長井町郷土誌』

### (6) 歴史

『小長井郷土誌』に「一、古城跡 北東南の三方は深く谷を以て環られ、面の一方のみ婉々たる山嶽に連り頗る要害の地なり。頂上には深さ三間廣さ四間位の濠を環らせり。頂上の平坦たる所は凡そ二十三反歩ありて、種々の器物の破片及び瓦片の如きもの散在するを見る。今より七百年前、遠竹六十三石の城主鶴田遠江守という武士の居城なり」とある。

### (7) 遺構…空堀・土塁・石列

東西約75m、南北約45mの楕円形の形状で、主曲輪を中心として周囲には帯曲輪と2条の空堀と土塁が築かれており、入口部分と考えられる東側から続く空堀を含めると3重となる。主曲輪の南側斜面は巨礫の露頭が多く、自然礫を利用した天然の要崖となっている。主曲輪には鉤形の低い石列があり、建物の礎石が散在する。

### (8) 残存状況

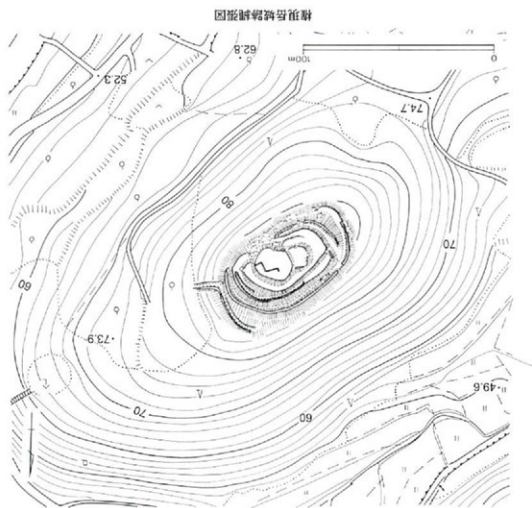
空堀・土塁などの遺構の残存状況は非常に良好であり、長崎県下に見られる他の城館とは異質な形状であることから重要な城館の一つである。城の北側に宝篋印塔を主体とする石塔群があり、鶴田氏との由来があるといわれているため、城郭の時期を計る上で非常に重要である。



権現岳城跡 空堀



権現岳城跡 主曲輪南側の巨礫露頭



### 83-2 三城城跡（さんじょうじょうあと）

- (1) 所在地…大村市三城町
- (2) 小字名…「三城」
- (3) 時 期…1564（永禄7）年～1598（慶長3）年
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約37m ③現況…神社・山林・宅地・畑 ④所有…公有地・民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』『大村家譜』『見聞集』②郷土誌等…『大系』など

- (6) 歴 史

大村純忠がキリスト教に入信した翌年である1564（永禄7）年に築城され、その子喜前が玖波城に移転するまでの約35年間大村氏の居城となる。1572（元亀3）年、武雄領主後藤賢明が平戸の松浦隆信および諫早の西郷純亮らと謀り三城城を攻撃する激戦が行われた（「三城七騎籠」）。敵軍約1,500名に囲まれた大村氏の勢力は7名の家臣を中心に約100名であったが、大村氏家臣の奇策により応戦し、撤退させた。

- (7) 遺 構…曲輪、空堀、土塁

8つの曲輪から成り立っている。曲輪Ⅰが主曲輪であり、東西約200m、南北約100mと広大である。曲輪Ⅱは畑地により旧状は残さないが発掘調査により南側に空堀と土塁が確認されている。曲輪Ⅲは周囲を土塁で囲まれた径約60mの楕円形状の平地である。また、曲輪Ⅰと曲輪Ⅱ、曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの間には明瞭な空堀が見られる。

- (8) 残存状況

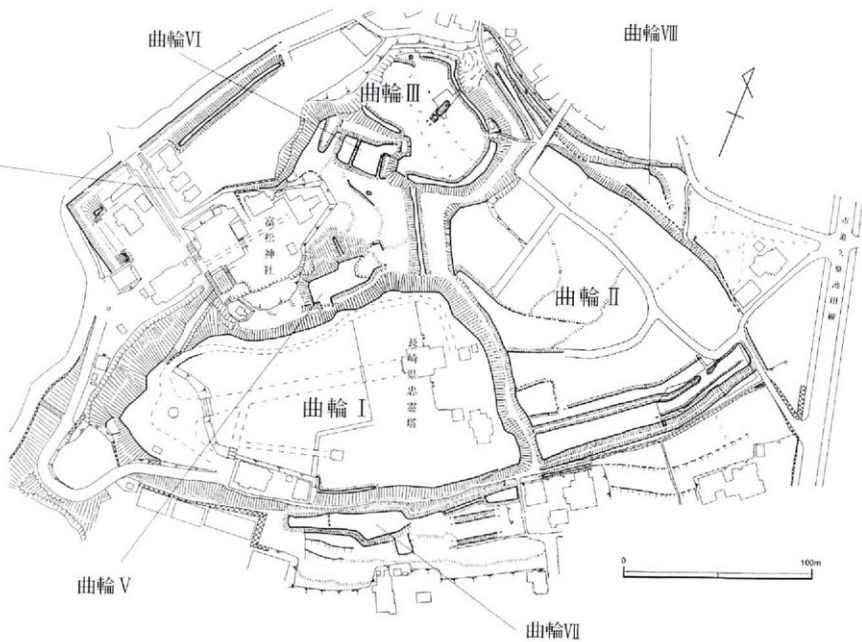
主曲輪には長崎県忠霊塔が建立され、戊辰戦争以後の戦死者の霊を祀っている。また、周囲は宅地化が進み、一部宅地造成地の候補地となったが、市が将来の史跡指定を見越して用地を買収し公有化している。また城の東側部分には九州新幹線西九州ルートの路線がかかり、城跡の保存方法について工法を含めて鉄道運輸機構との協議が行われている。



三城城跡 曲輪Ⅰ



三城城跡 曲輪Ⅱ



三城址跡遺蹟図 (大村市政委作成) (S=1/2000)

83-4 玖島城跡（くしまじょうあと）【一部（お船藏跡）県指定（昭和44年4月21日）】

(1) 所在地…大村市玖島町

(2) 小字名…「玖島」

(3) 時期…1598（慶長3）年築城

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約17m ③現況…神社・公園・宅地 ④所有…公有地・民有地

(5) 文 献 ①古文書…『郷村記』『大村家譜』『見聞集』『大村家秘録』 ②郷土誌等…『大系』

(6) 歴 史

大村喜前は、朝鮮出兵時の経験から、海に近い要害こそ防衛に適すると考え、当該の地に1598（慶長3）年に築城し、大村氏の近世における居城として幕末まで機能した。当初の玖島城は様々な点で不備があり、幕末まで数回にわたり城の石垣の修理がおこなわれている。

(7) 遺 構…石垣、空堀、虎口、お船藏

(8) 残存状況

明治維新と共に本丸の館や櫓も破壊され、のちに本丸跡には歴代の藩主を祀る大村神社が創建された。また周囲は大村公園として市民の憩いの場となっている。



玖島城跡 虎口



玖島城跡 空堀

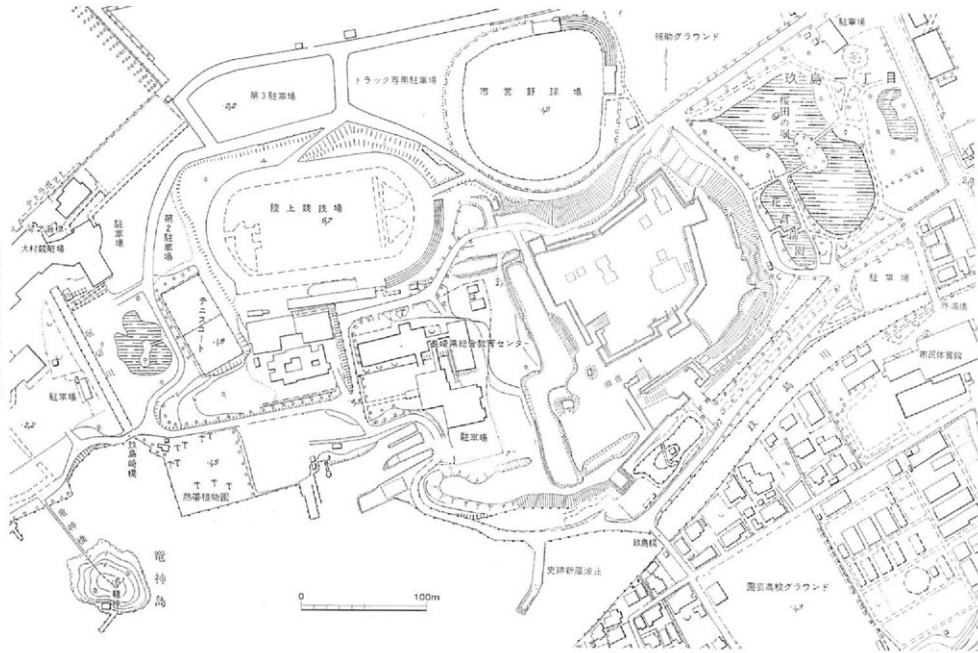


玖島城跡 西北部石垣



玖島城跡 御船藏

松島総合運動公園 (1/3000)



#### 84-6 伊賀峰城跡 (いがみねじょうあと)

- (1) 所在地…大村市溝陸町
- (2) 小字名…「伊賀峰」
- (3) 時期…戦国時代
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約115m ③現況…山林・公園・祠 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』
- (6) 歴 史

諫早市との市境に隣接し、河川を挟んで反対側には真崎城跡がある。大村氏が造った最も南側の城跡であり、対岸に位置する西部方の真崎城とは対峙する性格をもつ。山頂には随所に玄武岩の巨礫が露頭しており、50年前の諫早大水害の際に災害復旧用の石材を産出した痕跡が生々しく残っている。山頂には夫婦石とよばれる巨礫があり、その根元には「伊峰善四郎」という名を祀る祠がある。

- (7) 遺 構…土塁・石積・空堀

特徴的な遺構はあまり見られないが、主曲輪南側に低い土塁と石積、主曲輪北側周縁部に土塁、主曲輪北東側に石積が残る。石積の時期については人頭大の円礫による野面積みがあり、古い様相をもつ。また、主曲輪の北東側には帯曲輪がめぐる。主曲輪の北側の一段下がったところに方形の曲輪があり、北端部には低い土塁と浅い空堀、石積などが見られる。

- (8) 残存状況

遺構の残存状況はあまり良好ではない。ただし、大村氏が西郷氏を警戒するために築いたことは間違いないとその地域性・歴史性は重要である。また城の管理を地区の保存会が行っており、地域としての愛着は非常に高い。



伊賀峰城跡 空堀

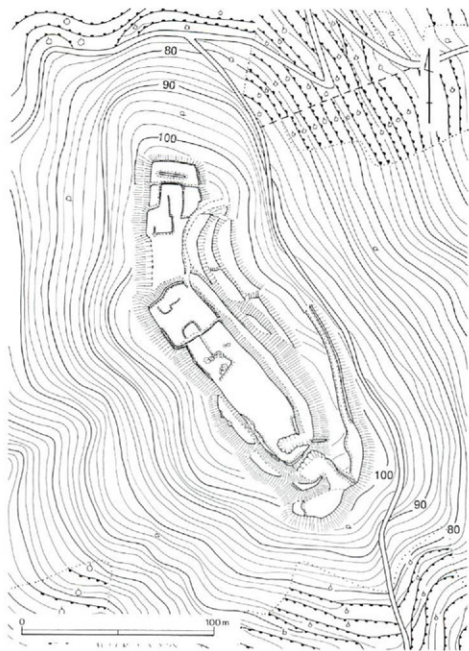


伊賀峰城跡 夫婦岩と祠





伊賀峰城跡 近景



伊賀峰城跡概張図

#### 84-8 平松城跡（ひらまつじょうあと）

(1) 所在地…諫早市本明町

(2) 小字名…「古城」

(3) 時期…室町時代後期

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約75～80m③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ②郷土誌等…「大系」「諫早史談」

(6) 歴 史

室町時代後期の城跡と推測され、西郷氏が大村氏を警戒するためにつくられた支城と考えられている。城下には平松神社があり、神社の境内には五輪塔と宝篋印塔があり、神社の前からは青磁等の遺物が出土したと言われる。西側の曲輪は、諫早市教委が確認調査を実施しており、遺物や遺構などは確認されていない。

(7) 遺 構…土塁・堀切・空堀・堅堀・石積

先端が二つに分かれた南側に延びる丘陵上に東西2ヶ所の曲輪があり、いずれも曲輪の北側は2条の堀切で断ち切り、南側先端部は斜面の等高線に沿って2条の空堀が築かれている。東側曲輪の主曲輪縁辺部には石積があり、周囲には三日月状の数箇所の曲輪が見られる。また、主曲輪南東部の裾部にかけて堅堀が確認されている。西側曲輪は東側曲輪に比べやや小規模であるが、遺構の配置はほぼ同様であり、東西曲輪の谷間にかけて斜面を斜行し土塁状の通路が確認される。西側の曲輪部分からは明染付、東側曲輪からは石積から国産陶器甕、堅堀から明染付が表採されている。

(8) 残存状況

地権者の森林伐採により一部遺構が損失しているが、原型は残している。一部新幹線のトンネル出口工事にもかかる恐れがあり、保存については早急な措置が必要である。



平松城跡 東側曲輪近景



平松城跡 西側曲輪



平松神社境内石塔群

#### 84-9 真崎城跡（まさきじょうあと）

- (1) 所在地…諫早市真崎町
- (2) 小字名…「井手の平」
- (3) 時期…室町時代後期（15世紀末）
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約73m ③現況…山林・神社 ④所有…市有地・民有地

- (5) 文 献 ②郷土誌等…「大系」「諫早史談」
- (6) 歴 史

西は大村領と接する境目の城であり、高城を本城とする西郷氏が領内の各地に築城した支城の一つである。文明年間（1469～87）ごろの諫早領主西郷高善の時代には、家臣である志々伎四郎左右衛門が居城していたという。隣接する社殿「しきとんさん」の床下から宝篋印塔の礎石が発見され、「寛正2（1461）年」の跡が見られる。「しきとんさん」は志々伎四郎左右衛門を祀った神社といわれている。

- (7) 遺 構…土塁・空堀・帯曲輪

主曲輪は地形に沿った不定形を呈し、北側の中央部分に一段高い平場と、周辺には等高線に沿って5条の帯曲輪が形成されている。傾斜が急激な東側を除き周辺部には土塁がめぐり、幅が狭い帯曲輪においては空堀状の地形を作り出している。主曲輪における平場は等高線に沿って形成されており、技術的に簡素に造成された感がある。ただ、主曲輪北西側中腹部の帯曲輪は、幅広く切岸が明瞭であり、土塁からの高さを含め約3mの比高差があり、極めて防衛力が高い。

- (8) 残存状況

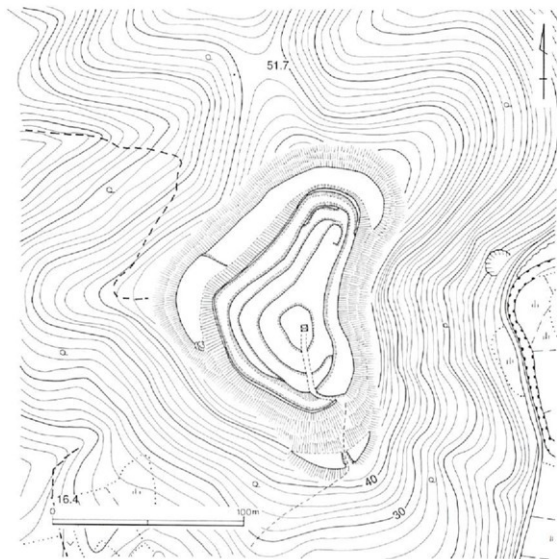
遺構の状況から、戦国時代初期の城館の形状が推察され、西郷氏の藩城としての特徴が感じられる。北東側の防御を固めていることから、北東側の大村氏が築城した伊賀峰城跡を意識した城郭であることが明確であり、形状については西郷氏が築いた周辺の城郭との比較検討が必要である。



真崎城跡 近景



真崎城跡 主曲輪（一段高い平場）



真崎城跡縄張り図

85-1 吉田城跡（ふるたじょうあと）

- (1) 所在地…諫早市高来町善住寺
- (2) 小字名…「高城」
- (3) 時期…南北朝時代、湯江氏の居城か。
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵 ②標高…約140m ③現況…山林・竹林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ②郷土誌等…『北高来郡湯江村郷土誌』
- (6) 歴史

『湯江村郷土誌』には「前に城址に比し、規模広大にして居城としては適当の地なり。今尚明らかに城址を存すれども、残滓水なく山林と化し老松古杉蒼鬱として徐ろに昔を偲ばしむるのみ。其由来を知る人なきを遺憾とする。」とある。

- (7) 遺構…空堀・土塁・土橋・畝状堅堀・桁形・障子堀状土塁

東西約210m、南北約320mという広大な城域で、西側を空堀と土塁で分断し曲輪をつくりだしてい

る。また中央に南北約300mの広大な空堀と土塁が築かれ、西側に長方形の曲輪と東側に不定形の曲輪が形成されている。西側の曲輪には北側縁辺部に畝状堅堀があり、中央の一番高い部分に障子状の区画を有する土塁が築かれている。また西側からは土橋で結ばれており、この土塁の北側の平地とつながっている。中央を縦断する空堀は、現在林道として使われており、幅に若干の改変があるもののほぼ中央において西への凸型に張り出しが見られ、空堀の南北両端では急峻な堅堀となっている。東側の曲輪は、東側に傾斜する地形を利用して曲輪がつくられており、北側には土塁と広大な枳形が、南東側には眼下の城下が一望できる位置に出曲輪が築かれている。

#### (8) 残存状況

山林の管理用道路で若干地形の変化が見られるものの、主要な遺構は顕著に観察され、遺構の規模・形態について大変重要な城館といえる。文献としては、南北朝期の豪族城館としてとられえられているが、遺構の形態からみると戦国期の大名クラスの勢力により改変された可能性が示唆される。



古田城跡 遠景



古田城跡 中央空堀（張り出し）



古田城跡 障子状土塁



古田城跡 西側空堀内土橋



古田城跡概張図



### 85-13 岡城跡（おかじょうあと）

(1) 所在地…雲仙市瑞穂町夏峰名

(2) 小字名…「城」「陣ノ内」「城の尾」

(3) 時期…戦国時代（16世紀初頭）に神代城（鶴亀城）の支城として築城。城主は岡貴明（神代貴茂の弟）。

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約30m ③現況…竹林・山林・畑地 ④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…『角川日本地名大辞典』

(6) 歴史

天正12（1585）年の沖田暉の戦いによる神代氏滅亡の後、有馬軍の攻撃を受け岡一族も滅亡、その時に廃城か。

(7) 遺構…堀切・土塁・虎口

主曲輪と二の曲輪から構成される。二の曲輪は丘陵突端に位置し、堀切により主曲輪と分断されている。北側堀切の東側には、桁形（外桁形）を呈する虎口の痕跡が残っている。主曲輪はほぼ長方形で、南側に幅広の土塁と堀切がある。堀切の深さは土塁の高さと合わせて約6mを測り非常に急峻である。主曲輪の南側には階段状の平場があるが、城の遺構といえるかどうか不明である。ただ、最も小高い部分に基壇状の石組みが見られる。

(8) 残存状況

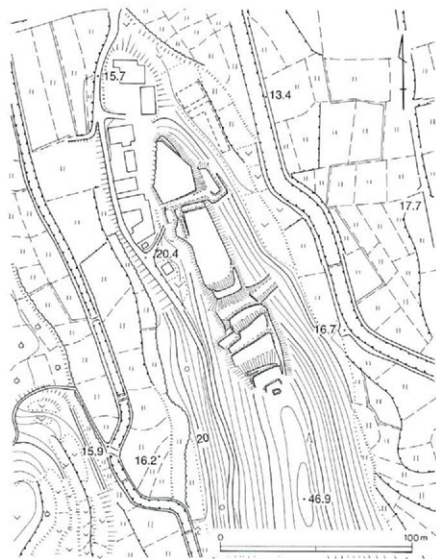
規模は小さいものの、堀切・土塁・虎口などの遺構の残存状況は良好。島原半島北部の平山城の基本的な形態といえる。



岡城跡 遠景



岡城跡 虎口



岡城跡縄張図

#### 86-4 鶴亀城跡 (つるかめじょうあと)

- (1) 所在地…雲仙市国見町神代
- (2) 小字名…「城ノ上」
- (3) 時期…築城は南北朝期の神代氏による、慶長期は鍋島氏の居城。
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵
  - ②標高…約15m
  - ③現況…神社・山林・竹林・畑地
  - ④所有…民有地
- (5) 文献 ②郷土誌等…『国見町郷土誌』
- (6) 歴史

『国見町郷土誌』には「城の周囲は大変深い泥土に囲まれ、高さ六丈、広さは東西約二町、南北に約六町、初めは丘陵式に砦を築いていたが、次第に城の機能・体面を保つ様に石垣や空堀・ぬけ道を作り、出丸他各丸に防禦の砦をつくるなどして、神代式部大輔貴益の時に完成したと考えられている。」とある。

### (7) 遺構…空堀・土塁・石垣

南北約320m、東西約290mの南側を基点とする三角形の形状を呈し、東西にのびる空堀で南側曲輪と北側曲輪が分断されている。南側曲輪は城主の居館跡と考えられ、南に幅約35mの広大な櫓台、北東と北西の隅に小規模な櫓台、東側縁辺部に虎口が築かれ、周囲は高さ約2mほどの土塁で囲まれている。北側曲輪は広大な範囲であり、現況が畑地であるために遺構の判断が難しい地形である。曲輪の周囲には土塁があったと考えられるが、崖面の崩落等で欠損する部分が多い。ただ、北側縁辺部を中心に曲輪の形状が推察される部分がある。北西側にある平場は、南を土塁と空堀で区画され、ほぼ方形につくられている。中央の平場は北側と南側にある幅広の空堀によりつくられた曲輪であり、古絵図から大手と考えられる。北東側の平場は南側を土塁と空堀で区画されている。大手の西側の海浜部には堤防上の高まりが数箇所に残っており、船着き場跡と推測されている。

### (8) 残存状況

南側曲輪の遺構の残存状況は極めて良好であり、神代神社の敷地内であることなどから管理が行き届いている。北側曲輪は畑地による改変が著しいが、随所に遺構の名残が見られ、発掘調査などによる詳細調査により全貌が見えてくると考えられる。また、歴史的に長い時期に使われた城館であり、残存する遺構の時期についても検証が必要である。



鶴亀城跡 北側曲輪北東側平場（鍋島宅庭園）



鶴亀城跡 大手周辺（北側曲輪）



鶴亀城跡 南側曲輪虎口



鶴亀城跡 北側曲輪船着き場か



鶴龜城跡縄張図

#### 88-12 西高田城跡（にしこうだじょうあと）

- (1) 所在地…西彼杵郡長与町高田郷
- (2) 小字名…「カケノ本」
- (3) 時 期…戦国時代後期ごろ、領主は長与氏か。
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約88m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』

(6) 歴 史…『郷村記』では「幸田村、古城之事」の中で明記。沿革等の記録はなし。

- (7) 遺 構…土塁・堀切・のろし台・石塁・石垣

主曲輪の北側の最頂部に径10mほどの平場があり、馬蹄形状の「のろし台」と思われる遺構が見られる。主曲輪の後背部にはL字型の土塁と約2mの深さの堀切、更に北側には半円形状の曲輪とその外側に1条の空堀を配する。さらに南側の主曲輪との比高差が約10m近く下がった位置に、南北30m、東西20mのはほぼ長方形に近い曲輪（二の曲輪）があり、南西側に石積と石塁が残存する。また、二の曲輪の東側には登り道があり、その途中には枳形の遺構があるが、性格については不明である。

- (8) 残存状況

遺構の残存状況は非常によいが、遺跡の沿革に不明な部分が多い。周辺では宅地開発が進んでおり、遺跡の早急な周知化が望まれる。



西高田城跡縄張り図



西高田城跡 遠景



西高田城跡 のろし合（開口部から）

### 88-13 東高田城跡（ひがしこうだじょうあと）

- (1) 所在地…西彼杵郡長与町高田郷
- (2) 小字名…「山下」
- (3) 時期…戦国時代後期ごろ、領主は長与氏か。
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約60m ③現況…神社・山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…「郷村記」

(6) 歴 史 『郷村記』では「幸田村、古城の事」の中で明記。すでに、鎮守天満社が所在した事が明記されている。

- (7) 遺 構…土塁・堀切・竪堀

最頂部に東西20m、南北10mの楕円形の主曲輪があり、背部に2条の明瞭な堀切を有する。堀切は非常に深く、両端は竪堀となっている。また、主曲輪の西側には天満宮の社殿がある平地があり、後世の掘削により造成されたものと思われる。

- (8) 残存状況

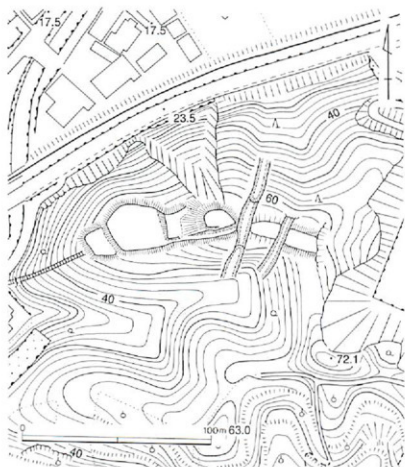
堀切の残存状況は非常に良いが、曲輪の部分に関しては神社などの造成により後世の改変が著しく、現況をあまり残していない。また、近年神社社殿の建て替えに際し、曲輪南側に取付道路が建設されている。形状としては、西高田城とほぼ同様の構えであり、街道を挟み同時期に一体の城として眼下を見張る目的でつくられたものと考えられる。



東高田城跡 遠景



東高田城跡 堀切



東高田城跡縄張り図

89-7 鳥山城跡（とりやまじょうあと）

- (1) 所在地…長崎市大手町
- (2) 小字名…「下鳥家」
- (3) 時期…室町時代後期または戦国初期
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂 ②標高…約86m ③現況…山林・送信所 ④所有…市有地・民有地
- (5) 文献 ①郷土誌等…『西浦上村郷土史』
- (6) 歴史

頂上は平地で、南に堀切、北方1段低いところに井手あり。地侍長崎七家（長崎・大村・戸田・岡田・真道・熊野・深堀）の共同により築城か。

- (7) 遺構…土塁・堀切・空堀・櫓台・石段

双楯状の山頂部と鞍部に曲輪が形成されている。北側の曲輪は最頂部に櫓台があり、主曲輪の周辺には2条の幅広の帯曲輪が配されている。帯曲輪は西側先端部に空堀となり、局所的な土塁により比高差がつけられ入口部が形成されている。南側の曲輪は東縁辺部に空堀と土塁があり、先端は岩の露頭を利用した入口が見られる。北側の曲輪から鞍部の平場へは自然石を利用した石段が築かれている。鞍部平場の両側線にはそれぞれ1条の空堀がある。北側曲輪の主曲輪周辺から約30点の遺物が表採されている。龍泉窯青磁、朝鮮製雑釉陶器、国産陶器、須恵器鉢など14世紀から16世紀にかけての比較的長い期間にかけての遺物と考えられる。



### (8) 残存状況

アンテナや送信所、貯水槽などが所在するが、遺構への影響は少なく、比較的良好な状態で残存している。表採遺物が多く長期的に利用された城館の可能性が強い。築城者は不明だが、大手町の地名の語源でもあり、長崎北部の拠点的な城館であろう。長崎開港前の中世の様相を知る上で重要な城郭と言える。



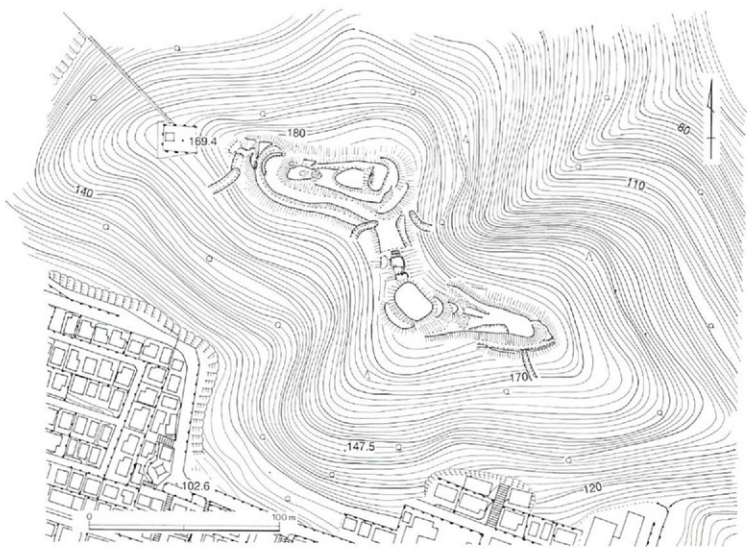
鳥山城跡 遠景



鳥山城跡 北側曲輪帯曲輪



鳥山城跡 南側曲輪石段



鳥山城跡縄張り図

## 89-27 かのう城跡

(1) 所在地…諫早市多良見町

(2) 小字名…「観音寺」

(3) 時期…不明

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約102m ③現況…山林・貯水槽 ④所有…民有地

(5) 文 献 ②郷土誌等…『多良見町郷土誌』

(6) 歴 史

築城時期および城主は不明である。眼下に長崎街道が通り、近隣にも金尾城跡などの城跡が残ることから、街道を監視する土豪族の支城の可能性が高い。また、以前山頂に祠と石塔があったといわれ、石塔は現在、城の北側の稲荷神社の境内に移設され祀られている。

(7) 遺 構…土塁・空堀・堅堀・櫓台

山頂に不定形の平場と櫓台があり、南側と北側の一段下がったところに腰曲輪、北側斜面に3条の堅堀が確認される。また、北東側裾部に空堀と土塁があり、堅堀の一つと重なり合っている。

(8) 残存状況

城域は、主曲輪と櫓台に貯水槽が設置され、一部アスファルトによる舗装があり、裾から主曲輪まで私道がつくれるなどかなり改変を受けている。しかし原形はさほど変化しているわけではなく、石塔がかつて存在したなど、城郭の時期的な変化を考察するうえで貴重な資料である。ただゴルフ場敷地内であり、許可なく立ち入りをおこなうことは困難である。



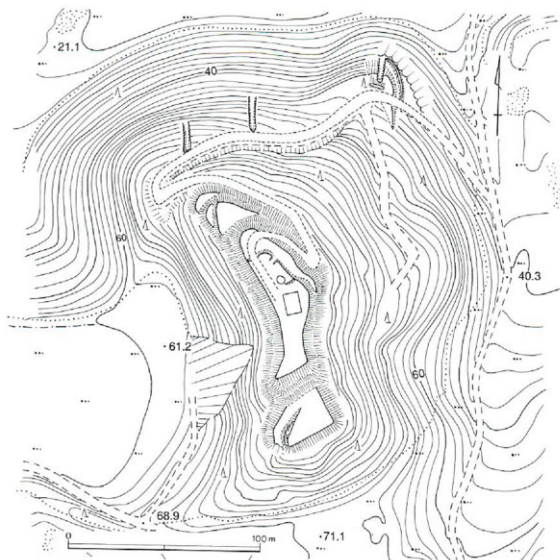
かのう城跡 近景



かのう城跡 主曲輪



かのう城跡 周辺石塔



かろう城跡概張図

#### 90-4 岡城跡（おかじょうあと）

(1) 所在地…諫早市飯盛町野中

(2) 小字名…「岡」「城山」

(3) 時期…戦国時代か

(4) 立地等

①立地…丘陵先端 ②標高…約50m③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…『諫早市史』『飯盛町史』

(6) 歴史

囲城と同じく、築城時期及び城主は不明である。囲城跡の詰め城と考えられるが、やや距離があり疑問が残る。

(7) 遺構…土塁・空堀・堅堀・帯曲輪

南に延びる丘陵の先端を堀切で断ち切り、その内側に土塁を配し比高差をつけて堅固な守りを作り出している。長方形の主曲輪はほぼ中央にあり、その周囲には帯曲輪がまわる。主曲輪の周囲には堅堀が4条見られるが規則性はない。丘陵の更に北側に浅い空堀が1条見られるが、間の平地は明瞭ではない。

(8) 残存状況

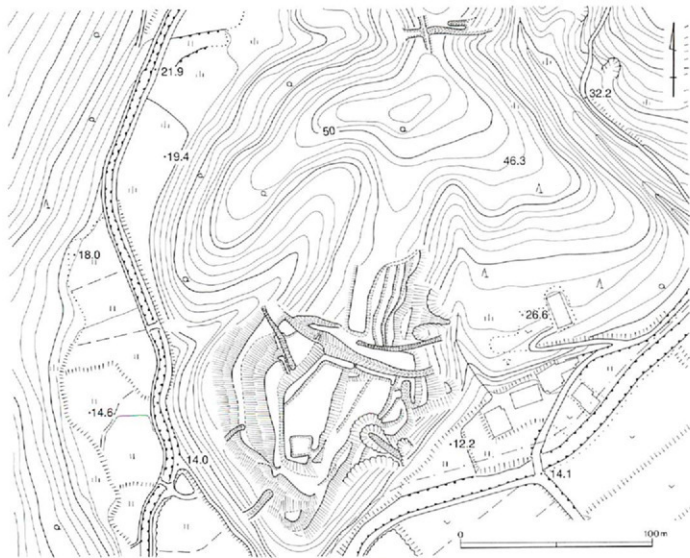
南西側の法面が河川や市道に面しており、かつて崩落や崖面の保全工事で若干改変があるものの、遺構の残存状況は良好である。ただし、文献として明確な資料はなく、発掘調査等を含めて更に詳細な調査が必要と思われる。



岡城跡 遠景



岡城跡 空堀



岡城跡編張図

## 90-5 園城跡 (かこいじょうあと)

(1) 所在地…諫早市飯盛町

(2) 小字名…「園」

(3) 時期…戦国時代か

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約83m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ②郷土誌等…『諫早市史』『飯盛町史』

(6) 歴史

築城時期及び城主は不明である。飯盛町は中世末期、西郷氏の勢力範囲であるが、西郷氏関連の記録からは見ることができないため、直属の支城とは考えられない。龍造寺氏関係の文書からは元龜・天正期に西郷氏の家臣として「東左右衛門太夫純盛」の名があるが、城主としては定かではない。

(7) 遺構…土塁・空堀

主曲輪の形状は35m×30mの長方形であり、周囲は2重の土塁と空堀に囲まれている。主曲輪の南西側辺のはほぼ中央で土塁は途切れ、空堀には土橋が築かれている。主曲輪北側には下方に下る堅堀と低い土塁がある。主曲輪の南東側平場は道路側が崩落し、北東側は土塁が延びる。主曲輪南側には浅い空堀があり、両端は畑と道路で欠損する。

(8) 残存状況

遺構の残存状況は非常に良好である。方形を呈する曲輪の形態は県内では非常に珍しく、近隣の岡城跡とともに築城時期および城主について文献や地名など継続的な調査が必要である。



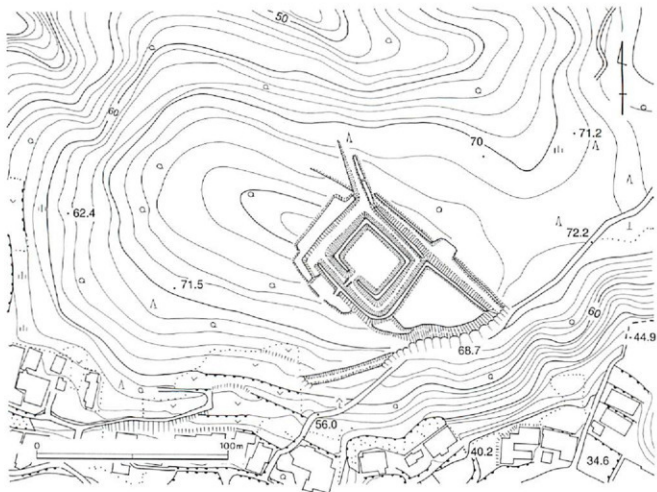
園城跡 主曲輪東隅



園城跡 北東側空堀



園城跡 遠景



田城跡縄張図

91-12 飯岳城跡（いだけじょうあと）

- (1) 所在地…雲仙市千々石町木場名
- (2) 小字名…「城山」「横堀」「新切」
- (3) 時期…南北朝期（14世紀後半）に築城、領主は有馬氏
- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…約362m ③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ①古文書…「北肥戦誌」
- (6) 歴史

南北朝期の1372（文中元）年ごろ、九州探題今川了俊が千々石浜に進入、城主林田隠岐守は備えて飯岳の高地に陣を敷いてこれを防いだ。

- (7) 遺構…土塁（石塁）・石積

最頂部のほぼ中央に主曲輪が有る。主曲輪の中に2ヶ所の高まりがあるが、自然石の路頭も見られることから、自然の地形を利用し見張り台を作り出したと考えられる。東側から南側にかけては、土塁（一部石塁）がめぐり、両側は急激な傾斜地である。主曲輪を中心に東西にかけて階段状に曲輪が形成され、南側縁辺部を中心に石塁が築かれている。また東曲輪の北側には犬走り状の平場があり、



人頭大の礫石が野面積みで築かれている。西曲輪の北側には幅広の腰曲輪があり、その中央付近に石列があることから通路として利用された可能性がある。龍泉窯系の青磁や土器等が表採されている。

(8) 残存状況

自然石が多く、平場の形成としては良好ではない。ただし、文献や表採資料としては比較的古い時代(南北朝期)の城郭と考えられており、その時期の城館の形態が見られることは貴重な資料である。



飯岳城跡 遠景



飯岳城跡 主曲輪



飯岳城跡 主曲輪東側石積



飯岳城跡縄張図



## 92-5 森岳城跡（もりたけじょうあと）

(1) 所在地…島原市城内1丁目・2丁目・3丁目

(2) 小字名…「本丁」「釣鐘丁」「田屋敷」「新馬場」「桜馬場」「下台所跡」「堀端」「桜馬場西」

(3) 時期…元和4（1618）年

(4) 立地等

①立地…平野 ②標高…20m ③現況…公園 ④所有…公有地

(5) 文 献 ①古文書…「長崎縣南高来郡村誌」

(6) 歴 史

中世以来、「森岳」と呼ばれる小高い丘に築城された。城の4面には内外を分かつ障障（石塁）が設けられ、本丸と二の丸を有する。士卒の居住空間は郭内と鉄砲町、新屋敷清水田町にあった。

1616（元和2）年に松倉重政の手により築城が開始される。島原の乱により松倉氏改易後、高力、戸田氏を経て、松平氏に至る。1637（寛永14）年の島原の乱発生の際、キリシタン門徒の攻撃を受けるが撃退している。また築城以前の1584（天正12）年に勃発した沖田畷の戦いでは、有馬、島津側の陣屋が森岳に置かれたとされている。

(7) 遺 構…石垣・櫓台など

本丸南面には都合4面の横矢掛が設けられ、さらには腰曲輪を有する。腰曲輪の設けられた箇所は城内でも比高差のある場所で3段の狭間を配置できる。狭間から堀端までは50～70m内外の距離に収まり、鉄砲射撃を意識したものであることが分かる。

(8) 残存状況

城郭は外郭と内郭により構成される。外郭は南北に長い長方形形体を成し、内部は主に上級武士団の屋敷地に当てられた。現在、住宅街のなかにその石垣黒線が残存しているが、西面に比べて東面の石垣が高く、残存状況も比較的よい。

本丸、二の丸外周は全て堀がめぐらされており、現在でも高石垣の状況が良好に観察できる。本丸内は観光施設建設や復元整備等の影響で新しい石垣が築城当時のものと混在し、一部改変を受けている。北側虎口も角に鏡石が残存するが、かろうじて柵形の形状が分かる程度で天守に至る動線が判然としない。

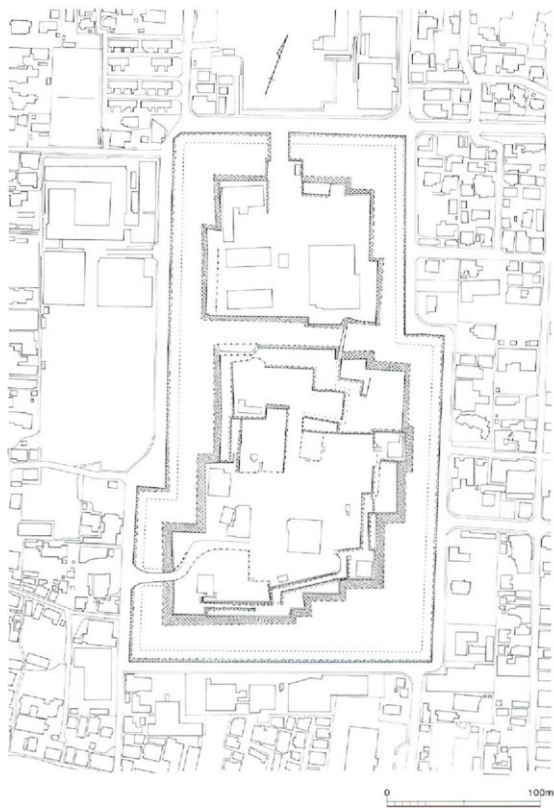
森岳城は近世徳川期を代表する並郭式城郭の典型とされる。長崎県内で当該期の城郭は唯一であり、その資料的価値は極めて高い。



森岳城跡 本丸南面横矢掛



森岳城跡 本丸虎口



森岳城跡縄張り図 (1/2500)

### 93-3 福田城跡（ふくだじょうあと）

- (1) 所在地…長崎市福田本町
- (2) 小字名…不明
- (3) 時期…福田氏の居城、天正期か。
- (4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約73m ③現況…神社・山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『西浦上村郷土史』

- (6) 歴 史

『郷村記』に「古記に曰、本丸東西十間、南北十三間、此の城水ノ手なし築く時代不知」とある。

- (7) 遺 構…槽台・石積

主曲輪と二の曲輪からなる極めてシンプルな形状の城館。主曲輪には槽台があり、主曲輪から二の曲輪にかけて稲荷神社が鎮座している。主曲輪の後背地（北側縁辺部）には、幅が狭い三日月形の階段状の曲輪が数枚あり、こぶし大の角礫を利用した石積が築かれている。二の曲輪はほぼ長方形を呈し、周囲は石積が施されている。石積と三日月形の曲輪は城館が存在した時代以降の所産の可能性が強い。

- (8) 残存状況

曲輪部分に神社があり、石垣などの形状からかなり後世の改変をうけている城館である。ただし、長崎開港以前の福田浦の拠点となった城館であった可能性が強く、今後の詳細な調査に期する部分が大い。



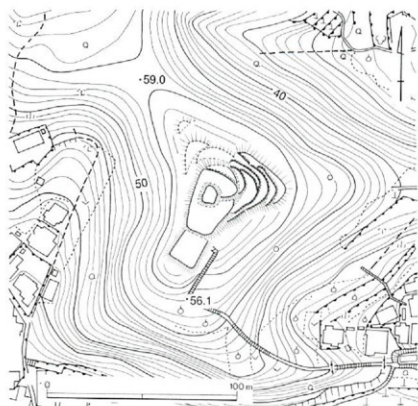
福田城跡 遠景（福田古城）



福田城跡 主曲輪北側切岸



福田城跡 主曲輪槽台



福田城跡縄張図

### 93-8 俵石城跡 (たわらいしじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市大龍町・平山町・竿浦町・深堀町
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…室町時代か、深堀氏の居城。
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂 ②標高…約350m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『長崎縣西彼杵郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史

深堀氏はもと上総国の御家人で、1255(建長7)年、肥前国戸八浦(現在の長崎市街地南部から野母半島西部にかけての地域)の地頭職となり、元寇の頃から現地に土着し、以後地頭領主としてこの地を支配した。同氏は絶えず長崎氏と対立を続け、戦国時代には深堀純賢が長崎純景にしばしば攻撃を加えたという記録がある。

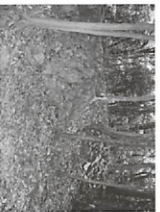
- (7) 遺構…石塁・畝状堅堀

東西約300m、南北最大幅で約100mと広大な平場を有する曲輪であり、周囲には高さ約1.5mの石塁が築かれている。石塁の内側は、犬走り状の浅い空堀が一周しており、通路として利用されたものと推測される。曲輪東側の石塁は幅広で角を有し、槽台状の高まりが見られる。また石塁の数箇所に入口と思われる途切れた部分が見られる。曲輪の南東側には8条の畝状空堀群が確認されており、堀幅や深さが若干異なることから、堅堀造成の時期的な差異を有する可能性がある。

- (8) 残存状況

城山の山頂に開けた曲輪であり、深堀神社の祠が鎮座していることもあり非常に良好な残存状況で

ある。平場の広さや塁壁の状況など累内の他の城郭と異なる性格が見られ、広範囲な地域を含めた体系的調査が必要である。



備石城跡 曲輪石壁



備石城跡 竃形壁



備石城跡平面図

#### 98-1 高浜城跡（たかはまじょうあと）

(1) 所在地…長崎市高浜町

(2) 小字名…「城山」

(3) 時期…天正期か

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約95m ③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…『郷村記』

(6) 『郷村記』に「その昔三浦公の築いた城跡として石垣が所々に残る。また大堀・小堀という地名が残る」とある。深堀氏一族の高浜氏の居城と思われる。

(7) 遺構…堀切・土塁・帯曲輪・堅堀

細長い丘陵上に立地する城郭で、丘陵頂部から先端部にかけて狭小な曲輪が段状に続いている。ただ曲輪の広さは建物を構えるには非常に狭い。丘陵の根元部からは3条の堀切と土塁で断ち切っている。また、主曲輪の南側には帯曲輪に沿って6条の堅堀が配されている。

(8) 残存状況

現在、高浜ダムが隣接して建設されており、城を取り巻く環境は改變している。ただ、曲輪の面積は非常に狭いものの、堀切や堅堀など防衛的な機能は非常に強く、南からの勢力を阻む砦的な城郭と考えられる。城主や築城時期については今後の詳細な検証が必要である。



高浜城跡 遠景（高浜城）



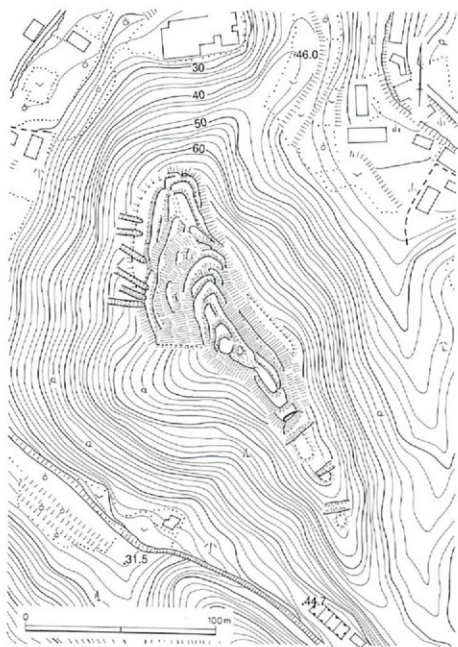
高浜城跡 大手口（高浜城）



高浜城跡 堅堀



高浜城跡 堀切



高浜城跡縄張り図



101-1 日野江城跡（ひのえじょうあと）【国史跡（昭和57年7月3日）指定】

(1) 所在地…南島原市北有馬町戊

(2) 小字名…「浦口谷」

(3) 時期…明応5年(1496)～元和2年(1616)

(4) 立地等

①立地…台地 ②標高…約80m ③現況…公園 ④所有…公有地、民有地

(5) 文 献 ①古文書…『16・7世紀イエズス会日本報告集』『日本王国記』『長崎縣南高来郡村誌』

(6) 歴 史

イエズス会報告では有馬晴信が石垣や階段を造るなど屋敷地を改築した様子が記されている。イスパニア商人アピラ・ヒロンの記録には城内の屋敷の華やかな装飾の様子や日野江の周辺地形についてふれられている。村誌では城が東西5町、南北10町の広さで自然地形を利用した山城であることを述べる。また有馬氏の遠祖が築城、原城築城の後は日野江を隠居城と定め、有馬が日向に転封後、一国一城令により元和元年に廃城となった経緯が記されている。

(7) 遺 構…空堀・土塁・石垣・櫓台・石段

城郭は本丸を中心に東に二の丸、西側の独立丘陵に三の丸が位置する。各々は独立した防御線を形成し、現在までに大小あわせて計15箇所の曲輪の存在が確認されている。本丸北側は谷が深く入り組んだ複雑な地形を成し、その地形を生かした壘状の落ち込みがある。近年の二の丸を中心とした発掘調査では、中央部に100m続く階段遺構や、仏塔を転用した石段が確認され、有馬氏の仏教を排しキリスト教を保護した歴史を物語る遺物として興味深い。また石段脇には切石技術を用いた石垣が見られ、同時期の城郭に見られない独特のものであることから外来技術の存在が指摘されている。

(8) 残存状況

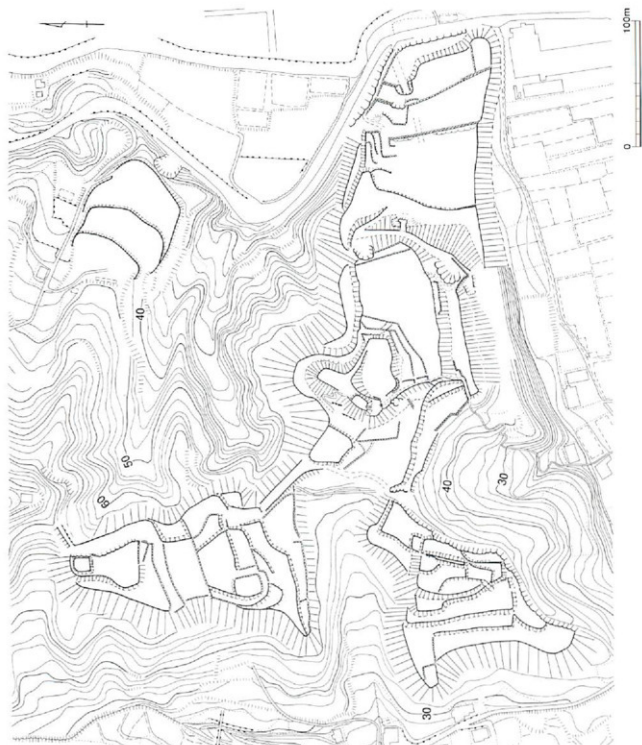
史跡として公園整備され公有化を進めているため、城全体の遺構の残存状況はおおむね良好である。ただ農道の開削により切岸端部が削平されるなど近年の開墾によって石垣等の構造物が破壊されている箇所もある。日野江城は有馬氏の最盛期に築城された城であり、丘陵全体を城郭化した典型的な中世山城である。また同氏はキリシタン大名として著名であるゆえ、キリスト教や南蛮貿易に関連する独特の遺構、遺物も多く出土しており、城郭史のみならず文化史的観点からも極めて重要な城と言える。



日野江城跡 本丸曲輪



日野江城跡 二の丸石垣



日野江城跡縄張り図 (1/3000)

## 101-2 原城跡（はらじょうあと）【国史跡（昭和13年5月30日）指定】

(1) 所在地…南島原市南有馬町乙・丁

(2) 小字名…「既」・「既平」・「駒崎」・「北三ノ丸」・「南三ノ丸」・「三ノ丸」・「二ノ丸」・「廻ノ池」・「東二ノ丸」・「鳩山出丸」・「西二ノ丸」・「桐ノ木谷」・「山下」・「三崎」・「本丸」

(3) 時期…明応5（1496）年～元和2（1616）年

(4) 立地等 ①立地…台地 ②標高…31m ③現況…公園ほか ④所有…公有地・民有地

(5) 文 献 ①古文書…「原城紀事」「北肥戦誌」「1604（慶長9）年日本準管区年報」「1603年（慶長8）度日本報告」「1600（慶長5）年度日本報告」「日本キリスト教会状況報告」「長崎懸南高来郡村誌」 ②郷土誌等…「大系」「南有馬町誌」ほか

(6) 歴 史

有馬氏8代である貴純の時代、1492（明応5）年に築城されたとされるが、一方で日野江城が居城としてあり、おそらくは日野江城の支城として築城されたものと思われる。後の宣教師による報告で、有馬氏が日野江城から原城へ本拠を移転する状況が伝えられているため、本格的に城郭として整備されたのは晴信の頃と思われる。この経緯の中で教会建設を優先するために、当初は建設予定だった天守の工事を中断した経緯も記されている。有馬氏の日向転封後、1616（元和2）年に大和五条より松倉氏が入封し、一国一城の令によって森岳（島原）城を築城するにおよび廃城となった。1637（寛永14）年、島原・天草の一揆勢が立て籠もり「島原の乱」がおこる。

(7) 遺 構…石垣・櫓台・土塁

(8) 残存状況

島原半島南部の海岸に突き出した丘陵部に位置し、南北1200m、東西50mの広大な範囲にまたがる。周囲は崖または断崖で北から東、および南面を海で囲まれ、西面には低湿地が広がる。丘陵南寄りの標高31mある最高所に本丸があり、枡形小口や南に突出する櫓台など高石垣で築かれている。島原の乱後に幕府勢により徹底的に破却されており、枡形小口などは埋没している。本丸の南側は松山出丸（天草丸）が細長く伸び、搦手口である大江口がある。本丸の北側に二ノ丸、三ノ丸と続くが、本丸との二ノ丸は東の海岸から入り込んだ谷と空堀とで仕切られている。二ノ丸から三ノ丸へと緩やかに傾斜し、両者の間は谷で仕切られている。三ノ丸には大手口が見られ、また海に面した箇所土塁の残存が見られる。二ノ丸および三ノ丸の西側斜面には、帯曲輪状の平坦面が多数見られる。



原城跡 空堀



原城跡 三の丸土塁



原城跡 天草丸遠景



原城跡 本丸石段



原城跡縄張図 (本丸)



原城跡縄張り図 (全体) (1/5000)

### 101-3 原城陣屋跡 (はらじょうじんやあと)

(1) 所在地…南島原市南有馬町

(2) 小字名…「上陣屋」・「中陣屋」・「下陣屋」・「町口上」・「山寺」・「六才田」・「山崎」・「東小江」・「小江」・「鐘掛松」・「須ノ内」・「山中」・「八幡田」・「中須ノ内」・「乗越」・「田町」・「廣間」・「石白谷」・「鷲ノ巣」・「小鷲ノ巣」

(3) 時期…寛永14 (1637) 年

(4) 立地等…①立地…丘陵 ②標高一 ③現況…民有地 ④所有…民有地

(5) 文献…①古文書…『嶋原御陣図』(柳川古文書館) など

(6) 歴史

島原の乱における幕府勢の布陣をあらわす『嶋原御陣図』などでは約80カ所の陣屋が記されている。また原城と陣屋の間には長大な櫓が設けられ、原城に延びる仕寄り道や井楼が築かれている。

(7) 遺構…曲輪

(8) 残存状況

原城を西側から望む陣屋跡①は諸資料から寺沢陣屋の前面に位置する。楕円形の曲輪で、南側にやや下がる段差が見られる。西側は大きく削られているが、南から東側にかけては帯曲輪状の平坦面が見られる。

原城に対面する丘陵部の西側に位置する陣屋跡②は、鍋島勝茂(佐賀藩)の陣屋と推定されている。楕円形の曲輪が主郭となり、南から西面にかけて多くの腰曲輪が見られる。東面は急峻な傾斜で、北面は道路により削られている。現在、主郭には電波塔があり、その工事の際にかなりの削平を受けたことが伺える。

陣屋跡③は「重箱山」と呼ばれ、幕府勢が和蘭大砲を据えたところといわれる。楕円形を呈する茶山状の丘があり、その周囲は緩やかな平坦面をなしている。曲輪であったろうが、現在はみかん畑となっており判然としなない。

陣屋跡④は「牢屋跡」と呼ばれる細長い丘陵先端部で、櫓台のような不定形の高まりと、その周辺に平坦面が見られる。

陣屋跡⑤は丘陵先端部に位置し、台形状の曲輪が主郭となり、北面および何面に幅のある腰曲輪が見られる。北側の尾根伝いに堀切は見られない。

陣屋跡⑥は「鐘掛松」と呼ばれる丘陵先端部で、伝承では幕府勢が警鐘を吊した松があったという。楕円形の平坦面があり、現在は神社が祀られている。



原城陣屋跡① 曲輪



原城陣屋跡② 遠景





原城陣屋跡③ 遠景



原城陣屋跡④ 曲輪



原城陣屋跡⑤ 遠景



原城陣屋跡⑥ 曲輪



原城陣屋跡縄張り図(1)





原城陣屋跡縄張図(2)

#### 101-5 大浦城跡（おおauraじょうあと）

(1) 所在地…南島原市西有家町里坊本丸平

(2) 小字名…「川原」

(3) 時期…南北朝期（14世紀後半）に、大垣城（「有江氏」の本城）の出兵として築城か。

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…約58m ③現況…山林・竹林・畑地・神社など ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…『北肥戦誌』

(6) 歴史…1383（永徳3）年、有馬氏と探題（今川了俊）軍との大浦城での攻防があったという。

(7) 遺構…空堀・土塁

主に主曲輪と二の曲輪で構成されている。先端の主曲輪は一段高い槽台とその周辺に平場が形成されており、北側は空堀で寸断されている。但し、空堀の底面と主曲輪周辺の平場とはほぼ同じ高さである。二の曲輪は、現在ほとんどが畑地として利用されているため城の形状を残さないが、北側に約5mの空堀（箱堀）があり、その内側に幅約10mの土塁状の高まりが見られる。城の先端から空堀まで約240mを測る。当時の石垣は見られない。

(8) 残存状況

城の形状は判然としないが、残存する空堀と土塁などから城の規模が推測される平山城である。明代の青花（景德鎮窯）が表採されており、14世紀から16世紀初頭にかけて利用された可能性がある。



大浦城跡 主曲輪



大浦城跡 北側空堀（箱堀）



大浦城跡縄張り図



## 第4節 概略図

### 1-1 結石山城跡 (ゆいしいしままじょうあと)

- (1) 所在地…対馬市上対馬町河内
- (2) 小字名…「高平」・「在所」・「奥方ヶ浦」
- (3) 時期…中世 (文禄の役1592)
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…181m
  - ③現況…公園
  - ④所有…公有地
- (5) 文献 ①古文書…『津島紀事』 ②郷土誌等…『改訂対馬島誌』『長崎懸上懸郡村誌』『大系』
- (6) 歴史…『改訂対馬島誌』に「古へ防人と烽火とを置きし跡なり。又山の裏海近くに文禄年間加藤清正砦を構へたる所あり、肥後殿の城と呼ぶ」とある。
- (7) 遺構…石垣・礎石建物跡・櫓列
- (8) 残存状況…標高183mの急峻な山頂部に位置し、山頂から南東方向に4つの曲輪からなる。2003 (平成15) 年の範囲確認調査で、山頂部の主郭とされる曲輪から5×2間の礎石建物と櫓列が確認されたほか、主郭東側の曲輪の東側に石垣が見つかっている。主郭と東側の曲輪は平坦面を造成しているのに対し、下段の2つの曲輪は尾根筋に簡単な切岸を施すだけで、自然な傾斜地を残している。



1-1 結石山城跡

### 1-2 内方山城跡 (うちかたやまじょうあと)

- (1) 所在地…対馬市上対馬町河内
- (2) 小字名…「向ウ原」・「向ウ在所」
- (3) 時期…1591 (天正19) 年
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…60~89m
  - ③現況—
  - ④所有—



1-2 内方山城跡

- (5) 文 献 ①古文書…『津島紀事』『長崎縣上懸郡村誌』②郷土誌等…『新対馬島誌』  
 (6) 歴 史…『郡村誌』には「天正辛卯毛利高政來て軍事を整する時之を築きて至れり 津島史略に  
 天正十九年毛利高政來監 軍事屯河内云々とあるは則ち之れを指すものなり」とある。  
 (7) 遺 構…曲輪  
 (8) 残存状況…山頂尾根の東北側に狭い平坦面がある。

**13-1 棧原城跡** (さじきばらじょうあと)

- (1) 所在地…対馬市厳原町棧原  
 (2) 小字名…「棧原町」・「立石」  
 (3) 時 期…1678(延宝6)年～1878(明治11)年

(4) 立地等

- ①立地…台地・段丘 ②標高…32m ③現況…公共用地(自衛隊駐屯地) ④所有…公有地

- (5) 文 献 ①古文書…『長崎縣下懸郡村誌』②郷土誌等…『大系』『新対馬島誌』『厳原町誌』

- (6) 歴 史…1678(延宝6)年に対馬藩主の宗義真によって築城された。これまで宗氏の居城であった金石城は船着き場からの距離が近すぎて朝鮮通信使の行列が整わず、威容を示すことができなかった。そのため、町の最奥部に位置する棧原城に移り、また通りの幅を広げたとされる。

- (7) 遺 構…石積、礎石、溝  
 (8) 残存状況…現在は陸上自衛隊対馬分遣隊が置かれており、その敷地内および近辺に石積が残る。また唯一残る城門は高麗門と呼ばれる。



13-1 棧原城跡

**14-1 宗重尚の屋敷跡** (そうしげひさのやしきあと)

- (1) 所在地…対馬市厳原町内山  
 (2) 小字名— (3) 時 期—  
 (4) 立地等 ①立地…谷 ②標高—8m  
 ③現況…宅地 ④所有…民有地

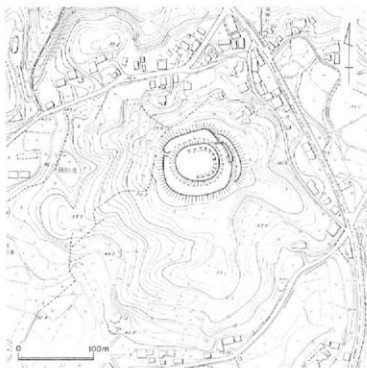


14-1 宗重尚の屋敷跡

- (5) 文 献 ②郷土誌等…『角川日本地名大辞典』
- (6) 歴 史…1246(寛元4)年に阿比留氏を討って対馬を奪取し、対馬宗家の祖となった宗重尚が隠遁した地であり、墓が残る。
- (7) 遺 構…石垣
- (8) 残存状況…山裾の平地が比定地で、地元では「殿様の屋敷跡」と伝えられている。石垣があったようだが、現在は葦となっている。

### 15-8 風早城跡 (かざはやじょうあと)

- (1) 所在地…岩崎市勝本町大久保触
- (2) 小字名…「大久保」
- (3) 時 期…正平年間(1346~70)
- (4) 立地等  
 ①立地…台地 ②標高…92m  
 ③現況…山林 ④所有…民有地



15-8 風早城跡

- (5) 文 献  
 ①古文書…『岩崎名勝図誌』  
 ②郷土誌等…『大系』『岩崎島の古城』
- (6) 歴 史…『図誌』には「此城ハ誰人の築しといふ事詳ならず。子城の址(東西二十三間南北十五間)東西方に門跡ありへとも、正しくしれかたし。内外の隙の跡ハ島となれり。此所武末(勝本城)よりもや、高し。子城地にハ大石多くありて、屋形など建し所ともみえず」と伝えている。また正平間に志佐氏が代官の田口氏を置いていたとされる。
- (7) 遺 構…土塁・石積
- (8) 残存状況…主部である円形の曲輪を帯曲輪が取り囲む。主部の東側に低い土塁が残り、同様に帯曲輪の東側にも土塁が残る。帯曲輪の一部に石積が見られるが、構築時期は不明である。

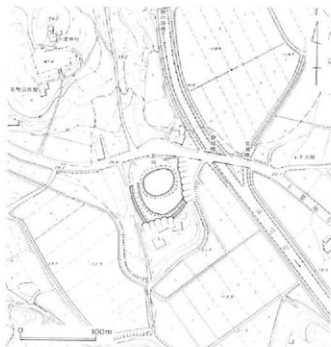
### 16-3 樋詰城跡 (ひのつめじょうあと)

- (1) 所在地…岩崎市勝本町新城東触
- (2) 小字名…「尻井」
- (3) 時 期…文永年間(1264~75)
- (4) 立地等  
 ①立地…丘陵先端 ②標高…32m



③現況…寺社境内 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『宍岐名勝図誌』  
②郷土誌…『大系』『宍岐島の古城』『宍岐郷土史』『勝本町史』
- (6) 歴 史…『図誌』には「此城、往昔庄司の居城なりといへり。本丸東西拾八間、南北十四間、堀の周り六十五間、深七尺七寸」とある。1274（文永11）年の元寇の際、守護代の平景隆が合戦の後に自害したと伝える。
- (7) 遺 構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…平景隆を祀る新城神社殿がある曲輪が主郭と思われる。主郭より一段低い南側にやや広めの曲輪があり、空堀と土塁が巡っている。北から西側は道路に削られている。



16-3 種誌城跡

#### 16-19 鶴翔城跡（つるかけじょうあと）

- (1) 所在地…志岐市芦辺町中野郷西融
- (2) 小字名…「城」
- (3) 時 期…応永年間（1394～1428）
- (4) 立地等
- ①立地…独立丘陵 ②標高…98m
- ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『宍岐名勝図誌』  
②郷土誌等…『大系』『宍岐郷土史』
- (6) 歴 史…『図誌』には「統風土記伝、此城、東西四町余、南北三町余はかり、腰の周囲七町はかり…本丸の石垣の周囲貳町半、丑寅の方に門跡あり。其中に東西貳町半、南北貳町余尺、周囲拾壹間半、高四尺七寸余の石垣あり。俗呼て城八幡といふ。」とある。『郷土史』には「塩津留助次郎源経…当田に、弦懸城をおく」とあることから、この城が塩津留氏一族の城であったことが伺える。
- (7) 遺 構…石塁
- (8) 残存状況…梅ノ木ダムに面した丘陵の頂上部に立地し、最高所の周囲を大きな石を用いた石塁が巡る。石塁の内側3～4mは帯曲輪状になっている。門跡は判然としない。



16-19 鶴翔城跡

#### 16-24 浅井古城跡 (あさいこじょうあと)

- (1) 所在地…志岐市石田町湯岳射手吉触
- (2) 小字名…「朝日」 (3) 時期…中世
- (4) 立地等
  - ①立地…独立丘陵 ②標高…57m
  - ③現況…山林 ④所有…
- (5) 文 献 ①古文書…『志岐名勝図誌』  
②郷土誌等…『志岐の古城』
- (6) 歴 史…『図誌』には「此城、東西二百三十間余、南北三百八十四間、周囲六百五十四間半、高九十間。頂上子城（東西廿間、南北十八間）隙あり。文明年中落城して、波多家に帰すといへとも、誰人の居城といふ事詳ならず」とある。
- (7) 遺 構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…南北に楕円形の2つの曲輪があり、ともに北側に土塁がある。両曲輪に標高差はあまりない。空堀は北側曲輪の東にのみ残る。丘陵の頂上部に位置するが、四方から採石が行われ、頂上部の一部も失われている。



16-24 浅井古城跡

#### 18-1 亀丘城跡 (かめおかじょうあと)

- (1) 所在地…志岐市郷ノ浦町本村触
- (2) 小字名…「大里」
- (3) 時 期…永仁元（1293）年～明治時代
- (4) 立地等
  - ①立地…独立丘陵 ②標高…63m
  - ③現況…公園 ④所有…公有地
- (5) 文 献 ①古文書…『志岐名勝図誌』  
②郷土誌等…『大系』『志岐の古城』
- (6) 歴 史…1293（永仁元）年に岸岳城主の波多宗無が築き、1472（文明4）年に波多泰が志岐を支配して修築したと伝える。その後は波多氏の領有が続いたが、1565（永禄8）年に日高甲斐守喜が奪取した後、平戸松浦氏の臣下となっている。『図誌』には本丸について「頂上部にありて東西十五間、南北十二間、二の丸よりの高さ凡五間程なり。乾堀あり。…四方石垣なし」と伝えている。
- (7) 遺 構…空堀・土塁・石垣
- (8) 残存状況…本丸は亀丘公園、二の丸や三の丸は幼稚園や駐車場になっており、遺構の残存は本丸

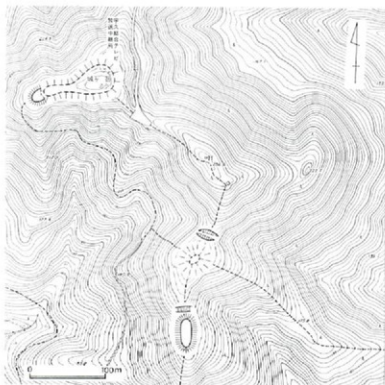


18-1 亀丘城跡

部に限られる。本丸とされる曲輪は楕円形で、周囲に空堀が巡る。空堀の周囲は土塁状に掘り残されており、北側斜面には石垣が見られる。「図誌」には「四方に石垣なし」とあるので、構築時期は検討を要する。主郭部南側は大きく削られている。

#### 21-1 城ヶ岳城跡（しろがたけじょうあと）

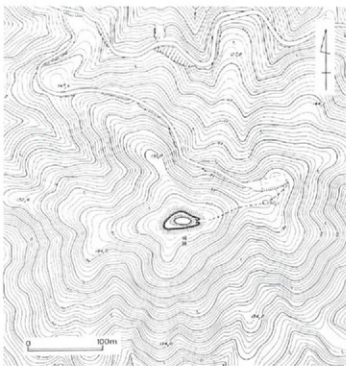
- (1) 所在地…佐世保市宇久町平・木場
- (2) 小字名…「城」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…250-260m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…「長崎懸北松浦郡村誌」 ②郷土誌等…「大系」
- (6) 歴史— (7) 遺構…堀切
- (8) 残存状況…城ヶ岳の山頂は大きく削られており、遺構の有無は確認できない。これまで出城とされた南側尾根筋の頂上部に曲輪が見られ、また2ヶ所に堀切を設けていることから、こちらが主郭であった可能性が高い。



21-1 城ヶ岳城跡

#### 29-4 城山城跡（しろやまじょうあと）

- (1) 所在地…南松浦郡新上五島町浦桑郷
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…台地・段丘 ②標高…215m ③現況…山林、公園 ④所有…公有地
- (5) 文献 ①古文書…「公譜別録拾遺」 ②郷土誌等…「長崎懸南松浦郡村誌」「大系」
- (6) 歴史…1566（永禄9）年に宇久純定が平戸松浦氏の侵攻に備えて築城したとされるが、確証はない。他には平



29-4 城山城跡

安末期に清原氏による築城、または室町期に青方氏による築城が推測されている。

- (7) 遺 構…石積
- (8) 残存状況…標高200m程の山頂部に位置し、主郭は楕円形の曲輪で、東側に大手とされる門跡が残る。曲輪は野面積みで固めているが、臨時的な砦という印象を受ける。

### 30-3 田舎城跡 (いなかじょうあと)

- (1) 所在地…西海市崎戸町平島
- (2) 小字名…
- (3) 時 期…室町時代
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂 ②標高…120m
  - ③現況…山林 ④所有…
- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』  
②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史…(7) 遺 構…曲輪
- (8) 残存状況 楕円形の曲輪が丘陵の頂上部にある。詳細は不明



30-3 田舎城跡

### 41-1 玉之浦城跡 (たまのうらじょうあと)

- (1) 所在地…五島市玉之浦町玉之浦
- (2) 小字名…「元倉」
- (3) 時 期…明応年間 (1492~1501) ~  
大永元年 (1521)
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵 ②標高…70~94m
  - ③現況…山林、寺社境内
  - ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『長崎縣南松浦郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史…宇久氏の一族である玉之浦氏の城で、明応年間に玉之浦十郎像が築城したとされる。
- (7) 遺 構…堀切・土塁
- (8) 残存状況 金比羅神社の南西に主郭となる楕円形の曲輪があり、西側は堀切状に尾根がくびれる。金比羅神社と主郭の間の尾根は平坦になっている。

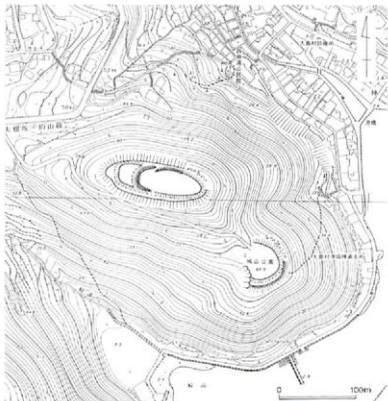


41-1 玉之浦城跡

47-2 大島城跡 (おおしまじょうあと)

- (1) 所在地…平戸市大島村前平
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…68~101m
  - ③現況…山林、公園
  - ④所有…公有地

- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…石塁・帯曲輪・石積
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、楕円形の曲輪が主郭となる。主郭の西から北側にかけて石塁が積まれ、北側は食い違い虎口になっている。主郭の西側にやや低い方形の曲輪があり、これら2つの曲輪を取り囲む帯曲輪も見られる。主郭の南東側にも平坦面があり、現在は城山公園となっている。ここには低い石積が見られる。

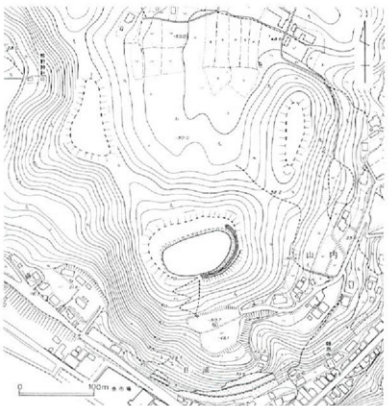


47-2 大島城跡

51-9 陣笠城跡 (じんがさじょうあと)

- (1) 所在地…平戸市田平町山内免
- (2) 小字名…「日ノ浦」・「城山」
- (3) 時期…延徳年間(1489~92)
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…73m
  - ③現況…山林、公園
  - ④所有…公有地

- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…空堀・石積・土塁
- (8) 残存状況…現在は公園になっており、造成により大きく削られている。主郭は楕円形の曲輪で、周辺に低い土塁が見られる。主郭の東から南側にかけて空堀が残り、部分的に石積が施されている。



51-9 陣笠城跡

主郭から北東および北西に伸びる尾根上には出曲輪があるとされるが、1491（延徳3）年の松浦弘定との合戦の際に一時的に援軍の有馬勢が陣を置いた名残であるかもしれない。

#### 51-12 里城跡（さとじょうあと）

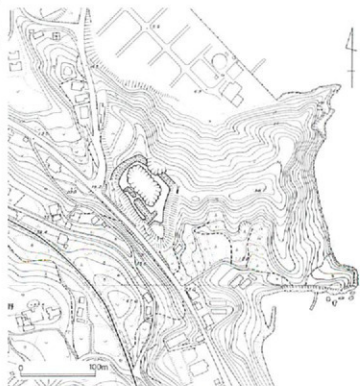
- (1) 所在地…平戸市田平町里免
- (2) 小字名…「北」・「城」
- (3) 時期…1192（建久3）年ごろか
- (4) 立地等
  - ①立地…台地・段丘 ②標高…42m
  - ③現況…畑地、宅地
  - ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『壺陽録』  
②郷土誌等…『大系』『田平町郷土誌』
- (6) 歴 史…松浦党の峰氏が城主とされる。戦国時代の城主としては峰昌が知られ、1491（永徳3）年に弟で平戸の松浦弘定と争っている。
- (7) 遺 構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…方形の曲輪で、土塁と空堀が残る。周辺地形からも山城というよりは方形居館といえる。南から西側にかけては道路や畑地で削られている。現在、曲輪の中に民家が1軒建っている。



51-12 里城跡

#### 52-4 向山館跡（むこうやまやかたあと）

- (1) 所在地…松浦市御厨町里免
- (2) 小字名…「坊ノ上」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵先端 ②標高…45m
  - ③現況…山林、荒蕪地
  - ④所有…民有地
- (5) 文 献 ②郷土誌等…『松浦市史』
- (6) 歴 史—
- (7) 遺 構…空堀・土塁



52-4 向山館跡



- (8) 残存状況…海に面した丘陵の基部に位置し、主郭は方形の曲輪である。主郭の北西から北東側にかけて塹壕がほぼ直角に折れながら巡る。また主郭の南西側には短い空堀、さらに土塁が設けられている。主郭内は土取りによるものが大きく削り取られている。

#### 53-1 日本山城跡 (ひもとやまじょうあと)

- (1) 所在地…松浦市麓島町原尻

- (2) 小字名…「黒岩」

- (3) 時期…中世

- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…75m

③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ②郷土誌等…「大系」

【麓島町郷土誌】

- (6) 歴史…松浦党の祖とされる源

久が築城したとされる。また文水の役においては源管がこの地にあって奮戦したという。

- (7) 遺構…石積・腰曲輪

- (8) 残存状況…絶立丘陵の頂上部に位置し、楕円形の曲輪が主郭となる。

主郭北側の縁辺部には低い石積が残り、斜面は切岸を施している。主郭の北側斜面には3段の腰曲輪が見られる。



53-1 日本山城跡

#### 54-2 紐差城跡 (ひもさしじょうあと)

- (1) 所在地…平戸市連紐差町

- (2) 小字名…「園田」

- (3) 時期…中世

- (4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…99m

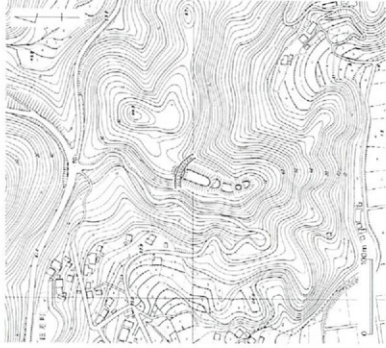
③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文献 ①古文書…「新陽録」

②郷土誌等…「大系」

- (6) 歴史…(7) 遺構…堀切・土塁

- (8) 残存状況…山頂から南西に伸びる尾根上に位置する。山頂部の尾根筋を堀切で分断し、堀切は堅固状に東西の谷



54-2 紐差城跡



部に伸びる。堀切の南側尾根上に2段の曲輪がある。尾根先には狭い曲輪があるが、楷台かどうかわからずしない。山頂部および山頂部から東に伸びる尾根先に遺構は確認されなかった。

#### 56-2 陣ノ内城跡 (じんのうちょうあと)

- (1) 所在地…松浦市志佐町里免
- (2) 小字名…「馬立場」・「陣ノ内」
- (3) 時期…延徳年間(1489～92)
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵 ②標高…10m
  - ③現況…水田、畑地、寺社境内、宅地 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…「壺陽録」  
②郷土誌等…「大系」「松浦市史」
- (6) 歴 史…峰昌(田平)と松浦弘定(平戸)の延徳年間の戦い

の後、峰昌は名を純本と改めて志佐氏を相続したが、これを次男の純次に譲って志佐郷の陣内に住まわせたとされる。

- (7) 遺 構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…現在、主郭にとされる曲輪には寿昌寺と若宮神社があり、これら寺社の周囲には低い土塁が断続的に巡らされている。主郭の南側に空堀があり、これを境に城の縄張り是不明瞭となる。

#### 61-2 鳥屋城跡 (とりやじょうあと)

- (1) 所在地…北松浦郡佐々町古川免
- (2) 小字名…「椎葉」・「松元」・「遠見岳ノ下」
- (3) 時期…文明年間(1469～87)
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂 ②標高…216m
  - ③現況…山林 ④所有…公有地、民有地



56-2 陣ノ内城跡



61-2 鳥屋城跡

- (5) 文 献 ①古文書…『密陽録』
- (6) 歴 史…『密陽録』に「戸谷の城」と記され、文久年間に佐々氏一族の志加田氏がいたとされるが、松浦弘定が叔父源藏を入嗣させるなど、平戸松浦氏による支配が強められた。戦国末期に松浦隆信は相神浦の松浦親を攻める際、吉井の領主である大野源七郎を鳥屋城に派遣しており、合戦に際しての砦として造営されたと考えられている。
- (7) 遺 構…石垣・櫓台・堅堀
- (8) 残存状況…標高216mの山頂に位置し、主郭は楕円形の小規模な曲輪である。北側は尾根上に平坦面があり、堅堀が2本確認されている。主郭の南面にも腰曲輪が見られる。

#### 61-9 三丸館跡 (みつまるやかたあと)

- (1) 所在地…佐世保市下本町 (2) 小字名—
- (3) 時 期…戦国時代初期
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…32m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献— (6) 歴 史—
- (7) 遺 構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…丘陵先端部に位置し、主郭は長方形の曲輪である。空堀で尾根筋を分断しており、土塁は堀底から3m程ある。



61-9 三丸館跡

#### 61-18 佐世保城跡 (させぼじょうあと)

- (1) 所在地…佐世保市富田町・八幡町
- (2) 小字名— (3) 時期…永徳年間(1381～84)
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…84m  
③現況…宅地 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『松浦家世伝』『新豊寺代記』②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史…戦国期は遠藤氏が居城としたとされる。1573(元亀3)年頃、大村純忠の家臣で遠藤千右衛門が松浦鎮信に下り、鎮信は佐世保に遠藤但馬守盛胤を置いたという。
- (7) 遺 構…堀切
- (8) 残存状況…主郭と思われる曲輪の南から南西にかけて段々の平坦面が見られるが、後世の造成である可能性も高く、どこまでが曲輪であるか判然としにくい。主郭の北東側に北側は大きく削られている。



61-18 佐世保城跡

#### 66-9 金ヶ崎城跡 (かねがさきじょうあと)

- (1) 所在地…佐世保市上原町・早苗町
- (2) 小字名…「城谷」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等  
①立地…山頂 ②標高…125m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切・土塁
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部を主郭とする曲輪で、自然地形のまま緩やかな平坦地となっており、北側に土塁が見られる。主郭の東側には尾根上の曲輪が伸びる。また北側の斜面には帯曲輪が巡り、西側の尾根筋を堀切で分断している。

#### 66-14 鷹ノ巣城跡 (たかのすじょうあと)

- (1) 所在地…佐世保市下の原町
- (2) 小字名…「鷲ノ川」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等  
①立地…丘陵 ②標高…106m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ②郷土誌等…『大系』 (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切
- (8) 残存状況…丘陵の山頂部に位置し、主郭は円形の曲輪である。主郭の南東側に腰曲輪と堀切を設け、北西側には緩やかな地形の平坦面が見られる。



66-9 金ヶ崎城跡



66-14 鷹ノ巣城跡

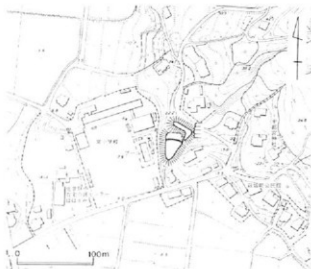
#### 66-17 宮村館跡 (みやむらやかたあと)

- (1) 所在地…佐世保市萩坂町
- (2) 小字名…「タチノ前」
- (3) 時期…古代・中世
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…19~25m  
③現況…公園 ④所有…公有地
- (5) 文 献 ①古文書…「大村郷村記」  
③郷土誌等…「大系」

- (6) 歴 史…宮村通定が小峰城に移るまでの居館とされる。宮村氏の初代、宇都宮通景は永享年間(1429~1440)にこの地の地頭職に補せられ、のちに宮村氏を名乗ったとされる。

- (7) 遺 構…土塁

- (8) 残存状況…舌状台地の先端部に位置し、主郭となる曲輪は2段の平坦面からなり、三角形に近い形状である。5m程もある土塁を尾根筋に設けている。



66-17 宮村館跡

#### 67-4 内海城跡 (うつみじょうあと)

- (1) 所在地…東彼杵郡波佐見町湯無田郷
- (2) 小字名…「館」
- (3) 時 期…戦国時代
- (4) 立地等 ①立地…山頂、山腹 ②標高…165m  
③現況…山林 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…「郷村記」  
②郷土誌等…「大系」「波佐見文化」

- (6) 歴 史…大村氏が武雄の後藤氏に備えた出城の1つ。元来は在地領主の内海修理亮泰平が築いたとされるが、のちに大村氏の被官となった。

- (7) 遺 構…堀切・塹壕・空堀・土塁

- (8) 残存状況…山頂部に位置し、尾根上の

細長い曲輪が主郭となる。曲輪の南側に土塁と二重の空堀が見られる。また北東側の尾根筋を分断する堀切は北西斜面に続いて塹壕になっている。

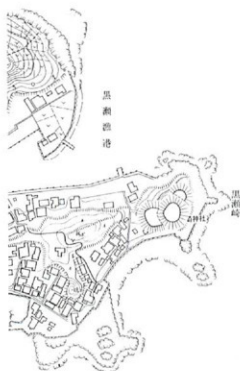


67-4 内海城跡

#### 70-1 黒瀬城跡 (くろせじょうあと)

- (1) 所在地…西海市大島町黒瀬
- (2) 小字名…「宮ノ道」 (3) 時 期—

- (4) 立地等  
 ①立地…丘陵先端 ②標高…16～21m  
 ③現況…寺社境内 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ②郷土誌等…『大村史談』『大島町郷土誌』
- (6) 歴 史— (7) 遺 構…腰曲輪
- (8) 残存状況…黒瀬崎の宮崎神社の境内で、円形の曲輪である。北東および西側に腰曲輪のような平坦面が見られる。



70-1 黒瀬城跡

70-4 天崎城跡 (あまがさきじょうあと)

- (1) 所在地…西海市西海町天久保郷
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時 期…室町時代～戦国時代
- (4) 立地等  
 ①立地…台地 ②標高…29m  
 ③現況…山林 ④所有…
- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』『長崎縣西彼杵郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』『西海町郷土誌』
- (6) 歴 史…大村氏の被官とされる在地領主の天久保氏が城主とされる。天久保氏は近世初頭に大村氏によって改易され、代わりに田島氏が知行した。
- (7) 遺 構…堀切
- (8) 残存状況…岬の先端部に位置し、岬の付け根を堀切っている。三方を海に囲まれ、急峻な崖で守られる。曲輪は段差をつけて形成する程度の簡単な造りで、岩盤が露頭しているところも多い。田島氏の墓が置かれる。



70-4 天崎城跡

71-4 小峰城跡 (こみねじょうあと)

- (1) 所在地…佐世保市長畑町
- (2) 小字名…「長畑」・「上小宗」
- (3) 時 期…1475 (文明7) 年
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…50m ③現況…寺社境内、果樹園 ④所有…民有地

- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『大系』

(6) 歴 史…1475(文明7)年に宮村通定が築城したという。永正年間に宮村氏は断絶し、代わりに大村純次が城主となる。1607(慶長12)年に本家大村氏に追放され、廃城となる。『郷村記』には「高さ1町余、大手西の方、本丸東西三十間、南北八間、石垣の高さ五尺或いは六尺。腰部東西三十間、南北二十間、四方堅固の城なり」と伝える。

- (7) 遺 構…帯曲輪

(8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、愛宕神社の境内が主郭となる。周囲には帯曲輪状に平坦地が巡るが、あまり明瞭ではない。北西側の尾根に3段の狭い平坦面も見られる。主郭は石塁で囲まれていたと文献に記されているが、一部を除いては明治初年に他へ運ばれたという。



71-4 小峰城跡



71-6 片平城跡

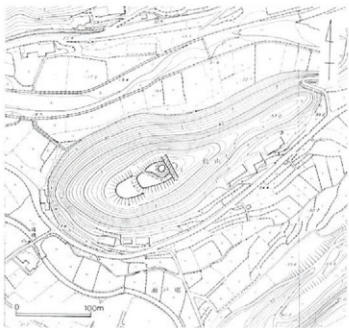
#### 71-6 片平城跡 (かたひらじょうあと)

- (1) 所在地…東彼杵郡川棚町中組郷  
 (2) 小字名— (3) 時 期—  
 (4) 立地等 ①立地…山腹 ②標高…80m  
 ③現況…山林 ④所有—

(5) 文 献 ②郷土誌等…『川棚町郷土誌』

(6) 歴 史— (7) 遺 構…堀切

(8) 残存状況…丘陵中腹、短く張り出した尾根筋を堀切で隔絶し、北東方向に3段の狭い平坦面を形成する。



72-7 小峰城跡

#### 72-7 小峰城跡 (こみねじょうあと)

- (1) 所在地…東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷  
 (2) 小字名— (3) 時 期…中世  
 (4) 立地等  
 ①立地…独立丘陵 ②標高…73m

③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献— (6) 歴 史—

(7) 遺 構…堀切

(8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、堀切と三段の曲輪からなる。最高段の曲輪が主郭かどうか、また円形の隆起があるもの槽台かどうか判然としない。

#### 74-1 本郷城跡 (ほんごうじょうあと)

(1) 所在地…西海市崎戸町本郷

(2) 小字名…「遠見」

(3) 時 期…中世

(4) 立地等

①立地…丘陵 ②標高…70m

③現況…山林 ④所有…民有地

(5) 文 献 ①古文書…「郷村記」  
②郷土誌等…「大系」

(6) 歴 史…「郷村記」に「當嶋地頭往古ハ不知、信濃守純伊代よりは小佐々彈正領地之。慶長四年迄ハ子孫小佐々吉之允知行す」とあり、小佐々氏が城主であったとされる。

(7) 遺 構…石積

(8) 残存状況…桁円形の曲輪が2ヶ所見られ、石積が巡らされている。それ以外にも石積の区画が見られる。石積・時期は不明である。



74-1 本郷城跡

#### 75-6 鳥越城跡 (とりごえじょうあと)

(1) 所在地…西海市大瀬戸町雪浦上郷

(2) 小字名…「城ノ越」

(3) 時 期…元弘元 (1331) 年か正平年間 (1346~70)

(4) 立地等

①立地…山頂 ②標高…71m

③現況…山林 ④所有—



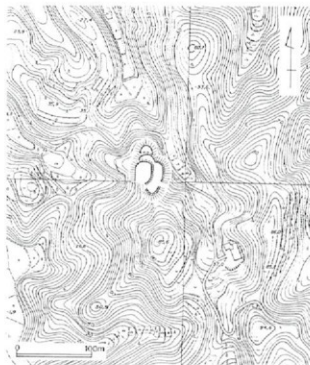
75-6 鳥越城跡



- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』『長崎縣西彼郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』『大瀬戸町郷土誌』
- (6) 歴 史…大村氏の被官で、在地領主の田川氏が城主とされる。田川氏が敵対に転封後は、大村左近がこの地の領主であったといわれる。
- (7) 遺 構…土塁・帯曲輪・石積
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、自然地形を利用した菱形の曲輪が主郭である。主郭の周囲に帯曲輪が見られ、その南面には土塁が設けられる。主郭の一部に石積が見られるが、構築時期は不明である。主郭の北側尾根に平坦面があるが、その性格は判然としない。

#### 75-7 鳥加城跡 (とりかじょうあと)

- (1) 所在地…西海市西彼町鳥加郷
- (2) 小字名…「茅場」 (3) 時 期—
- (4) 立地等 ①立地…山腹 ②標高—  
③現況— ④所有—
- (5) 記 録 ①古文書…『郷村記』 ②郷土誌等…『西彼町郷土誌』
- (6) 歴 史— (7) 遺 構…石積
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部を2段に造成し、曲輪の東側縁辺は高さ1.5～2m程の石積を巡らせる。東側の切岸は急峻で、旗竿石らしき穿孔のある板石が見られる。



75-7 鳥加城跡

#### 76-2 古城(喰場郷) (こじょう(じきばごう))

- (1) 所在地…西海市西彼町喰場郷
- (2) 小字名…「池ノ本」 (3) 時 期—
- (4) 立地等  
①立地…丘陵 ②標高…20～30m  
③現況— ④所有—
- (5) 文 献  
①郷土誌等…『西彼町郷土誌』
- (6) 歴 史—
- (7) 遺 構…腰曲輪
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、主郭は楕円形の曲輪である。主郭から北側および東側に2～3m程の段差がある腰曲輪が2段続く。東西は急峻な傾斜である。



76-2 古城跡

#### 76-8 舞岳城跡 (まいたけじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市琴海形上町
- (2) 小字名…「シロ」 (3) 時期—
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…102m
  - ③現況…山林、寺社境内
  - ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『郷村記』長崎縣西彼杵郡村誌 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史…城主は在地領主の相川氏で、かつて相川知仙が立て籠もり、喜々津主殿と合戦したと伝える。
- (7) 遺構…石積・櫓台
- (8) 残存状況…細長い曲輪で中央に櫓台が見られる。石積(石塁)が要所に見られる。



76-8 舞岳城跡

#### 77-1 城ノ尾 (しろのお)

- (1) 所在地…東彼杵郡東彼杵町里郷
- (2) 小字名— (3) 時期—
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…65m
  - ③現況…山林
  - ④所有—
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…櫓台
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、楕円形の曲輪が主郭となる。二段の隆起は櫓台と思われる。



77-1 城ノ尾

#### 79-1 田原城跡 (たばるじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市小長井町田原
- (2) 小字名…「城山」
- (3) 時期…戦国時代
- (4) 立地等
  - ①立地…山頂
  - ②標高…278m
  - ③現況…山林
  - ④所有…民有地



79-1 田原城跡



81-1 神浦城跡

- (5) 文 献 ①郷土誌等…『大系』『小長井町郷土誌』
- (6) 歴 史— (7) 遺 構…空堀
- (8) 残存状況…頂上部に緩やかな平坦面があり、その周囲に空堀が巡るが、南東側で途切れる様相である。南側は採石のため削られている。北西側にある石垣は、空堀に伴うものとは考えにくい。

#### 81-1 神浦城跡 (こうのうらじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市神浦江川町 (2) 小字名…「城ノ尾」
- (3) 時 期…南北朝期～戦国期・永和年間 (1375～79)
- (4) 立地等 ①立地…独立丘陵 ②標高…44m ③現況…公園 ④所有…公有地
- (5) 文 献 ①古文書…『新撰土系録』『郷村記』 ②郷土誌等…『大系』『外海町誌』
- (6) 歴 史…永和 (1375～79) 年間に在地領主の大串小次郎俊長が築いたとされる。
- (7) 遺 構…空堀・石垣・柱穴
- (8) 残存状況…2段の曲輪からなり、北東側に空堀をもつ。旧外海町教委により発掘調査が行われた際、3×4間の柱穴を基軸とした建物跡が確認されている。

#### 82-5 松尾城跡 (まつおじょうあと)

- (1) 所在地…西彼杵郡時津町子々川郷
- (2) 小字名…「城ノ尾」 (3) 時 期—
- (4) 立地等 ①立地…丘陵先端、独立丘陵 ②標高…103m ③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『郷村記』 (6) 歴 史—
- (7) 遺 構…堀切・帯曲輪
- (8) 残存状況…独立丘陵の北側峰の頂上部に位置し、北西側に主郭と思われる半円形の曲輪、南東側

に方形の曲輪が配され、2つは堀切で分断されている。主郭にはやや比高差のある腰曲輪が付く。急峻な山頂にあり、東側谷部からの攻撃を想定した堀切かと思われる。松尾古城（時津町日並郷）との類似性が指摘できる。

#### 82-6 松尾古城跡（まつおこじょうあと）

- (1) 所在地 西彼杵郡時津町日並郷
- (2) 小字名 「城山」
- (3) 時期一
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…187m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『長崎縣西彼杵郡村誌』  
②郷土誌等…『大系』『時津郷土史考』『時津町郷土誌』

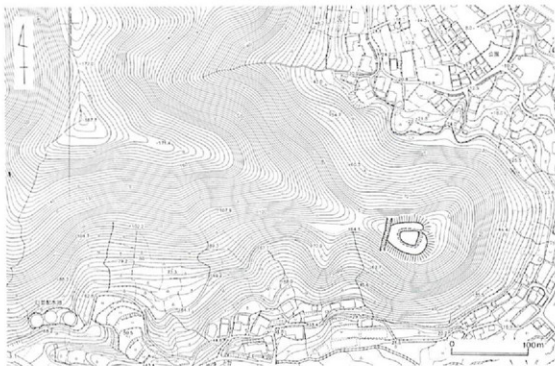
(6) 歴史一

(7) 遺構…堀切・帯曲輪

- (8) 残存状況…番入堂といわれる頂上部に位置し、西側の尾根筋を堀切って分断している。曲輪は楕円形に近い形状で、土塁などはない。急峻な山頂にあり、立地および縄張りには松尾城（時津町子々川郷）との類似性が指摘できる。



82-5 松尾城跡



82-6 松尾古城跡

#### 84-2 岸高城跡（きしだかじょうあと）

- (1) 所在地…大村市中里町
- (2) 小字名…「岸高」 (3) 時期…戦国期
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵先端
  - ②標高…54m
  - ③現況…山林、宅地
  - ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『郷村記』  
②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切・土塁・帯曲輪
- (8) 残存状況…二股に分かれる丘陵先端部に位置する。北側の先端部は宅地のため、遺構は判然としない。南側の丘陵部に主郭となる楕円形の曲輪が形成される。曲輪の北側には土塁が設けられ、2段の腰曲輪が傾斜地に見られる。西側は堀切で隔絶し、南側は腰曲輪が巡る。



84-2 岸高城跡

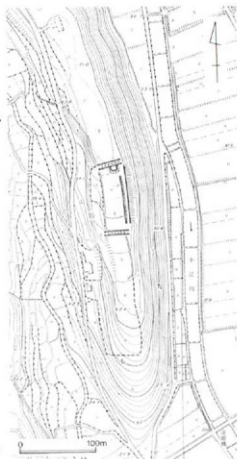
#### 84-13 高城跡（たかしろあと）

- (1) 所在地…諫早市高城町
- (2) 小字名—
- (3) 時期…文明年間（1469～87）
- (4) 立地等
  - ①立地…丘陵
  - ②標高…50m
  - ③現況…公園
  - ④所有…公有地
- (5) 文献 ①古文書…『西郷記』  
②郷土誌等…『大系』『北高来郡史』『諫早市史』『小長井町郷土誌』『森山町郷土誌』
- (6) 歴史…文明年間に西郷高善が宇木城から諫早方面に進出して船越城に入り、ついで高城を築城したという。1587（天正15）年に龍造寺家晴の攻撃で落城した後は龍造寺氏（後の諫早氏）の居城とされた。『西郷記』には四方に高槽を構え、多数の矢狭間があったと伝えている。



84-13 高城跡

- (7) 遺構…土塁・帯曲輪・石垣
- (8) 残存状況…楕円形の急峻な丘陵に位置し、西から北側にかけては本明川が斜面を這うように流れる。自然地形を利用した主郭となる曲輪が2つ東西に並ぶが、西側が2m程が高い。この2つの曲輪を取り囲むように帯曲輪が巡るが、東側はやや突出する。南側の掘野近くに土塁が部分的に残されている。主郭と帯曲輪には石垣が一部残る。主郭の虎口に横矢掛が見られる。



84-21 小江城跡

#### 84-21 小江城跡 (こえじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市高来町折山
- (2) 小字名…「城ノ本」 (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…50~80m  
③現況…畑地、山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①郷土誌等…『高来町郷土誌』
- (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切・石積
- (8) 残存状況…尾根上の平坦面を曲輪とし、南北に堀切を入れる。東側の切岸は急峻だが、西側は比較的緩やかである。曲輪の東側に石積が見られるが、構築時期は不明。北側の堀切の際に高台があるが、槽台かどうか判然としない。

#### 85-18 杉峰城跡 (すぎみねじょうあと)

- (1) 所在地…雲仙市瑞穂町西郷己・西郷戊
- (2) 小字名…「東屋敷」・「上東屋敷」・「上西屋敷」・「下西屋敷」・「城」
- (3) 時期…南北朝時代
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…30~60m  
③現況…畑地、宅地  
④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『大川文書』『深江文書』『河上神社文書』『北肥戦誌』『鎮西要路』『長崎懸肥前國南高来郡村誌』  
②郷土誌等…『大系』『諫早市史』『吾妻町誌』
- (6) 歴史…南北朝期に築城されたとされる。城主の西郷次郎が南朝方として守っていたが、



85-18 杉峰城跡

1352（観応3・正平7）年に北朝方の小保氏連の攻撃を受けて落城している。

- (7) 遺 構…空堀・土塁・土橋・虎口
- (8) 残存状況…舌状台地の先端に位置し、尾根筋を空堀で分断して曲輪を形成している。空堀の東側で枡形虎口が見られ、途中には土橋が残る。曲輪部はミカン畑や畑地となり、旧状を留めていない。

#### 86-11 浅井城跡（あさいじょうあと）

- (1) 所在地…雲仙市国見町神代庚
- (2) 小字名…「城ノ久保」 (3) 時 期…戦国時代
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…60-70m  
③現況…山林 ④所有…民有地

#### (5) 文 献

①古文書…「長崎懸肥前國南高来郡村誌」

②郷土誌等…「大系」「吾妻町誌」

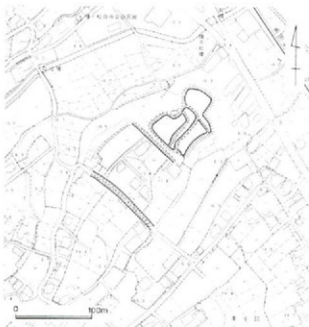
- (6) 歴 史…神代城の山手口を守る支城とされる。1584（天正12）年3月の沖田総の戦いの後、島津・有馬軍に攻められ落城している。

#### (7) 遺 構…堀切・土塁

- (8) 残存状況…南から北へ延びる尾根の先端に位置し、尾根筋を掘り切って曲輪を形成している。主郭は枡形部の曲輪で、南側の尾根筋を堀切と土塁で守る。主郭から北東側へさらに尾根が伸び、その付け根に三角形の腰曲輪が見られる。



86-11 浅井城跡



86-18 東空閑城跡

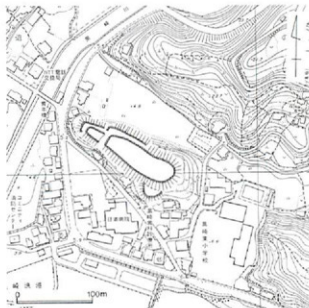
#### 86-18 東空閑城跡（ひがしこがじょうあと）

- (1) 所在地…島原市有明町大三東丙
- (2) 小字名…「下尾首」・「上尾首」
- (3) 時 期…戦国時代
- (4) 立地等 ①立地…丘陵先端 ②標高…13m  
③現況…畑地、宅地 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…「島原大概様子書」「長崎懸南高来郡村誌」 ②郷土誌等…「大系」
- (6) 歴 史…永禄年間に空閑越後が城主であったとされる。
- (7) 遺 構…空堀・堀切
- (8) 残存状況…標高13m程の低丘に位置し、空堀で南西側の丘陵と分断している。曲輪は数段の平坦面により形成されるが、後世の造成で旧状を留めていない。空堀の南西側に堀切状の道が掘削されているが、詳細は不明である。



#### 87-2 田中城跡 (たなかじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市下黒崎町
- (2) 小字名…「松本谷」 (3) 時期…中世
- (4) 立地等
  - ①立地…低丘陵 ②標高…20m
  - ③現況…山林、畑地 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『郷村記』
- (6) 歴史…この城と佐賀領大城との間で戦いがあり、大城方が破れて南の海に綱を下ろし、それを伝って逃げたと伝えている。
- (7) 遺構…石積
- (8) 残存状況…主郭とされる楕円形の曲輪の周囲と北西側の周囲に石積があるが、構築時期は不明である。



87-2 田中城跡

#### 88-5 宮尾城跡 (みやおじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市柿泊町 (2) 小字名… (3) 時期…近世
- (4) 立地等
  - ①立地…台地、段丘 ②標高…74m ③現況…山林、果樹園 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『長崎縣西彼杵郡村誌』 ②郷土誌等…『大系』『長与可郷土誌』
- (6) 歴史…福田忠兼が築城したと伝えられる。
- (7) 遺構…堀切
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部に位置し、主郭は台形状の比較的広い曲輪である。南東側の尾根筋を鉤形に折れる堀切で分断している。



88-5 宮尾城跡

#### 88-10 はるの城跡

- (1) 所在地…西彼杵郡時津町野田郷
- (2) 小字名…「山間」
- (3) 時期…室町時代
- (4) 立地等  
①立地…山頂 ②標高…117m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献  
①郷土誌等…「時津町郷土誌」
- (6) 歴史…有馬勢が籠もって戦ったという伝承がある。
- (7) 遺構…槽台
- (8) 残存状況…大原野神社の南側山頂部に、主郭と思われる曲輪が形成される。主郭の南側に槽台が見られる。山頂の尾根筋は岩盤が露出して瘦せ尾根になっている。



88-10 はるの城跡

#### 88-11 唾飲城跡 (つのみじょうあと)

- (1) 所在地…西彼杵郡時津町西時津郷・西彼杵郡長与町齊藤郷
- (2) 小字名…「大手」・「登道」・「福島」
- (3) 時期…天文年間 (1532~55)
- (4) 立地等  
①立地…山頂 ②標高…116m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…「郷村記」  
②郷土誌等…「大系」「時津郷土史考」「時津町郷土誌」
- (6) 歴史…天文 (1532~55) 年間に長与権之助が築いたとされる。1586(天正14)年9月に長与太郎左衛門純一が大村純忠に背いたため攻撃を受け、落城した。
- (7) 遺構…堅堀・槽台
- (8) 残存状況…主郭とされる曲輪は5段ほどの平坦面で、最頂部の曲輪の西側斜面に堅堀が1本掘られる。主郭部の南西側に一段低い曲輪があり、槽台状の高まりが見られる。



88-11 唾飲城跡

### 89-3 飯盛城跡 (いもりじょうあと)

- (1) 所在地…西彼杵郡長与町嬉里郷
- (2) 小字名…「中通」 (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…37m  
③現況…寺社境内 ④所有…民有地
- (5) 文献— (6) 歴史— (7) 遺構…腰曲輪
- (8) 残存状況…丘陵の頂上部で円形の曲輪が主郭となる。  
南西側に腰曲輪が見られる。



89-3 飯盛城跡

### 89-8 狭田城跡 (せばたじょうあと)

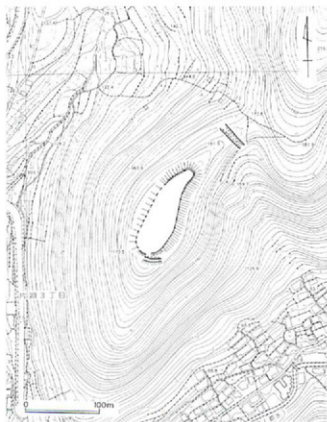
- (1) 所在地…長崎市江平1丁目
- (2) 小字名— (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…丘陵先端 ②標高…144~175m  
③現況…山林、宅地 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①郷土誌等…「大系」 (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切
- (8) 残存状況…丘陵の先端に狭い曲輪と、その南東側の標高150m程の頂上部に楕円形の曲輪があり、こちらが主郭と思われる。主郭の南東には堀切があり、尾根筋を分断している。



89-8 狭田城跡

### 89-9 焼山城跡 (やきやまじょうあと)

- (1) 所在地…長崎市片淵3丁目・鳴滝3丁目
- (2) 小字名— (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…191m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文献 ①郷土誌等…「大系」
- (6) 歴史…室町時代に長崎氏が深堀氏に対して築城したとされるが、詳細は不明である。
- (7) 遺構…堀切・石積・土塁・空堀
- (8) 残存状況…自然露が多数露頭する丘陵の頂上部に位置する楕円形の曲輪で、尾根筋側の北東側および南側の空堀付近に石積が見られる。南側の空堀付近には外側へ近い土塁があり虎口状の形状も見られる。曲輪の北東側に浅い堀切があり、尾根筋を分断している。



89-9 焼山城跡

**89-13 平間城山城跡(ひらまじょうやまじろあと)**

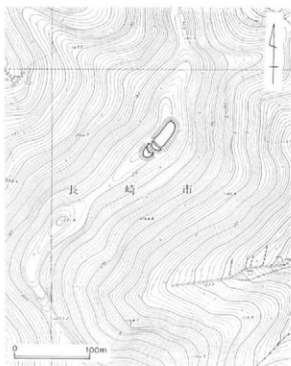
- (1) 所在地…長崎市平間町
- (2) 小字名…「城平」 (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…山麓 ②標高…53m  
③現況…宅地 ④所有…民有地
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…空堀・土塁
- (8) 残存状況…独立丘陵の頂上部に位置し、円形の曲輪が主郭となる。北側に空堀と土塁が残り、南側に腰曲輪が見られる。



89-13 平間城山城跡

**89-20 日見城跡(ひみじょうあと)**

- (1) 所在地…長崎市界1丁目・界2丁目
- (2) 小字名— (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…210m  
③現況…山林 ④所有—
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…腰曲輪
- (8) 残存状況…山頂部に位置し、楕円形の曲輪が主郭となる。南西側に腰曲輪が見られる。



89-20 日見城跡



89-21 戸石城跡

**89-21 戸石城跡(といしじょうあと)**

- (1) 所在地…長崎市上戸石町・東町
- (2) 小字名…「藤ノ尾」、「茶ノ木」、「菅賢岳」
- (3) 時期…中世
- (4) 立地等 ①立地…丘陵先端 ②標高…271m  
③現況…山林 ④所有—
- (5) 文献 ①郷土誌等…「大系」 (6) 歴史—

- (7) 遺構…石塁
- (8) 残存状況…270m程の山頂部に位置し、「大歳神」を祀る祠がある。主郭は楕円形の曲輪で、祠の周囲が若干高い。曲輪の周囲には低い石塁が部分的に見られる。矢上の集落と橋湾を一望できる立地で物見砦であった可能性がある。

#### 89-23 満城跡 (まんじょうあと)

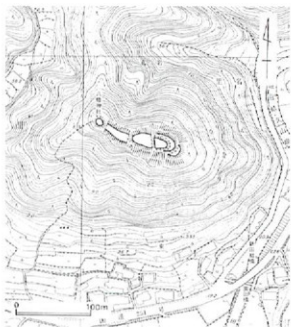
- (1) 所在地…長崎市戸石町
- (2) 小字名…「上満城」・「影平」
- (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…30~43m  
③現況…畑地 ④所有…公有地、民有地
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…堀切
- (8) 残存状況…丘陵の先端部に位置し、南側の尾根筋は堀切で分断している。主郭となる曲輪は楕円形で、現在は給水タンクが置かれている。主郭の北側から西側にかけて帯曲輪が見られ、3m程の比高差がある。



89-23 満城跡

#### 89-24 東城跡 (とうじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市飯盛町里
- (2) 小字名…「東」 (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…142m  
③現況…山林 ④所有—
- (5) 文献— (6) 歴史—
- (7) 遺構…腰曲輪
- (8) 残存状況…全体が岩山で、東西に伸びる尾根上に曲輪が作られる。尾根の西側には円形の曲輪があり、現在は八幡神社が祀られる。尾根の東側に主郭と思われる2つ曲輪があり、東側の曲輪が一段高い。主郭の東側には腰曲輪が2ヶ所見られる。



89-24 東城跡

#### 89-26 金尾城跡 (かねおじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市多良見町中里
- (2) 小字名…「炭平」
- (3) 時期…室町末期頃
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…40m ③現況…寺社境内、宅地 ④所有…民有地

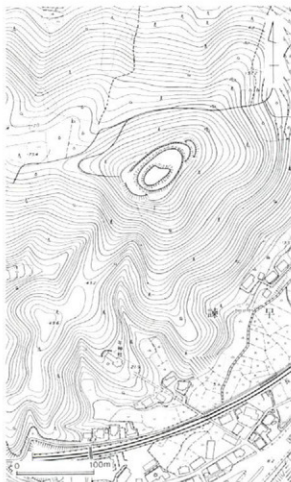
- (5) 文 献 ①郷土誌等…『大系』『多良見町郷土誌』  
 (6) 歴 史…喜々津氏の居城と伝えられている。  
 (7) 遺 構…堅堀・櫓台  
 (8) 残存状況…丘陵の最頂部に主郭と思われる円形の曲輪があり、その東側に比較的広い曲輪が広がる。主郭の南側斜面に2本の堅堀が見られる。主郭部の西側は団地造成で削られている。



89-26 金尾城跡

90-1 久山城跡 (くやまじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市久山町 (2) 小字名—  
 (3) 時 期…中世  
 (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…97m  
 ③現況…山林 ④所有…民有地  
 (5) 文 献 ①郷土誌等…『大系』  
 (6) 歴 史— (7) 遺 構…石垣  
 (8) 残存状況…頂上部は公園整備されている。主郭は楕円形で、東側には高さ1m程の石垣が巡らされている。主郭の北側には一段低い帯曲輪状の平坦面があり、この北側にも高さ3m程の石垣が見られる。ともに構築時期については検討を要する。



90-1 久山城跡



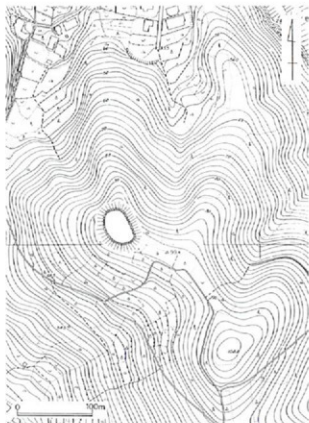
90-3 平木場城跡

90-3 平木場城跡 (ひらこばじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市飯盛町平古場  
 (2) 小字名…「狩場」・「柿副」  
 (3) 時 期…南北朝期か  
 (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…60m  
 ③現況…山林 ④所有…民有地



- (5) 文 献 ②郷土誌等…『大系』『北高来郡誌』『長崎県郷土誌』『飯盛町郷土誌』
- (6) 歴 史…中世後期に江浦氏という土豪がいたといわれ、一族などの居館であった可能性がある。
- (7) 遺 構…堀切・土塁・帯曲輪
- (8) 残存状況…曲輪は丘陵の北西部と南東部に分けられる。北西部の曲輪は北東側に延びる尾根と南東部の曲輪とを堀切によって分断している。また尾根筋の堀切の外側には土塁が見られる。南東部の曲輪は北西部の曲輪よりもやや標高が低い。主郭部と思われる楕円形の曲輪を帯曲輪が巡り、南東部先端に土塁、南側の切岸に3ヶ所の腰曲輪も見られる。南東部の曲輪が比較的残りがよく、また丘陵の斜面も急である。



90-11 長野城跡

#### 90-11 長野城跡 (ながのじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市長野町
- (2) 小字名…「高野」
- (3) 時 期…南北朝時代初期
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…102m  
③現況…山林 果樹園 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『深江文書』
- (6) 歴 史…1374(応安7)年3月と6月、今川満範の軍勢が長野城を攻撃し、深堀時広・時久が参陣したと伝えている。
- (7) 遺 構…石積
- (8) 残存状況…平場の周辺に石積が見られるが、構築時期は不明である。

#### 90-13 小野城跡 (おのじょうあと)

- (1) 所在地…諫早市小野町・宗方町
- (2) 小字名…「高城」・「池田」・「西馬場」
- (3) 時 期…鎌倉時代中期か室町時代後期
- (4) 立地等 ①立地…丘陵 ②標高…40m  
③現況…山林 ④所有…民有地
- (5) 文 献 ①古文書…『西郷記』  
②郷土誌等…『大系』『大村史談』『森山町郷土誌』
- (6) 歴 史…西郷氏によって築城され、西郷尚善の時代には高城の支城として数えられている。『西



90-13 小野城跡



(6) 歴史…1372 (応安5・文中元)年に、山田荘に所領を持つ田原氏能(豊後大友氏一族)によって築かれた後、島原氏の

- (5) 文献 ①古文書…『長崎徳肥前兩高米郡村誌』②郷土誌等…『大系』『吾美町誌』
- (4) ①立地等  
③現況…畑地、山林、宅地  
④所有…民有地
- (3) 時期…室町時代前期ごろ
- (2) 小字名…「城」
- (1) 所在地…雲仙市吾美町粟林名

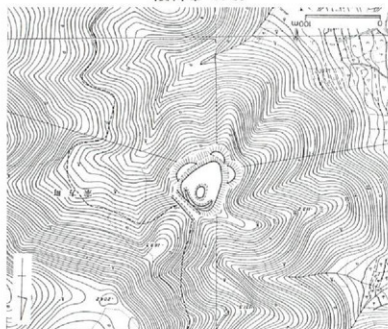
91-8 山田城跡 (やまだじょうあと)

根があるが、主郭の土塁と堀切で分断している。主郭部の中央に構台と思われる隆起がある。



- (8) 残存状況…方形の主郭とされる曲輪は卵形で、南側斜面に3ヶ所の腰曲輪が見られる。北東側に尾
- (7) 遺構…堀切・土塁・構台
- (5) 文献…(6) 歴史…
- (4) ④所有…民有地  
③現況…山林  
②標高…100m  
①立地等 ①立地…丘陵
- (3) 時期…中世
- (2) 小字名…「古原敷」
- (1) 所在地…諫早市宗方町うあと)

90-14 宗方城跡



- 郷記』には1577 (天正5)年頃の城主を西郷昌尚と伝えている。
- (7) 遺構…空堀
- (8) 残存状況…方形の主郭で、南から西側にかけて空堀が掘られる。北側には高さ5m程低い腰曲輪が見られる。東側は切岸のみだが、急な傾斜ではない。

一族で在地領主の山田氏が居城としたとされる。

(7) 遺構…空堀・堀切・櫓台

(8) 残存状況…南北に延びる尾根を堀切り、細長い曲輪を形成している。南側の最頂部には祠があるが、かつては物見櫓あったと思われる。現在は公園として整備されている。

#### 92-2 寺中城跡 (じちゅうじょうあと)



92-2 寺中城跡

(1) 所在地…島原市中野町

(2) 小字名…「城ノ鼻」

(3) 時期…戦国時代

(4) 立地等

①立地…丘陵先端 ②標高…9～13m

③現況…畑地 ④所有…民有地

(5) 文献 ①古文書…「島原大坂様子書」「上井覚兼日記」 ②郷土誌等…「大系」「有明町史」

(6) 歴史…城主は島原氏の家臣、和泉左京とされる。1584(天正2)年の沖田駿の戦いの前夜、龍造寺隆信が陣を張ったといわれる。

(7) 遺構…空堀

(8) 残存状況…緩やかな丘陵の先端に位置する。方形に近い形状の曲輪が2つあり、空堀で分断される。南西側の曲輪の丘陵側に堀切状の道路が掘割されているが、詳細は不明である。

#### 93-5 ツク尾城跡 (つくおじょうあと)

(1) 所在地…長崎市戸町3丁目

(2) 小字名— (3) 時期—

(4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…121m

③現況…山林、事業用地

④所有…民有地

(5) 文献— (6) 歴史—

(7) 遺構…腰曲輪

(8) 残存状況…丘陵の山頂部に円形の曲輪があるが、かなり狭い。頂上部の南側に3段の曲輪が作られ、一番南側で最下段の曲輪が比較的広い。



93-5 ツク尾城跡

#### 93-7 深堀陣屋跡（ふかほりじんやあと）

- (1) 所在地…長崎市深堀町5丁目・6丁目
- (2) 小字名— (3) 時期…江戸初期
- (4) 立地等 ①立地…平地 ②標高…20m  
③現況— ④所有—
- (5) 文 献 ①古文書…『鎮西要略』『フロイス日本史』 ②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴 史…1255（建長7）年に地頭として下向した深堀能仲から、この地を代々領した深堀氏の近世期の館跡。深堀氏は後に佐賀藩の家老職となり、鍋島氏を称した。
- (7) 造 構…石垣
- (8) 残存状況…陣屋の中心部は削平されているが、外郭線は残っている。台形状の主郭となる曲輪の東から南側にかけて石垣がみられる。



93-7 深堀陣屋跡

#### 94-1 武功山尾根突端砦跡（むこうやまおねとったんとりであと）

- (1) 所在地…長崎市鳴滝1丁目
- (2) 小字名— (3) 時期—
- (4) 立地等 ①立地…丘陵先端  
②標高…100m  
③現況…山林  
④所有—
- (5) 文 献 ②郷土誌等…『長崎市史』『長崎市郷土誌』
- (6) 歴 史…長崎七氏の真道氏による築城とされる。
- (7) 造 構…土塁
- (8) 残存状況…丘陵の先端部に位置し、主郭は円形の曲輪である。主郭の東側に土塁が部分的に残る。また南西側に腰曲輪が見られる。



94-1 武功山尾根突端砦跡



94-2 鳥屋城跡

#### 94-2 鳥屋城跡（とやじょうあと）

- (1) 所在地…長崎市上戸町4丁目
- (2) 小字名-(3) 時期-
- (4) 立地等 ①立地…山頂 ②標高…140~177m  
③現況…山林 ④所有-
- (5) 文献-
- (6) 歴史-
- (7) 遺構…腰曲輪
- (8) 残存状況…全体が岩山で、頂上部に狭い曲輪があり、西側に腰曲輪状の平坦面がつく。頂上部の北東側に堀切状の窪みと平坦面が見られるが、遺構かどうか判然としない。

#### 96-9 大垣城跡（おおがきじょうあと）

- (1) 所在地…南鳥原市西有家町慈恩寺
- (2) 小字名…「椎山」
- (3) 時期…南北朝時代
- (4) 立地等  
①立地…山麓 ②標高…98m  
③現況…荒蕪地、畑地  
④所有…民有地
- (5) 文献 ①古文書…『北肥戦誌』  
②郷土誌等…『大系』
- (6) 歴史…南北朝時代における有江氏の居城とされる。また1381（永徳元）年には有馬武資ら南朝方が立て籠もり、九州探題今川了俊と戦ったとされる。
- (7) 遺構…空堀
- (8) 残存状況…丘陵上に位置し、北西側の尾根筋は自然とくびれている。



96-9 大垣城跡

このくびれには一段高い平坦面があり、櫓台の可能性もある。くびれの南東側に曲輪が広がり、空堀で区画されている。東側の斜面に3段の平坦面が形成されており、最上段の中央に井戸がある。

## 第7章 まとめ

### I 中近世城館跡の分布

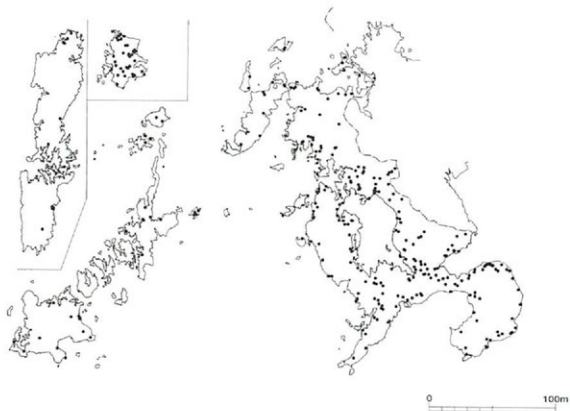
平成17年度から22年度までに実施した調査で確認された城館の位置は第2図のとおりである。大村藩が編纂した「郷村記」や平戸藩が嵯峨島内の名勝を記録した「嵯峨名勝図誌」など地域により詳細な編纂資料が残存している地域については、城館跡の記録が多く、比較的多数の城館が確認されているが、対馬や五島など記録が乏しい地域については、今後あらたな記録の発見を待つかないと考えられ、地名や立地などから城館の存在が疑われるところについては、公共工事の事業前に分布調査を実施するなど、継続した調査が必要と考える。

各地域の城館跡の分布状況について地域ごとに説明してみたい。

長崎市から西彼地区については海岸沿いに面した地域に分布が見られる。特に長崎港周辺や大村湾入口部の西海橋周辺域は幕末に造られた台場跡が多く残る。ただ、中世からの城館跡については長崎氏・深堀氏・福田氏・太田和氏などの領主クラスの居城や居館が点在するものの、大名クラスの大規模な城館跡は見られない。

諫早・大村地区は西郷氏・大村氏に関連する城館跡を中心に海岸部から内陸部にかけて一面に分布が見られる。とくに領境や街道・古道に沿った位置に特に集中することが確認されている。この分布から室町時代から戦国時代にかけての要所がわかり、佐賀の龍造寺氏、武雄の後藤氏などの勢力を警戒していた地域を見ることができる。

高原地区は北と南で大きく様相が異なる。北部は神代氏の鶴亀城跡など拠点的な中規模な城郭はあ



第2図 長崎県における主な城館跡分布図

るものの、大部分は丘陵の先端部に小規模な城館跡が分布している。一方南部は有馬氏の居城日野江城跡や原城跡などの大規模な城郭を中心として、その周辺に中小規模の城館が散在する程度である。

佐世保地区は相浦川流域と早岐瀬戸周辺に分布域が見られる。相浦川流域では室町時代の宗家松浦氏の居城武辺城を中心に、平戸松浦氏との攻防が行われた大智庵城跡や飯盛城跡の中規模な城館が散在する。一方、早岐瀬戸周辺は大村湾の入口である当地域の水利権をめぐる攻防があった地域であり、古くは早岐氏・針尾氏・指方氏、後に平戸松浦氏、大村氏などが多くの中小城館を構築している。

平戸・松浦地区は松浦党に関する地域の拠点的な中規模な城館跡が点在しており、主な城館跡としては宗家松浦氏の梶谷城跡、志佐氏の直谷城跡などがある。また、中世から近世にかけての平戸市域には平戸松浦氏の館山、亀岡城跡などを拠点に港を見下ろせる位置の比較的標高の高い位置に支城が設置されている。

五島は文献が乏しく全体的に把握されている城館跡が少ない。中世では上五島中通島に青方氏関係の城館跡など中小城館が港ごとに確認されている。また福江島は主に近世以降の城館跡で、五島氏の石田城跡、鴨月園跡、富江藩陣屋跡など各地域の拠点的な城館跡が散在する程度である。

壱岐地区は離島でありながらも一國をなしており、非常に多くの城館跡が確認されている。これは『壱岐名勝図誌』により記録が残されていることの功績が大きい。鎌倉時代の文永弘安の役（元寇）から安土桃山時代の秀吉の朝鮮出兵まで様々な史実に関連する地域であり、各時期に成立したと推測される城館跡が島内に散在している。

対馬地区は今までのところ島内全域の城郭の記録を示す文献が明らかになっておらず、城館の分布を十分に確認することはできなかった。周知される城館跡としては、宗氏の居館跡金石城跡、秀吉が朝鮮出兵の前線的な基地として築いた清水山城跡、撃方山城跡などが要所に散在する程度である。現在、県で『宗家文書』の調査を進めている途中であり、今後、城館に係わる新たな記録が解明されることを期待したい。

次に長崎県内の中近世城館跡の立地についてふれてみたい。

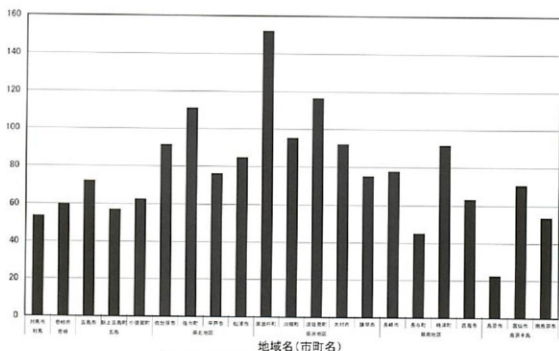
第3図は県内城館跡の地域別標高図である。

対馬は、山がちな地形ではあるものの館跡が立地する場所は港に面する比較的低位部であり平均的な標高は低い。ただ、清水山城など朝鮮出兵の際に築かれた山城は、標高約200mの山頂に立地している。壱岐は最も高い山城でも約110mであり、高い山地がない島の特色をあらわしている。五島については対馬同様、城跡や陣屋が築かれるのは低位部であり平均的には低い。

離島部に比べて、県北地区から東彼杵郡、大村市の北部にかけては標高90m～110mと非常に高い。特に東彼地区は内陸部に位置する城館跡が多く、大村氏と後藤氏の緊張状態を物語るかのごとく旧道が見下ろすことができる比較的高い位置に城館跡が立地している。平戸松浦地区では標高が高い山城として松浦市の梶谷城や平戸市の箕坪城があり、いずれも標高約280mの山頂に立地し、海上を活躍の拠点とする松浦党として、海城を一望できる位置に城を構えるという特徴をあらわしている。

大村市南部から諫早市にかけては平野部に立地する城館跡が多いため平均的に標高は低い。ただ、大村市域の尾城や諫早市高来町古田城など領城を警戒する端城としては比較的高い位置に立地している。長崎市域は標高約100mと比較的高所に立地する城館が多いが、市周辺部や西彼地区は海沿いに面する低丘陵上に立地する場合が多い。長崎市依石城は標高約350mの城山山頂にあり、敵状空堀も

平均標高 (m)



第3図 県内中近世城館跡地域別標高図

配置されていることから、堅固な防御機能を有する城跡としては非常に特異である。高原半島は雲仙普賢岳から延びる丘陵の先端に立地する城館跡が多く全体的に標高は低い。

ただ雲仙市千々石町飯岳城などのように橋湾沿いの内陸に位置する城館は、街道を見下ろすことができる高所に立地している。

## II. 長崎県の城館跡の特色について

### 1 城館の位置

長崎県内における城館跡は、城域の広さが小規模(100m以下)から中規模(100~200m程度)であり、単独では十分な機能を有することができない。したがって複数の城館がそれぞれの機能を持って領地を守っている。その顕著な例を説明したい。

西海市西海町の太田和氏館跡と下り山城跡は、領主の館と領国の境界を守る城として機能すると考えられる。また長与町西高田城跡と東高田城跡(第4図)は街道を挟み対面する位置にあり、領地の入口部を2つの城で挟み込み防御するように配置されている。

戦乱に備え配置された城館跡の顕著な例は、佐世保の早岐地区に見ることができる。大村



第4図 西高田城跡と東高田城跡

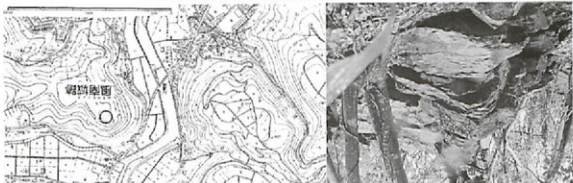


鎌早市真跡城跡と大村市伊賀峠城跡は直線距離で約1kmと非常に近く、西部氏と大村氏の対峙した形状に差異がみられる。

東彼作郡川棚町の小峰城跡と嵐府城跡はいずれも川棚川流の山頂部に立地する城館（第6図）であるが、小峰城跡は石垣で囲まれた主曲輪を有する後藤氏が築いた山城で、一方の嵐府城跡はこれと対峙する位置（第5図）にある。塩浸城の曲輪の形状は小規模な平場が多数配置され、短期間に築かれた様相を見ることが出来る。

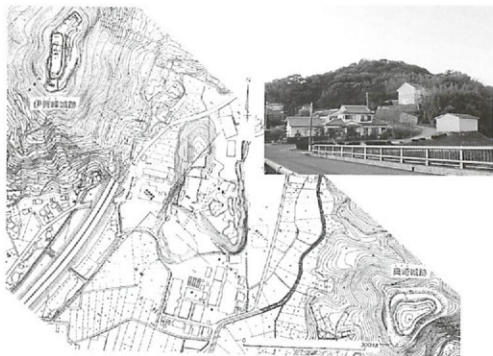
純忠が早岐地区への侵攻のために築いた塩浸城跡は、平戸松浦氏の遺城井手平城跡と小森川を挟んで

第6図 川棚川流の城館跡と小峰城跡の石垣



第5図 佐世保市早岐地区の城館跡と塩浸城跡





第7図 伊賀峰城跡（大村氏）と真崎城跡（西郷氏）〔写真は真崎城近景〕

様子を彷彿することができる（第7図）。この境界は近世の藩境として残っている。

## 2 遺構の特徴

### (1) 櫓台

松浦党に関係する城館跡には、主曲輪に櫓台を設けるものが多い。これは松浦党が海を生活の基盤とする豪族であり、当初の機能としては港の警備のための見張り台として設置されたものと考えられる。平安時代末期に松浦党の祖源久によって築かれたといわれる松浦市梶谷城跡には、主曲輪の南側に楕円形の櫓台が設けられ、北側の眼下には市街地と伊万里湾を望むことができる。また鎌倉時代の志佐氏の居城である佐世保市吉井町直谷城跡は、自然の要隘を利用し曲輪が築かれており、主曲輪の中央と東側には櫓台が2ヶ所設置されている。その他、佐世保市武辺城跡、平戸市箕坪城跡などでも見ることが出来る。

### (2) 曲輪の形態

長崎県内では館跡の形態として円形を呈するものが多い。前述した西海市太田和氏館跡をはじめ、平戸松浦氏居館跡の平戸市館山（館山城跡）、籠手田氏居館跡の籠手田城跡、針尾氏居館跡の佐世保市針尾城跡、同市指方町大刀洗城跡、壱岐市勝本町高津城跡、同市郷ノ浦町帯田城跡などがある。県北地域に多く見られ、室町時代中期から戦国時代に築かれた館跡であることから松浦党との関係が深いと考えられる。いずれも丘陵の先端部に立地していることから、起伏が多い自然の地形をそのまま利用し、丘陵の両側縁部と後背部を空堀と土塁で寸断し曲輪を形成した結果このような形態が成立したと考える。平地が少ない長崎県の特徴的な形態であると思われる。

### (3) 石積と石垣

石垣か石積かの判断については非常に難しいところではあるが、基本的に表込めがあるかどうかを目安としている。ただし、悉皆調査においては掘削を伴わないためにその状況はわかりにくく、隔石

の有無や石材の大きさや積み方の粗雑さなどで見極めた部分が多い。石垣かどうかについては今後の詳細な検証が必要であると考え。

長崎県における石積の始まりは中世城館の古い段階から見ることができるといえる。14世紀後半から15世紀前半に築城されたとされる大村市域の尾城は、玄武岩製板石の石積により曲輪や階段を作り出している。また、15世紀半ば頃に築城されたとされる佐世保市武辺城跡は大口口の正面に数段の石積を築き、比高差を作り出している。

石垣は、城郭構築の際に防衛的要素のある施設として欠かすことのない遺構である。また、その普請には一定の労働力を投入することができる権力と財力が必要となる。それに対し石積は機能的要素が強い。つまり、山がちな地形が多い長崎県地域において城郭を構築の際、建物の建てる一定の広さの平地が必要となる。その際、丘陵全体を掘削し平地を形成することは非常に労力を有する。特に硬い岩盤や自然石が露頭する地質の場合では直のことであり、したがって、ある程度の平地の掘削を行い、その掘削土で斜面を盛り、その端に石積を施し、岸を形成する。こうした曲輪の造成は県内各地で見ることができる。西海市八幡山城跡はその典型的な例であり、結晶片岩の山頂を可能な限り削平し、その結果入手された結晶片岩の板状の石材を周囲に積み上げて平地を造成している。同様な例は、平戸市小富士城跡、雲仙市飯岳城跡、大村市伊賀峰城跡などでも見られ、自然石の露頭が多いところは自然岩を利用し、その岩の間に石積を施す例も多い。

中世城館に石垣が一般的に取り入れられるのは、16世紀後半の天正期ごろといわれる。長崎県における当時の城館跡としては、対馬市厳原町清水山城跡、同市上対馬町撃方山城跡、壱岐市勝本町勝本城跡、東彼杵郡東彼杵町松岳城跡などがある。清水山城跡・勝本城跡は虎口部分周辺に、撃方山城跡は出曲輪の一部に見られ、いずれも秀吉の朝鮮出兵の際に築かれた城郭であり、毛利高元や小西行长など各地の大名が持ち込んだ技術といえる。勝本城跡については松浦鎮信が有馬晴信・大村喜前らの協力を受けて築城したといわれている。おそらく佐賀県唐津市名護屋城跡築城の際の技術をもって勝本城構築にあたり、朝鮮出兵後、その技術を有馬氏は原城跡、大村氏は玖島城跡、松浦氏は亀岡城跡に導入したと考えられる。松岳城跡についても先述したとおり眼下に長崎街道がとおり、佐賀・武雄に通じている。この石垣は佐賀側の監視の目的から同時期に築かれたものではないだろうか。それも、丁度街道から見える位置にのみ石垣を築いていることから、権威を見せつける一種の威嚇行為とも感じられる。

#### (4) おわりに

長崎県中近世城館跡分布調査事業については、とりあえず今年度末の報告書作成をもって事業を完了する。ただし、まだまだ地域的には調査が不十分なところも多く、今後新たな城館跡の発見もあるに違いない。今回のこの事業が長崎県内における城郭研究の基礎資料となり、特に重要な城館跡については、継続的な調査が実施され、今後県・市町及び国指定に向けた取り組みにつなげられていくことができれば幸いである。

本事業を実施するなかで、各市町担当者をはじめ、土地所有者の方々、地元史談会等の方々など、多くの方々にご支援ご協力いただいた。この場をかりて感謝の言葉を申し上げます。

## 報告書抄録

| ふりがな   | ながさきけんちゆうきんせいじょうかんあとぶんぶちようさほうこくしょⅡ    |       |      |    |    |      |      |      |
|--------|---------------------------------------|-------|------|----|----|------|------|------|
| 書名     | 長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ                     |       |      |    |    |      |      |      |
| 副書名    | 詳説編                                   |       |      |    |    |      |      |      |
| 巻次     |                                       |       |      |    |    |      |      |      |
| シリーズ名  | 長崎県文化財調査報告書                           |       |      |    |    |      |      |      |
| シリーズ番号 | 第207集                                 |       |      |    |    |      |      |      |
| 編集者名   | 寺田正剛・林 隆広・宮武直人                        |       |      |    |    |      |      |      |
| 編集機関   | 長崎県教育委員会                              |       |      |    |    |      |      |      |
| 所在地    | 〒850-8570 長崎市江戸町2-13 TEL.095-894-3384 |       |      |    |    |      |      |      |
| 発行年月日  | 西暦2011年3月31日                          |       |      |    |    |      |      |      |
| 所収遺跡名  | 所在地                                   | コ ー ド |      | 北緯 | 東経 | 調査機関 | 調査面積 | 調査原因 |
|        |                                       | 市町    | 遺跡番号 |    |    |      |      |      |
|        |                                       |       |      |    |    |      |      |      |

長崎県文化財調査報告書 第207号  
長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅱ

詳 説 編

平成23年3月31日

編 集 長崎県教育委員会  
長崎県長崎市江戸町2-13

印 刷 株式会社 昭和堂  
長崎県諫早市長野町1007-2